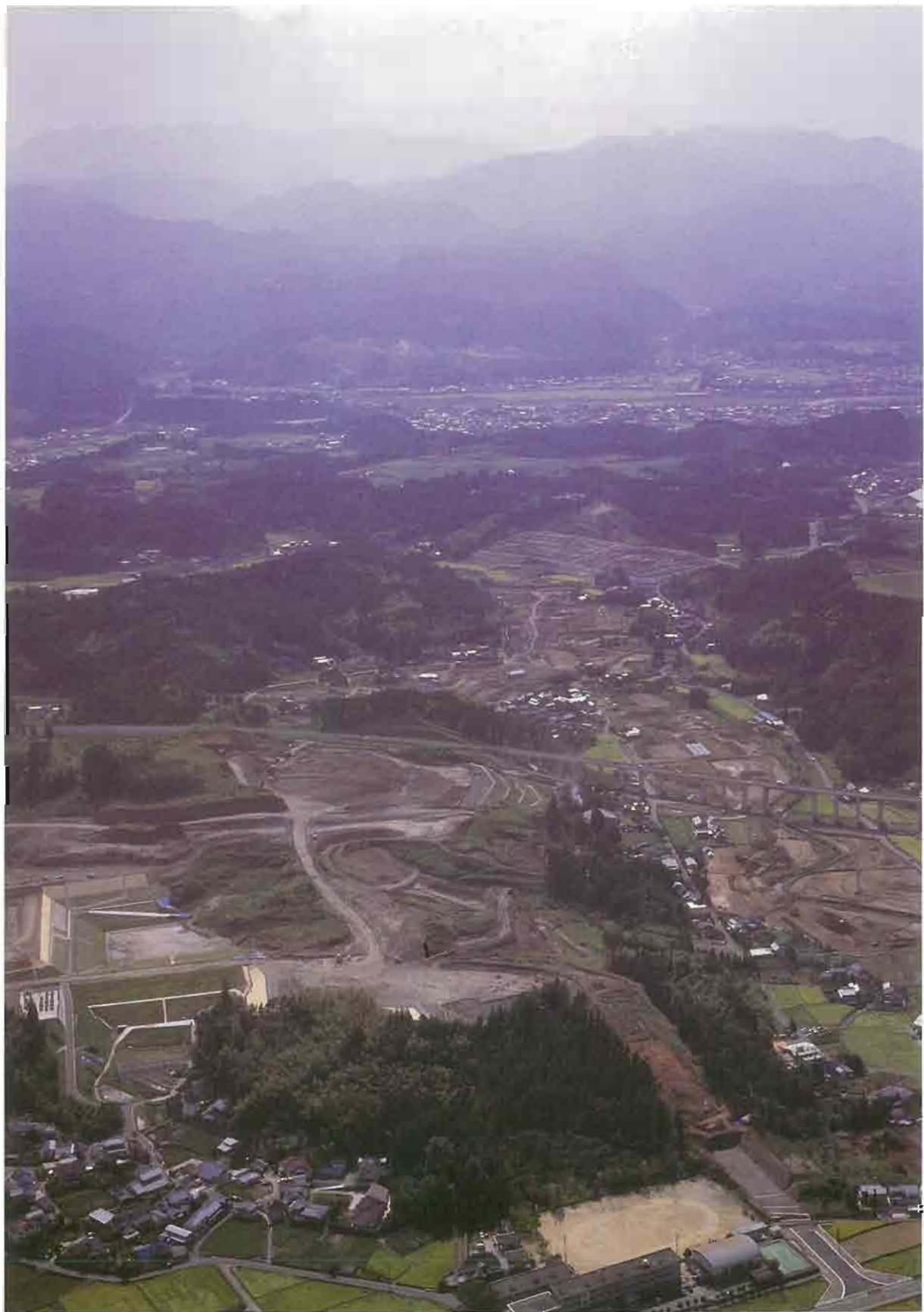


平島遺跡D地点
塔ノ本古墳
祇園原遺跡2次
長迫遺跡C地点
長迫遺跡D地点
尾漕遺跡6次

2001年

日田市教育委員会



求来里川右岸地区（北側上空から）

序 文

日田市は杉の一大産地として有名で、その杉林は秋田・吉野とならんで、日本の三大美林に数えられております。また、この杉を利用した木工業も盛んで日田市の大きな産業の一つとなっています。先にこの木工業の振興をはかる目的で有田地区にウッドコンビナートが建設されました。本報告書はウッドコンビナートへのアクセス道路を目的として、実施・建設された市道田島有田線改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書であります。調査の結果、縄文時代から近世にわたる数多くの遺跡が発見され、ウッドコンビナート建設や場整備事業に伴う発掘調査の結果と合わせて、有田地区における大きな成果を挙げることができました。

この度、発行する本書が埋蔵文化財の普及・活用、さらには有田の歴史を解明していく上での資料として、活用していただければ幸いります。

最後になりましたが、発掘調査・報告書作成にあたってご指導いただきました先生方、ご協力いただきました地元の皆様、関係者の皆様に心より感謝申しあげます。

平成13年3月19日

日田市教育委員会

教育長 後藤元晴

例　　言

1. 本書は市道田島有田線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、先に発行された森ノ元遺跡の報告書に続く「市道田島有田線バイパス改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2」である。
2. 調査にあたっては、市土木課をはじめ、地元の方々のご協力を得た。
3. 赤色顔料の分析、執筆は別府大学教授の本田光子氏にお願いした。
4. 人骨の調査、鑑定・執筆は九州大学教授の田中良之氏、同助手の金宰賢氏、同大学院生の舟橋京子氏にお願いした。
5. 鉄器の保存処理は大分県立歴史博物館の山田拓伸氏にお願いした。
6. 空中写真的撮影は株式会社九州航空、株式会社スカイサーベイ(現、有限会社スカイサーベイ九州)に委託した。
7. 遺構写真は各担当者が撮影したほか、文化財写真家長谷川正美氏に委託したものを使用した。
8. 遺構図の実測は各担当者が行ったほか、長迫遺跡C地点の実測は埋蔵文化財サポートに委託した。
9. 遺物実測は各担当者が行い、製図は雅企画有限会社財津香奈子氏の委託によるものを使用した。
10. 遺物写真是雅企画有限会社長谷川正美氏に委託したものを使用した。
11. 遺跡からの出土遺物、実測図・写真是日田市埋蔵文化財センターに管理・保管している。なお、出土人骨は九州大学にて管理・保管している。
12. 本書の執筆は各担当者が行った。
第1章 土居和幸
第2章 若杉竜太
第3章 渡邊隆行・土居和幸
第4章 渡邊隆行・土居和幸
第5章 土居和幸
第6章 吉田博嗣
第7章 行時志郎
第8章 若杉竜太
第9章 土居和幸
付編1 顔料分析 本田光子
付編2 人骨鑑定 舟橋京子・田中良之
13. 本書の編集は担当者間で協議の上、若杉が行った。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1
1. 調査にいたる経緯	3
2. 調査組織	4
第2章 立地と環境	5
1. 地理的環境	7
2. 有田の歴史	7
3. 周辺の遺跡	8
第3章 平島遺跡D地点	15
1. 遺跡の概要	17
2. 遺構と遺物	17
3. 小結	27
第4章 塔ノ本古墳	29
1. 古墳の概要	31
2. 調査記録	31
3. 小結	41
第5章 祇園原遺跡2次	43
1. 遺跡の概要	45
2. 遺構と遺物	45
3. 小結	54
第6章 長迫遺跡C地点	59
1. 調査の概要	61
第7章 長迫遺跡D地点	65
1. 調査の概要	67
2. 遺構と遺物	68
3. 小結	74
第8章 尾漕遺跡6次	75
1. 調査の概要	77
2. 遺構と遺物	77
3. 小結	88
第9章 総括	89
出土遺物観察表	93
付編1 塔ノ本古墳出土赤色顔料の分析報告	99
付編2 祇園原遺跡出土の人骨について	101

挿図目次

- 第1図 調査遺跡路線内位置図 (1/6000)
第2図 周辺遺跡分布図(1/1000)
平島遺跡D地点
第3図 遺構配置図 (1/200)
第4図 1号甕棺墓実測図 (1/30)
第5図 1号甕棺実測図 (1/8)
第6図 2号甕棺墓実測図 (1/30)
第7図 2号甕棺実測図 (1/8)
第8図 3号甕棺墓実測図 (1/30)
第9図 3号甕棺実測図 (1/8)
第10図 2・3号甕棺墓出土ガラス小玉実測図 (1/1)
第11図 1号墓実測図 (1/30)
第12図 1号墓出土遺物実測図 (1/4)
第13図 2号墓実測図 (1/30)
第14図 3号墓実測図 (1/30)
第15図 4号墓実測図 (1/30)
第16図 1号土坑実測図 (1/40)
第17図 1号土坑出土遺物実測図(1/3・1/4・1/8)
第18図 1号周溝遺構実測図 (1/100)
第19図 1号周溝遺構出土遺物実測図 (1/3・1/4)
第20図 その他の出土遺物実測図(1) (2/3・1/1)
第21図 その他の出土遺物実測図(2) (1/3・1/4)
塔ノ本古墳
第22図 遺跡周辺地形測量図 (1/400)
第23図 現況測量図 (1/200)
第24図 墳丘測量図 (1/200)
第25図 墳丘土層断面図 (1/40)
第26図 石室実測図 (1/40)
第27図 出土鉄器実測図 (1/2・1/5)
第28図 出土遺物実測図 (1) (1/3・1/4)
第29図 出土遺物実測図 (2) (1/1)
祇園原遺跡2次
第30図 遺構配置図 (1/200)
第31図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)
第32図 2号掘立柱建物実測図 (1/60)
第33図 3号掘立柱建物実測図 (1/60)
第34図 4号掘立柱建物実測図 (1/60)
第35図 5号掘立柱建物実測図 (1/60)
第36図 6号掘立柱建物実測図 (1/60)
第37図 7号掘立柱建物実測図 (1/60)
第38図 8号掘立柱建物実測図 (1/60)
第39図 1号柵列実測図 (1/60)
第40図 1号土坑実測図 (1/60)
第41図 近世墓グリッド配置図 (1/20)
第42図 墓石実測図 (1/20)
第43図 1号墓実測図 (1/15)
第44図 2号墓実測図 (1/15)
第45図 1次調査の主要遺構配置図 (1/1200)
長迫遺跡C地点
第46図 遺構配置図 (1/600)
第47図 44号竪穴住居跡実測図 (1/60)
第48図 44号竪穴住居跡カマド・出土土器実測 (1/30・1/4)
第49図 8号竪穴住居跡実測図 (1/60)
第50図 3号竪穴住居跡実測図 (1/60)
長迫遺跡D地点
第51図 遺構配置図
第52図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)
第53図 1号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)
第54図 2号竪穴住居跡実測図 (1/60)
第55図 2号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)
第56図 3号竪穴住居跡実測図 (1/60)
第57図 4号竪穴住居跡実測図 (1/60)
第58図 4号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)
第59図 1～4号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)
第60図 5号竪穴住居跡実測図 (1/60)
第61図 5号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)
第62図 5号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)
第63図 6号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)
第64図 6号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3・1/4)
第65図 1号土坑実測図 (1/30)
第66図 柱穴出土遺物実測図 (1/3)
第67図 溝状遺構・竪穴住居跡実測図 (1/100)
第68図 包含層出土遺物実測図 (1/3・1/4)
尾瀬遺跡6次
第69図 遺構配置図 (1/200)
第70図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)

第71図	1号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	第77図	4号掘立柱建物実測図 (1/60)
第72図	1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1) (1/3)	第78図	5号掘立柱建物実測図 (1/3)
第73図	1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2) (1/3)	第79図	6号掘立柱建物実測図 (1/3)
第74図	1号掘立柱建物実測図 (1/60)	第80図	掘立柱建物・柱穴出土遺物実測図 (1/3)
第75図	2号掘立柱建物実測図 (1/60)	第81図	柱穴出土遺物実測図 (1/2・1/1)
第76図	3号掘立柱建物実測図 (1/60)	第82図	土坑実測図 (1/30)

表 目 次

第1表	平島遺跡D地点出土土器観察表
第2表	塔ノ本古墳D地点出土土器観察表
第3表	長迫遺跡C地点出土土器観察表
第4表	長迫遺跡D地点出土土器観察表

第5表	尾漕遺跡6次出土土器観察表
第6表	平島遺跡D地点出土玉類観察表
第7表	塔ノ本古墳出土鉄器観察表

挿 入 写 真 目 次

写真1	平島遺跡D地点調査風景
写真2	尾漕遺跡調査風景
写真3	石室内赤色顔料塗布状況
写真4	墓石 正面

写真5	墓石 右側面
写真6	長迫遺跡C地点全景
写真7	44号竪穴住居跡カマド

図 版 目 次

卷頭図版	求来里川右岸地区（北側上空から）
平島遺跡D地点	
図版1	上 遺跡全景（北から）
	下 遺跡全景（真上から）
図版2	上 1号甕棺墓完掘（南から）
	中 2号甕棺墓（北から）
	下 2号甕棺墓（南から）
図版3	上 2号甕棺墓完掘（南から）
	中 3号甕棺墓（南から）
	下 3号甕棺墓（北西から）
図版4	上左 2号墓（南西から）

上右	3号墓（西から）
下	1号周溝（南西から）
図版5	出土遺物
図版6	出土遺物
図版7	出土遺物
図版8	出土遺物
塔ノ本古墳	
図版9	上 古墳遠景（北から）
	下 古墳全景（北から）
図版10	上 墳丘現況（北から）
	下 古墳全景（上空から）

- 図版11 上 玄室奥壁
下 玄室前壁
- 図版12 上 玄室左側壁
下 玄室右側壁
- 図版13 上 墳丘完掘状況（北から）
中 墳丘土層断面（北から）
下 墳丘西側土層断面
- 図版14 上 墳丘東側土層断面
中 墳丘南側土層断面
下 奥壁・左側壁石組状況
- 図版15 上 石室掘方完掘状況（北から）
中 羨道部
下 玄室（羨道側より）
- 図版16 上 人骨出土状況
中 遺物出土状況（1）
下 遺物出土状況（2）
- 図版17 出土遺物
- 図版18 出土遺物
- 祇園原遺跡2次
- 図版19 上 調査区全景（南から）
中 調査区全景（北から）
下 1号建物（南西から）
- 図版20 上 2・3号建物（南西から）
中 4号建物（北東から）
下 5号建物（西から）
- 図版21 上 6号建物（北から）
中 7号建物（東から）
下 近世墓全景（東から）
- 図版22 上 墓石
中 1号近世墓
下 2号近世墓
- 長迫遺跡C地点
- 図版23 上 調査区北側
下 調査区南側
- 図版24 上 44号竪穴住居跡（南西から）
中 8号竪穴住居跡（西から）
下 3号掘立柱建物（西から）
- 長迫遺跡D地点
- 図版25 上 1～5号竪穴住居跡（北西から）
中 1号竪穴住居跡カマド（北西から）
下 1号竪穴住居跡内土坑（北西から）
- 図版26 上 2号竪穴住居跡カマド（北西から）
中 2号竪穴住居跡
カマド内土層堆積状況
下 3号竪穴住居跡内土坑（北から）
- 図版27 上 4号竪穴住居跡カマド（北西から）
中 5号竪穴住居跡（北西から）
下 5号竪穴住居跡カマド（北西から）
- 図版28 上 5号竪穴住居跡内南側落ち込み
中 6号竪穴住居跡（北西から）
下 1号土坑（西から）
- 図版29 出土遺物
- 図版30 出土遺物
- 尾漕遺跡6次
- 図版31 上 遺跡全景（北東から）
下左 1号竪穴住居跡（真上から）
下右 1号竪穴住居跡（南から）
- 図版32 上 1号竪穴住居跡カマド（南から）
中 1号竪穴住居跡遺物出土状況
下 1号竪穴住居跡カマド支脚
- 図版33 上 1号竪穴住居跡遺物出土状況
中 1号土坑（北から）
下 2号土坑（北から）
- 図版34 出土遺物

第1章 調査の経緯と経過

1. 調査に至る経過

市道田島有田線は日田市東部の有田地域と市街地を結ぶ延長1600mの幹線道路として計画され、平成7年度から事業が開始された。この事業実施に先立ち市土木課から市教委に対し、埋蔵文化財の所在の有無についての文書協議が提出された。これを受けた市教委では計画路線内には、遺跡が存在することから、その取り扱いについては十分なる協議を行う旨を回答した。

協議に先立って市教委では現地の分布調査を行い、埋蔵文化財包蔵地である尾漕遺跡や長迫遺跡、祇園原遺跡などに加え、平島・森ノ元地区と聞き取りによる古墳1基の6ヶ所の試掘調査範囲をまとめた。こうした遺跡資料をもとに市土木課と再協議を行い、平成8年度から該当する遺跡などの試掘調査を行うこととしたが、試掘調査にあたっては、道路予定地の半分が山林にあたり、さらには用地買収の進捗との兼ね合いから、調査可能な地区から順次行うこととし、遺跡が確認された場合はその都度両者間ににおいて協議を行うものとした。

試掘調査は平成8年度に平島地区^{註1)}、平成9年度に森ノ元地区^{註2)}、祇園原遺跡・長迫遺跡^{註3)}、平成10年度に尾漕遺跡^{註4)}の調査を行い、いずれにおいても遺跡が確認され、さらには古墳1基の存在も明らかとなり、本格的な発掘調査を実施することとなった。

また、この事業と合わせて求来里川周辺のほ場整備事業や求来里川河川改修事業が計画されていたため、市道予定地と重なる部分については並行して試掘調査を行った。

発掘調査はほ場整備事業と河川改修事業の工事計画や、道路建設における用地買収の進展具合などを考慮して、計画的に進めることとした。最終的に調査の対象となった遺跡は別表に示す平島遺跡、塔ノ本古墳、祇園原遺跡、長迫遺跡（C地点、D地点）、尾漕遺跡、森ノ元遺跡の6遺跡である。

なお、各遺跡の詳細は第3章以後にまとめるが、森ノ元遺跡の報告についてはすでに発行済みであり、また、長迫遺跡C地点については概要報告のみにとどめることとする。

	遺跡名	調査年度	調査面積	調査担当者	備考
1	平島遺跡D地点	平成9年度	1,100 m ²	土居・永田	本報告
2	塔ノ本古墳	平成9・10年度	1,250 m ²	土居・永田	本報告
3	祇園原遺跡2次	平成9・10年度	1,375 m ²	土居	本報告
4	長迫遺跡C地点	平成10年度	3,000 m ²	吉田	概要報告
5	長迫遺跡D地点	平成9年度	480 m ²	行時・永田	本報告
6	尾漕遺跡6次	平成10年度	610 m ²	若杉	本報告
7	森ノ元遺跡	平成9年度	2,591 m ²	行時	発行済

註1) 『平成8年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年

註2) 『平成9年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1999年

註3) 『平成10年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2000年

註4) 行時志郎編『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第13集 日田市教育委員会 1998年

2. 調査組織

年度別の調査関係者は以下の通りである。（職名は当時のままとしている。）

（平成9年度）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊（日田市教育長）

調査指導員 本田光子（別府大学助教授）

調査事務 原田俊隆（文化課課長）、長尾幸夫（同課長補佐兼文化財係長）、森山一宏（同主任）、竹原里香（同臨時職員）

調査員 土居和幸（文化課主任）、行時志郎（同主任）、吉田博嗣（同主事）、松下桂子（同主事）、永田裕久（同主事補）

（平成10年度）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊（日田市教育長）

調査指導員 田中良之（九州大学教授）、金宰賢（同大学助手）、本田光子（別府大学助教授）

調査事務 原田俊隆（文化課課長）、長尾幸夫（同課長補佐兼文化財係長）、佐々木豊文（同主任）

調査員 土居和幸（文化課主任）、行時志郎（同主任）、吉田博嗣（同主事）、若杉竜太（同嘱託）、山路康弘（同嘱託）

（平成11年度）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊（日田市教育長）

調査事務 原田俊隆（文化課課長）、石井英信（同課長補佐兼文化財係長）、佐々木豊文（同主任）、美野寿美香（同臨時職員）

調査員 土居和幸（文化課主任）、行時志郎（同主任）、吉田博嗣（同主任）、若杉竜太（同主事）、森山敬一郎（同嘱託）、五十川雄也（同嘱託）

（平成12年度）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊（日田市教育長、～平成12年11月14日）、後藤元晴（同教育長、平成12年11月15日～）

調査事務 原田俊隆（文化課課長）、石井英信（同課長補佐兼文化財係長）、佐々木豊文（同主任）、江田香織（同臨時職員）

調査員 行時志郎（文化課主任）、吉田博嗣（同主任）、若杉竜太（同主事）、渡邊隆行（同主事）

調査にあたっては、下記の方々の現地指導をいただいた。

賀川光夫（別府大学名誉教授）、後藤宗俊（別府大学教授）小田富士雄（福岡大学教授）、下村智（別府大学助教授）、石山勲（福岡県立図書館郷土室長）、吉留秀敏（福岡市教育委員会）

（平成9～11年度）

発掘作業員

秋ヤエ子、穂本文雄、秋吉ミユキ、秋吉タミエ、安心院司、安達義男、諫山三代子、石井貞美、石田スズ子、伊藤キヨ子、伊藤巧、伊藤フジエ、井上ノブコ、宇野京子、江藤キミ子、猪熊忠孝、荏隈香苗、荏隈典子、荏隈マサ子、荏隈マサコ、小野忠臣、小野多美子、鍛治屋アサヨ、梶原秋生、梶原サツ子、梶原利徳、加納健作、蒲池妙子、北澤幾子、熊谷幸司、神山淳、小下一、五島勇美子、後藤正志、後藤亮、財津勲子、財津静子、財津由太、財津真弓、坂本今朝人、坂本都美子、佐藤カスミ、佐藤キクエ、左原英子、島田隆翠、清水忠造、庄内武子、菅田クマエ、菅田初夫、菅田ミヤコ、木下富三郎、杉森久恵、園田光子、園田義男、高倉厚己、高倉ハナ子、高倉秀雄、高倉富美子、高倉美津子、高倉美利、高瀬一邦、武内アイ子、高野瞳、高村笑美子、田中昇、津江久徳、手嶋七郎、手嶋トシエ、中尾タマエ、中島カズ子、中島晃一、中島ツネ子、中野ヨシ子、仁多坂シズエ、野内太一郎、野村勉、藤野美音、藤原亜衣、益永勇、松岡初次、松竹智之、松本トキエ、森本絹子、行村シヅエ、行村ツマコ、行村豊、横尾フサエ、吉弘昇、渡邊芳五郎

整理作業員

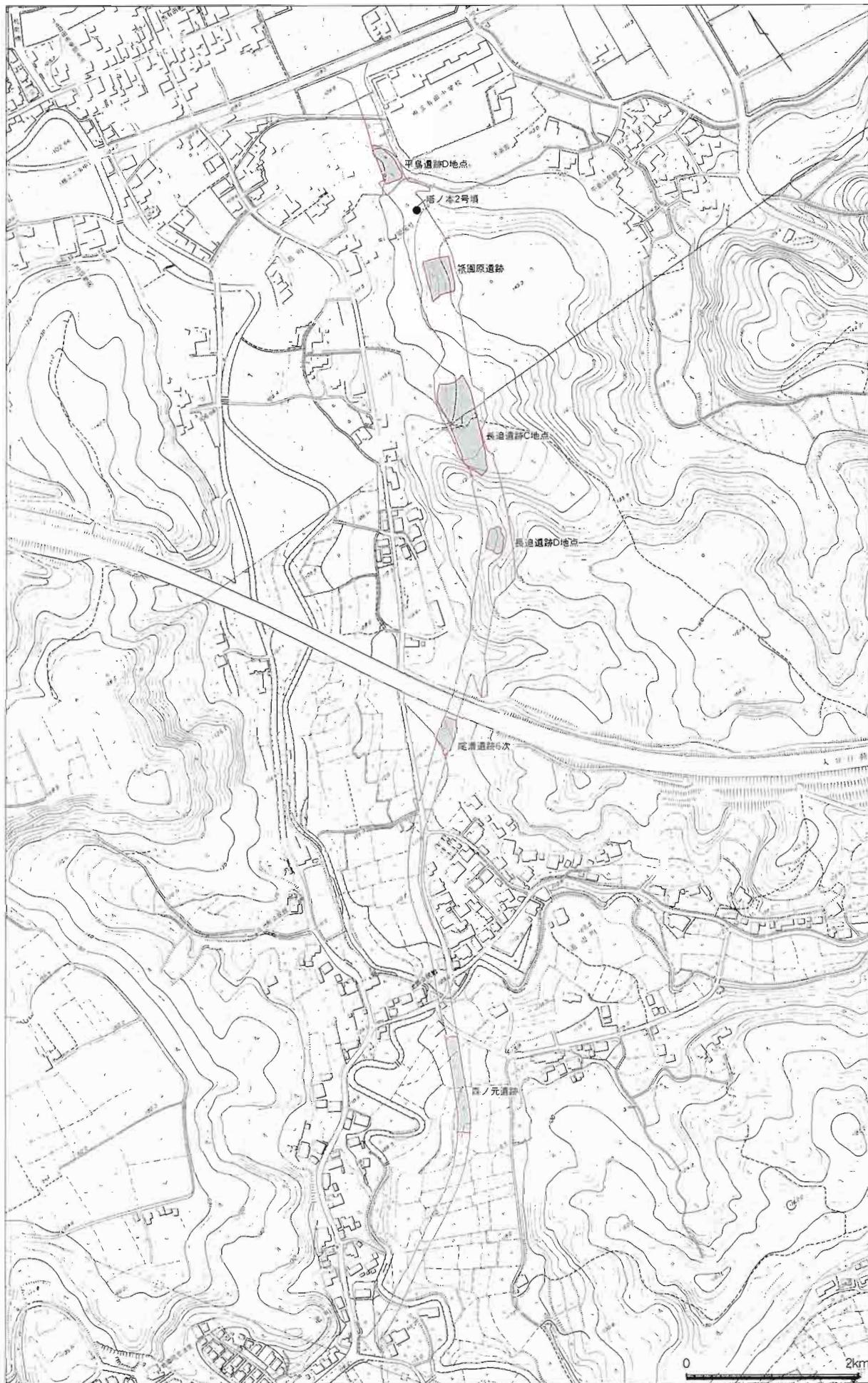
穴井こずえ、石松裕美、伊藤弘子、宇野富子、小埜和美、鍛治屋節子、梶原ヒトエ、川原君子、河原直美、桑野菊美、黒木千鶴子、酒井喜代美、坂本和代、中原琴枝、平川優子、聖川暢子、和田ケイ子



写真1 祇園原遺跡調査風景



写真2 尾漕遺跡調査風景



第1図 調査遺跡路線内位置図 (1/6000)

第2章 立地と環境

1. 地理的環境

日田市は大分県の西部に位置し、福岡県、熊本県と接している。四方八方を山に囲まれた日田市は、阿蘇火碎流や耶馬溪火碎流によって形成された溶岩台地に囲まれた盆地地形をなし、標高70~80mの盆地底を三隈川が西流している。盆地内各所には三隈川の支流である有田川、花月川、大肥川、二串川などによって形成された沖積地や河岸段丘、残丘、台地地形が発達しており、特に台地地形は顕著で、市内には原（はる）と呼ばれる標高150m前後の台地が盆地を巡るように見られる。

今回調査を行った一連の遺跡は有田川支流の求来里川右岸に位置する。町野原台地の南側より南流する求来里川は、緩やかな谷状の沖積地を形成し、月出山岳北方より流れ出る有田川と合流する。この求来里川沿いの沖積地の周囲は、台地や丘陵が八手状に入り組むような地形を形成しており、本報告の遺跡を含め、これまでに九州横断自動車道建設や池辺地区県営は場整備、木材加工流通団地（ウッドコンビナート）建設などに伴う発掘調査が数多く実施されている。これらの遺跡は求来里川沿いの沖積地や丘陵上、丘陵先端部・裾部、丘陵に挟まれた谷部に立地している。

2. 有田の歴史

有田の歴史は旧石器時代にさかのぼる。この時期の本格的な調査は行われていないが、平島遺跡B地点や馬形遺跡からは三稜尖頭器が出土しており、その生活痕跡を知ることができる。縄文時代以降古墳時代までの間は、有田川ならびにその支流域沿いの沖積地、丘陵や丘陵裾部、丘陵に挟まれた谷部に各時代の多くの集落や墳墓が営まれている。なかでも、平島遺跡では弥生時代から古墳時代の環濠集落が形成されており、当時の中心的な集落であったことが分かっている。また、古墳時代中期には、市内でも古い築造とされる城山前方後円墳が営まれるなど、この一帯に大きな豪族勢力があったことが窺える。

古代のこの地域は、日下部氏の支配下となり、日田郡5郷のうち、在田郷に比定されている。有田川の中流から下流にかけては、条里制の名残を示す町の坪、栗ヶ坪など地名が残っており、また、有田川沿いは玖珠郡に通ずる古代官道筋とも推定されるなど、古代日田にあっては重要な位置を占めていた。

中世になると平安時代に台頭してきた大蔵姓日田氏が日下部氏に代わって、日田を治めるようになる。室町時代の中頃には、大蔵姓日田氏が断絶し、その後大友姓日田氏が日田を支配することとなり、中世末期には大友義鑑によって指名された郡老8人中の1人石松氏が、有田川下流の右岸一帯を拠点とし、支配することとなる。また、諸留村を支配した師富氏の氏寺であった世尊寺には、木造の薬師如来坐像や地蔵菩薩立像が残っている。

近世に入って日田は幕府直轄地天領となるが、有田地域は、玖珠に拠をおく森藩久留島氏の領地となる。中世に師富氏が支配していた場所と考えられている地域には、この森藩久留島氏は有田役所を設置している。有田川沿いは、こうした天領日田永山布政所と森藩を結ぶ近世の道が通っており、往時の賑わいが偲ばれる。

維新後の明治22年の市町村制施行後は合併が繰り返され、有田は西有田村と東有田村に分かれるが、西有田村は昭和15年、日田町他5村と合併し、日田市となる。東有田村は昭和30年に他4村とともに日田市に吸収合併され、現在にいたっている。

3. 周辺の遺跡（第2図）

今回報告する遺跡群が位置する求来里川流域やその本流である有田川流域では、これまでに多くの発掘調査が行われている。以下、これらの遺跡について概観していく。

旧石器時代

平島遺跡B地点や馬形遺跡から三稜尖頭器が出土している程度であるが、有田川や求来里川の上流の片峰遺跡や町野原遺跡では台形様石器やナイフ形石器などが採集されている。

縄文時代

長迫遺跡A・B地点では中期の落とし穴遺構が確認されているのをはじめ、また、尾漕遺跡4次調査区や、有田塚ヶ原遺跡より落とし穴遺構の可能性のある土坑も確認されている。石ヶ迫遺跡では早期の集石遺構が5基発掘されている。この他、森ノ元遺跡からは埋甕が確認されている。これらの遺跡は谷部や沖積地に立地しており、周辺に集落が存在する可能性が指摘できる。

弥生時代

この時代の遺跡は沖積地から丘陵裾部、丘陵上と広範囲にわたって立地しており、集落や墓地の広がりを窺うことができる。

今回の調査では、平島遺跡D地点で後期後半より下ると考えられる大型成人用甕棺墓や箱式石棺墓、石蓋土壙墓、土壙墓が確認されている。また、祇園原遺跡2次調査区では高床倉庫群と考えられる掘立柱建物群が確認されている。周辺の遺跡では、平島遺跡A・B地点で後期の竪穴住居跡や環濠が確認されている。平島遺跡E地点からは中期・後期の竪穴住居跡、後期の大型成人用甕棺墓・石蓋土壙墓が、尾漕遺跡4次調査区では後期前半の竪穴住居跡、高床倉庫、焼土坑、溝状遺構、小児用甕棺墓が多数確認されている。これと同様に高い密度で遺構が確認された祇園原遺跡1次調査区では、中期後半から後期中頃にかけての竪穴住居跡、高床倉庫、大型掘立柱建物・小型掘立柱建物、小児用甕棺墓、円形周溝状遺構などがあり、平島遺跡を中心とした大規模な集落が存在したと考えられる。このほかに馬形遺跡では中期後半の掘立柱建物が、また、有田塚ヶ原遺跡では中期後半の竪穴遺構や土坑が確認されている。さらに求来里川左岸の台地上の佐寺原遺跡では、弥生時代前期末から終末にかけての竪穴住居跡、貯蔵穴、掘立柱建物、溝状遺構、周溝状遺構、小児用壺棺墓・甕棺墓が確認されている。

古墳時代

古墳時代になると、集落は弥生時代に多く見られた沖積地や丘陵上に加えて、丘陵裾部や谷部に多くが立地するようになり、居住域の拡大が窺える。これに対して、墳墓は丘陵上や丘陵緩斜面に築かれていることが多い。今回の調査では、古墳と集落跡が確認されている。長迫遺跡C地点では竪穴住居跡や掘立柱建物が多数確認され、また尾漕遺跡6次調査地点では6世紀後半の竪穴住居跡が1軒確認されている。この他にも周辺では大規模な集落が確認されている。長迫遺跡A・B地点では竪穴遺構（竪穴住居跡を含む）が72軒、土坑5基、掘立柱建物10棟、溝5条が、尾漕遺跡4次調査区では竪穴住居跡8軒、掘立柱建物7棟、高床倉庫7棟、溝状遺構5条が確認されている。また、祇園原遺跡1次調査区や尾漕遺跡2・5次調査区、石ヶ迫遺跡でも竪穴住居跡が確認されている。

また、集落遺跡のほかに古墳が多く調査されている。今回調査された塔ノ本2号墳は单室両袖式の横穴式石室をもつ径約12mの円墳である。石室内からは鉄刀や鉄鎌が出土している。また、平島遺跡D地点からは6世紀中頃と考えられる円墳の周溝が確認されている。尾漕2号墳は求来里川右岸の丘陵鞍部に位置する径25mの円墳である。主体部は2基の箱式石棺で、主軸をほぼ東西方向にとり、並列して

埋葬されていた。2つの主体部のうち、第2主体部は搅乱を受けていたが、第1主体部はで棺内より人骨3体、素環頭太刀、刀子、縦櫛が出土した。^{註10)}尾漕遺跡1次調査区では5世紀末の横穴式石室を主体とする古墳が調査されている。有田塚ヶ原古墳群では、横穴式石室をもつ径10m前後の円墳が調査され、石室内からは須恵器・鉄鎌・馬具・勾玉・小玉が見つかっている。この他、平島遺跡E地点で見つかった横穴式石室をもつ塔ノ本3号墳や今回の調査で発掘された平島遺跡D地点の塔ノ本1号墳、塔ノ本2号墳の東側には径約10m、高さ約4mの規模をもつ平島古墳があり、このように古墳がまとまって存在する例は市内では珍しい。この他、横穴墓では平島横穴墓群がある。6世紀中頃と6世紀後半から7世紀前半にかけての86基にのぼる横穴墓からは多くの装飾品や武器類が出土している。

また、求来里川との合流点より上流にさかのぼった有田川右岸の山口遺跡では豊穴住居跡が確認されている。その西側の台地上には石棺か豊穴式石室と推定される5世紀代の前方後円墳の城山古墳がある。有田川を下流に下った蕪谷川との合流点付近では豊穴住居跡が確認された大行事遺跡が存在する。^{註11)}有田川左岸の佐寺原台地の北側崖面にある佐寺横穴墓群からはイモガイ製貝輪、鉄鎌、玉類が出土した。^{註12)}また、台地東の舌状丘陵上に大迫遺跡では土壙墓、石蓋土壙墓、石棺墓が発掘され、鉄劍・鉄鎌が出土した。^{註13)}さらに佐寺原台地の北西端には夕田遺跡・横穴墓・古墳群がある。^{註14)}横穴墓からは須恵器・玉類が出土しており、7世紀代の構築が考えられている。また、古墳群では主体部に石棺や土坑をもつ4基の墳墓が見つかっており、鉄劍・鉄鎌・鉄鎌・土師器が出^上している。

古代

この時代の集落も古墳時代に引き続き、多くが沖積地や谷部に立地し、また生産遺構も確認されている。今回報告する長迫遺跡C地点、D地点では豊穴住居跡が確認され、長迫遺跡D地点のものは8世紀中頃前後と考えられる。周辺では、長迫遺跡A・B地点で豊穴遺構15基、土坑3基、尾漕遺跡4次調査区では豊穴住居跡1軒、掘立柱建物1棟、土坑1基、溝状遺構1条が確認されている。この他、馬形遺跡や有田塚ヶ原遺跡でも豊穴住居跡や掘立柱建物が確認されている。クビリ遺跡からは8世紀頃の分銅型石製品、砥石のほか、鉄滓が出土し、鍛冶遺構の存在も考えられている。^{註15)}長迫遺跡A・B地点、馬形遺跡とともに平安時代の豊穴遺構が確認されている。また、大行事遺跡では豊穴住居跡が確認されている。^{註16)}さらに佐寺原台地西側の慈眼山南麓の慈眼山瀬戸口遺跡では8世紀前半頃の井戸跡から墨書き土器などが出土しており、官衙に関連した施設の存在が考えられている。

中世

中世になると集落は主に沖積地や丘陵裾部に立地し、古代まで見られた谷部や丘陵上の集落は少なくなる。沖積地では水田遺構の確認もされている。本報告の尾漕遺跡6次調査区では青磁・白磁・染付などが出^上した掘立柱建物が4棟確認されている。周辺では尾漕遺跡4次調査区で掘立柱建物群、溝状遺構、木棺墓、水田遺構が確認されている。また、尾漕遺跡1次調査区では14世紀後半から15世紀中頃の3基の土壙墓が調査され、2号墓には310枚以上に上る六道錢が埋納されていた。山口遺跡では掘立柱建物・土坑・溝状遺構が確認されている。

また、この有田川の下流、石松川との合流点付近には中世の掘立柱建物や11世紀後半から12世紀前半の土壙墓が確認された川原田遺跡、豊穴住居跡や豊穴遺構が確認された内ノ下遺跡がある。

さらに、慈眼山瀬戸口遺跡では建物を囲む溝が発掘され、大蔵氏の居城である大蔵古城跡との関連性を窺わせる。これに関連すると考えられる溝や柱穴が慈眼山瀬戸口遺跡の南にある上ノ馬場遺跡から多数確認されている。

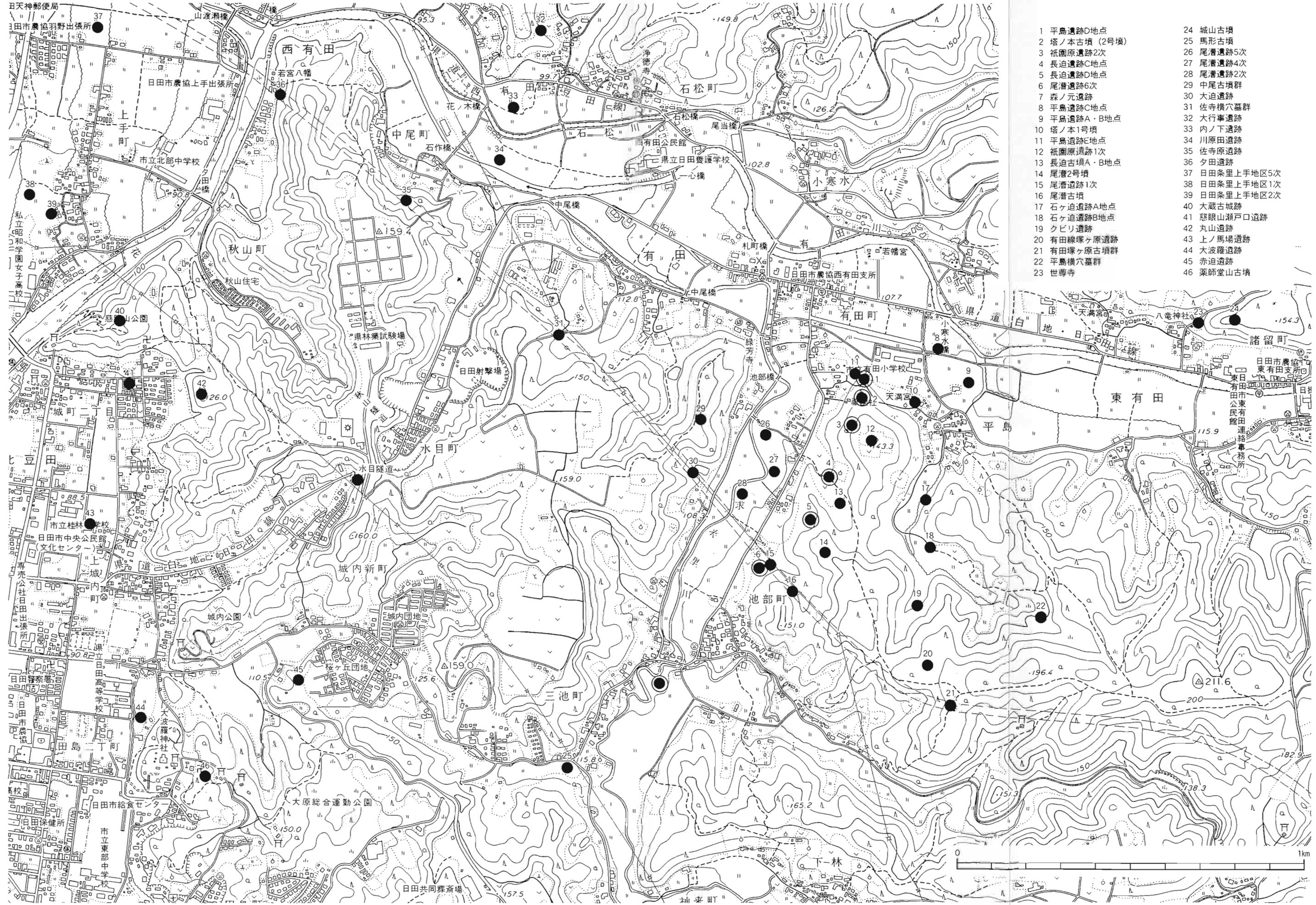
近世

今回調査された祇園原遺跡2次調査区では祇園原遺跡1次調査区で確認された57基の近世墓よりやや時期の古い近世墓が2基が確認されている。また、尾漕遺跡6次調査区では掘立柱建物が2棟発掘されている。この他、山口遺跡では掘立柱建物・土坑・溝状遺構・墓が確認された。^{註1)}

- 註1) 行時志郎「長迫遺跡A・B地点」『平成9年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1999年
註2) 行時志郎「尾漕遺跡4地点」『平成9年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1999年
註3) 行時志郎「有田塚ヶ原遺跡」『平成7年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997年
註4) 松下桂子「石ヶ迫遺跡」『平成7年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997年
註5) 行時志郎編『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第13集 日田市教育委員会 1998年
註6) 土居和幸「2、平島遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』IV 日田市教育委員会 1989年
註7) 土居和幸「平島遺跡E地点」『平成10年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2000年
註8) 行時志郎・松下桂子「祇園原遺跡」『平成7年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997年
行時志郎「祇園原遺跡」『平成8年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年
註9) 土居和幸・行時志郎・永田裕久編『馬形遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第16集 日田市教育委員会 1998年
註10) 友岡信彦・松本康弘ほか編『佐寺原遺跡 尾漕遺跡群 有田塚ヶ原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 大分県教育委員会 1998年
註11) 村上久和・原田昭一・佐々木章編『尾漕遺跡(第2次調査区・第5次調査区)』一局部改良求来里川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分県文化財調査報告書 第112輯
註12) 行時志郎「尾漕2号墳」『平成8年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年
行時志郎「尾漕2号墳」『平成9年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1999年
註13) 行時志郎・松下桂子「平島横穴墓群」『平成7年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997年
註14) 山路康弘・土居和幸・吉田博嗣編『山口遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第20集 日田市教育委員会 2000年
註15) 平成12年度に日田市教育委員会が調査。
註16) 時枝克安・村上久和・友岡信彦・染矢和徳編『日田条里遺跡群 佐寺横穴墓群 大迫遺跡 白岩遺跡 下綾垣遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 大分県教育委員会 1997年
註17) 村上久和・田中良之・友岡信彦編『夕田遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(14) 大分県教育委員会 1999年
註18) 行時志郎「タビリ遺跡」『平成7年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997年
註19) 坂本嘉弘編『慈眼山瀬戸口遺跡』国家公務員合同宿舎 日田住宅2号棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 大分県教育委員会 1992年
註20) 吉田博嗣「川原田遺跡」『平成10年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2000年
註21) 吉田博嗣「内ノ下遺跡」『平成10年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2000年
註22) 行時志郎編『上ノ馬場遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第23集 日田市教育委員会 2000年

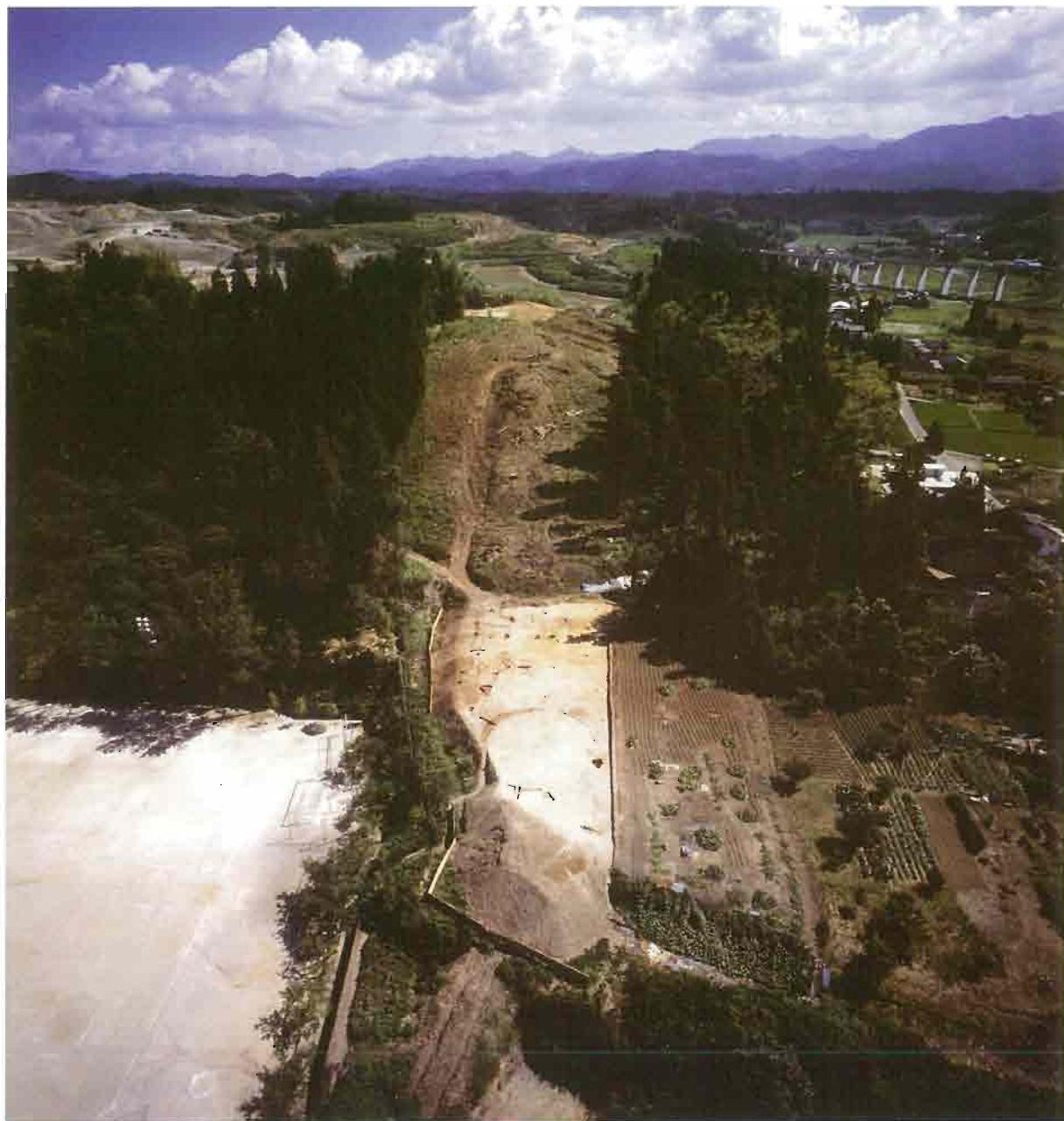
<参考文献>

土居和幸「第2章 遺跡の立地と環境」田中裕介・土居和幸・清水宗昭編『小迫辻原遺跡I』A・B・C・D区編 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10 大分県教育委員会 1999年
千田昇「日田・玖珠地域の地形—特に台地地形について—」『日田・玖珠地域—自然・社会・教育—』大分大学教育学部 1992年
渡辺澄夫 兼子俊一 橋本操六 豊田寛三編『角川地名大事典44 大分県』角川書店 1980年
『日田市史』日田市 1990年



第2図 周辺遺跡分布図 (1/10000)

第3章 平島遺跡D地点



1. 遺跡の概要

平島遺跡D地点は、通称“祇園原”と呼ばれる標高約140mの丘陵北側の裾部に位置する。調査区の標高は120m～122mを測り、背後には丘陵斜面、前面には西流する有田川を中心に広がる沖積地などが展望できる場所に立地している。調査以前の現況は杉林で、その前は畠地であったと考えられる。地形的には南側の斜面から北に向かって緩やかな傾斜をなし、そこからは約5mの段差が生じている。

平島遺跡は、今回の調査区から主に東側の沖積地一帯を呼んでおり、これまでに圃場整備事業や道路建設に伴い、標高約110mの沖積地において3次の発掘調査が実施されている。^{註1)}なかでも、A・B地点からは弥生時代後期から古墳時代前期の環濠や竪穴住居跡・掘立柱建物、古墳時代後期の竪穴住居跡や掘立柱建物などの遺構と数多くの遺物が出土しており、とくに前者は市内でも数少ない環濠集落のひとつもある。

また、調査区西側には隣接して、弥生時代の竪穴住居跡や甕棺墓、古墳の主体部、中世の掘立柱建物等が検出された平島遺跡E地点があり、東側約200mの位置には径約12mを測る円墳である平島古墳^{註2)}が存在している。

調査は南側より機械を使っての表土除去作業から進め、地山が黄色のローム質土であったことから遺構検出は容易に行え、その後、順次、遺構の掘り下げを行った。全体の遺構の掘り下げ後には、全体測量や個別実測図の作成、個別写真撮影を行った。ほぼ作業が完了した段階で空中写真撮影を行い、調査の全日程を終了した。

調査期間は平成9年6月13日～7月30日で、整理作業は平成9年11月4日～平成9年12月26日まで実施した。

註1) A・B地点は昭和62年度、平成元年度に市教委が、C地点は平成2年度に県教委がそれぞれ調査を行っている。

註2) 土居和幸「平島遺跡E地点」『平成10年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2000年

註3) 現在、この古墳は日田市史跡に指定されている。本格的な調査は行われていない。

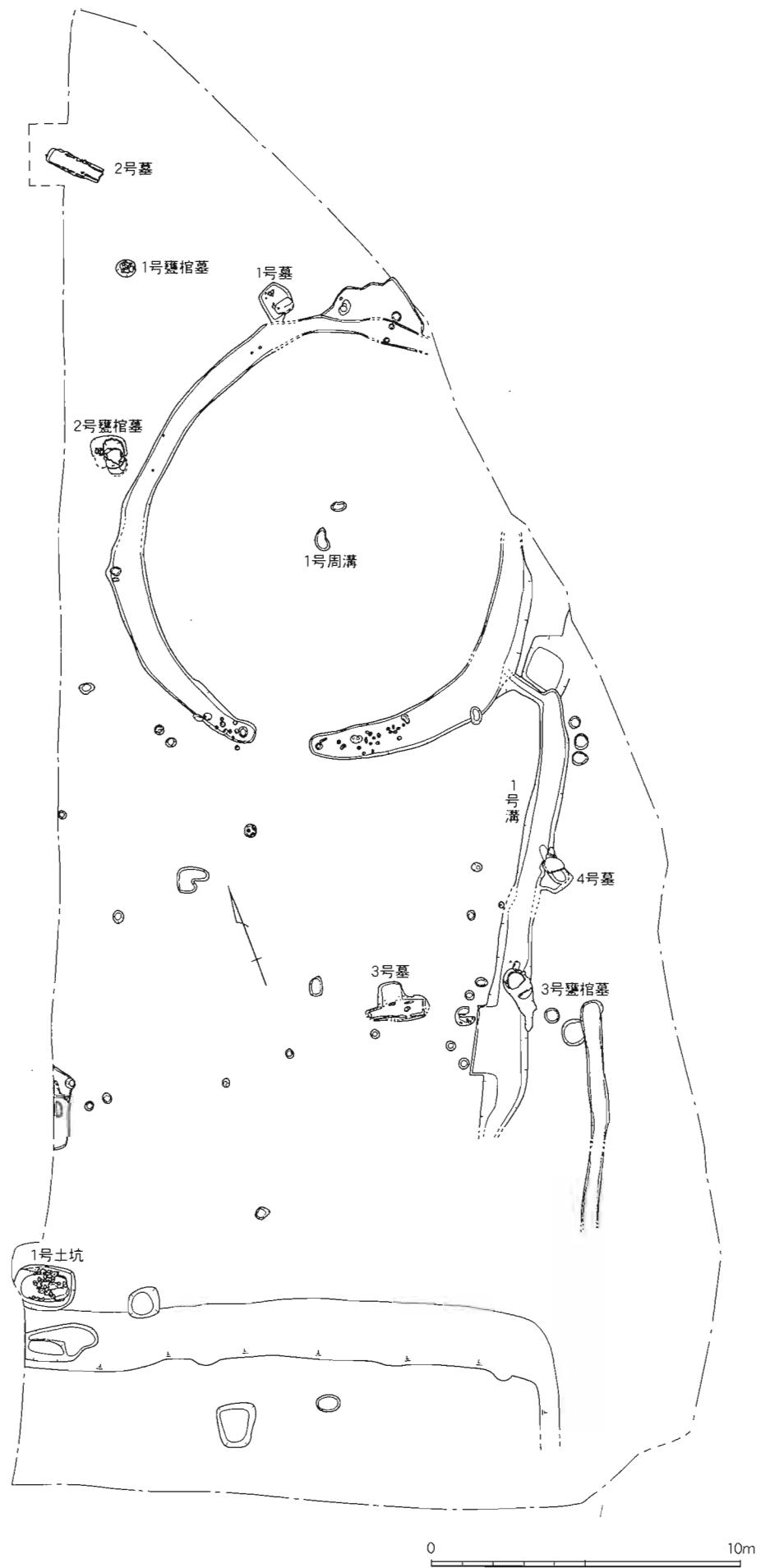
2. 遺構と遺物（第3図）

今回の調査で確認した遺構は大型成人用甕棺墓3基、石棺墓2基を含む墓4基、土坑1基、古墳の周溝1基、溝1条、ピット少数が検出された。これらの遺構はほぼ調査区全面に広がりをみせるが全体的に削平が著しく、特に南側の斜面に近い場所ではかなりの削平を受けている。

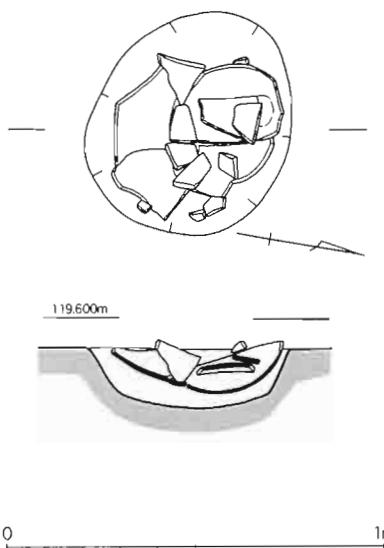
隣接して調査が行われたE地点では各時代の遺構が密に検出されており、このことから本来は多くの遺構が重複して存在していたものと思われる。

調査区の表土下には遺物を包含する黒色の腐食土があり、その下位に黄色ローム土が、さらにその下には灰色土が順次堆積していた。大型成人用甕棺墓など深く掘り込まれた遺構は、下部の灰色土まで掘られていた。

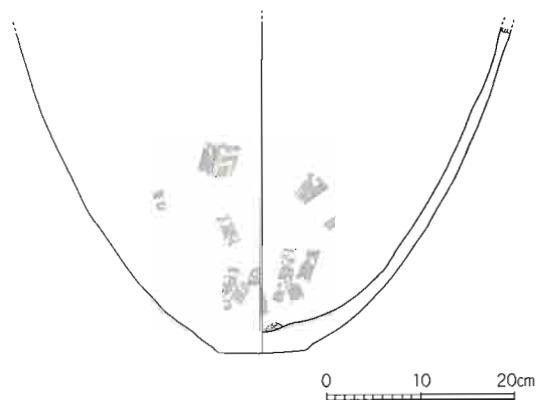
以下、検出した遺構と出土した遺物についてまとめる。なお、1号溝に関しては、切り合いから最も新しく、掘方が浅いことなどから近代の攪乱ではないかと判断した。



第3図 遺溝配置図 (1/200)



第4図 1号甕棺墓実測図 (1/30)



第5図 1号甕棺実測図 (1/8)

が出土した。これは整理中に3号甕棺墓出土の小玉と混在したため、2、3号甕棺墓合わせて113点が副葬されていたと考えられる。

第7図1は上甕に使用された甕である。底部は削平のため残存していない。口縁部はほぼ平坦に打欠かれており、胴部には断面「コ」の字状の1条の突帯を巡らしている。胴部最大径は69cmを測る。調整は内外ともにハケが施されているが、内面にはハケの後にヘラ状工具によるケズリが施される。

第7図2は下甕に使用された甕である。底部はレンズ状を呈し、口縁はやや直立ぎみに立ち上がりながら外反する。頸部には刻みを施した1条の突帯を、胴部には断面三角形の1条の突帯を巡らせていく。器高90.5cm、口径50cm、胴部最大径64.5cm、底径12cmを測る。調整は外面がタタキ後ハケで、幅3mm、2mm、1mm程度のハケを太いものから細いものの順で使い分けている。内面はハケで、頸部付近にはヘラ状の工具によるケズリが施される。

第10図は2、3号甕棺墓から出土したガラス小玉である。色は全てマリンブルーで、最大径は5mm～2mmと大きさにばらつきが見られる。

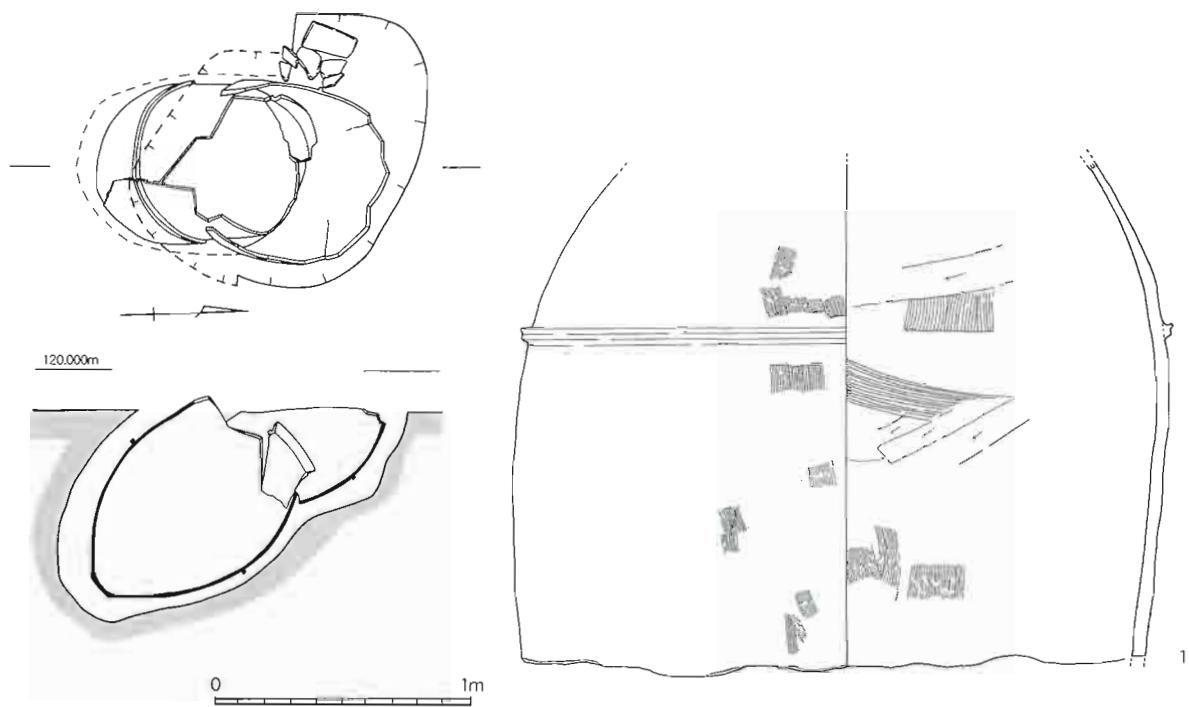
1号甕棺墓（第4・5図、図版2）

調査区の北側で検出した大型成人用甕棺墓である。上半部を大きく削平されているため、底部しか残存しておらず、単棺か合口であるのか不明である。墓壙の平面形は削平を受けているため明確ではないが、現況では橢円形を呈し、その規模は長軸0.6m、短軸0.51m、深さ17cmを測る。埋置は南側に向かって傾斜している。墓壙北側に底部があることから、南頭位と考えられる。副葬品の出土はない。

第5図は1号甕棺墓に使用された甕である。削平のため、底部と胴部しか残存していない。やや底部はレンズ状を呈している。底径は9.5cmを測る。調整は内外ともに縦方向のハケが施され、底部内面には指頭圧痕が残る。

2号甕棺墓（第6・7・10図、図版2・3）

1号甕棺墓の北側で検出した成人用甕棺墓で、上面は削平を受けている。上甕は打欠き口縁の甕を用いる合口甕棺墓で、墓壙の平面形は削平されているため明確ではないが、現況では不整形を呈し、その規模は長軸1.27m、短軸1.01m、深さ83cmを測る。埋置角度は約45度を呈しており、北側に向かって高くなるように甕が埋置されていることから、北頭位と考えられる。甕の口縁部付近には赤色顔料が残存しており、頭位部分に赤色顔料が塗布されていたと考えられる。副葬品はガラス小玉が出土しており、調査段階では62点が数えられたが、整理段階で見つかったものも含めると113点が

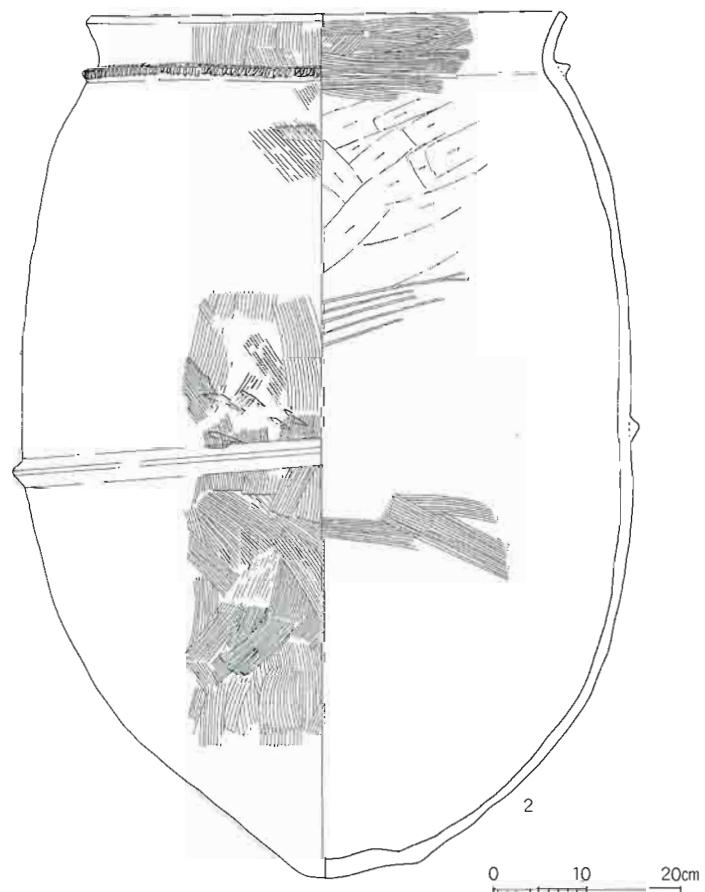


第6図 2号甕棺墓実測図 (1/30)

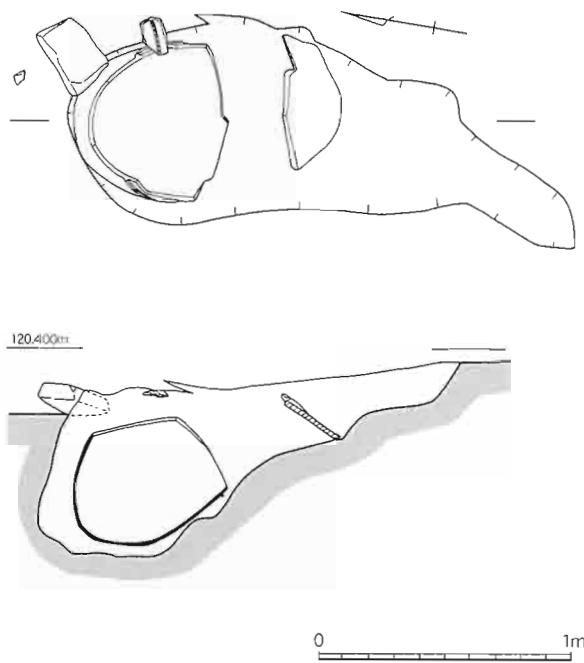
3号甕棺墓 (第8・9図、図版3)

調査区の中央にある3号墓に近接して検出した。1号溝に切られ、上半部を削平された大型成人用甕棺墓である。蓋に扁平な石を用いる单棺の甕棺墓で、墓壙の平面形は削平のため不定形を呈している。その規模は長軸2.05m、短軸0.85m、深さ75cmを測る。南側に向かって甕が高くなるように埋置されていることから、南頭位と考えられる。副葬品は調査段階でガラス小玉が1点出土しているが、整理段階で2号甕棺墓のガラス小玉と混在したため、正確な出土点数は不明である。

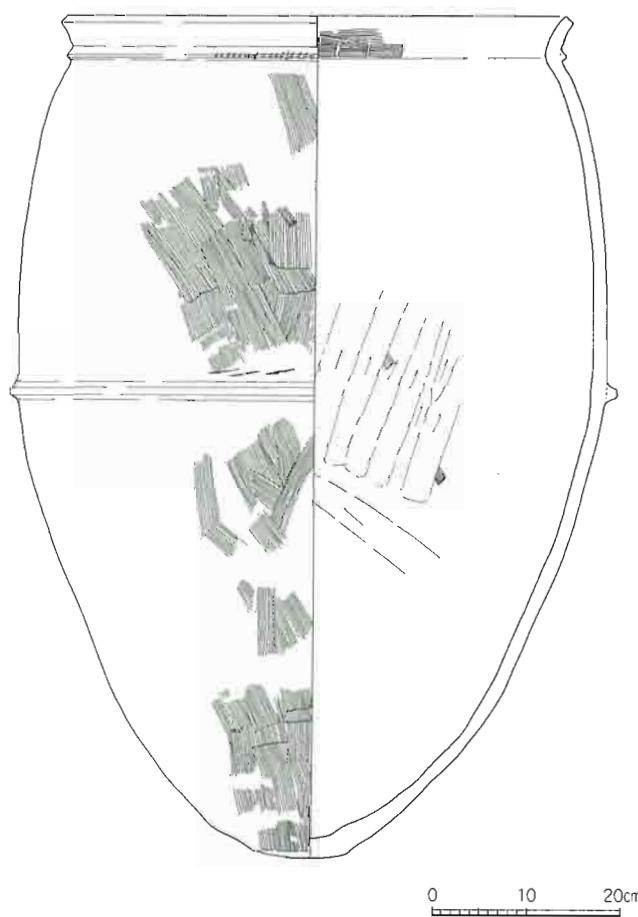
第9図は3号甕棺墓に使用されていた甕である。口縁部は削平されているため、ほとんど残っていなかったが、一部口縁部片が残存していたため復元した。底部はレンズ状を呈し、口縁はやや直立ぎみに立ち上がりながら、外反する。頸



第7図 2号甕棺実測図 (1/8)



第8図 3号甕棺墓実測図 (1/30)



第9図 3号甕棺実測図 (1/8)

部には刻みを施した1条の突帯、胴部には断面台形状の1条の突帯を巡らせている。器高88cm、口径54.5cm、胴部最大径63cm、底径10cmを測る。調整は外面には縦方向のハケ、内面は口縁部に横方向のハケ、胴部にはヘラ状工具によるケズリがそれぞれ施される。

1号墓（第11図）

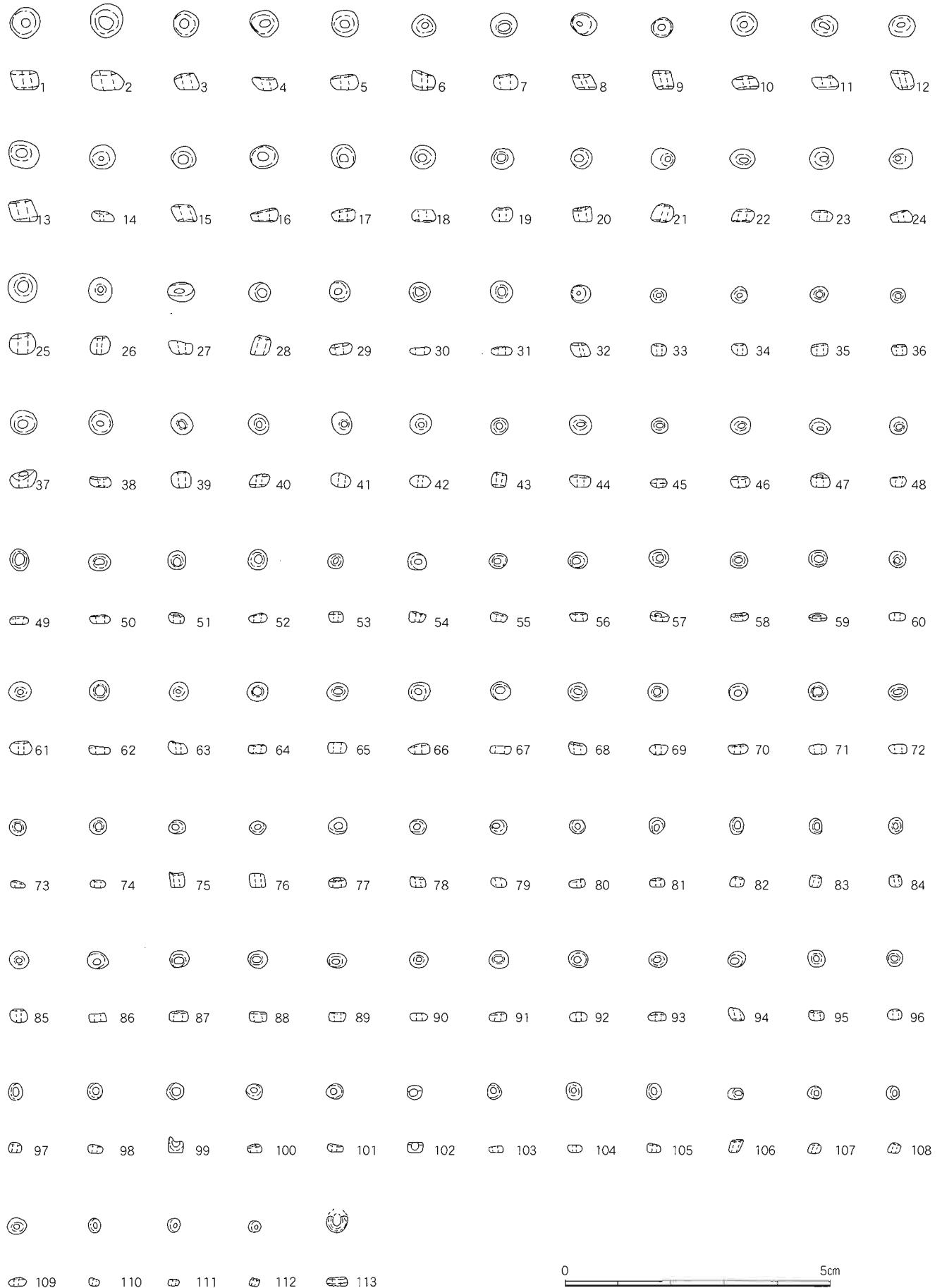
調査区北側で検出した土壙墓で、1号周溝にその一部が切られている。当初、4号甕棺墓として扱っていたが、整理段階で、蓋石を持つ单棺の甕棺墓にしては床面がほぼ水平な方形プランを呈すること、甕棺片が少量しか残存していないこと等から、土坑の可能性が高いと判断した。しかし、近隣に1、2号甕棺墓が見られることなどから、ここでは石蓋土壙墓の類として報告する。平面形は方形プランを呈し、長軸1.05m、短軸0.95m、深さ51cmを測る。南側に扁平な蓋石を持つことから南頭位と考えられる。北側床面から土器片がかたまって出土し、蓋石上面にもいくつか土器が見られた。出土した土器片のうち第12図2は甕の底部であるが、甕棺の底部とは大きさが異なることから、これらの土器は流れ込みの可能性が考えられる。

1号墓出土遺物（第12図、図版6）

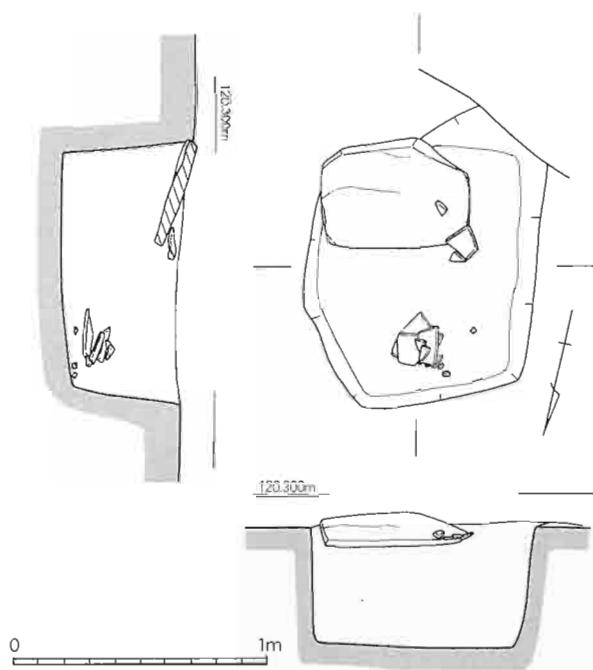
第12図は1号墓から出土した土器である。1は甕棺の口縁、2は甕の底部、3は頸部に断面三角形の1条の突帯を有する甕棺の胴部である。1と3は同一個体と考えられるが、2は別の甕の底部であると考えられる。

2号墓（第13図、図版4）

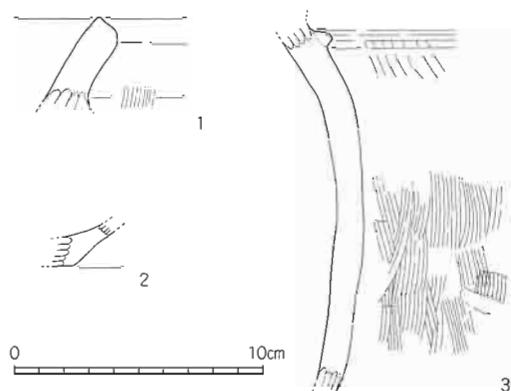
調査区北側で検出された箱式石棺墓である。上半部を大きく削平されているため蓋石と北側の木口の石は残存していない。側壁には扁平な石を重ね、隙間に小さな石を充填している。平面形は長方形で、その規模は長軸1.85m、短軸0.54m、深さ21cmを測る。北西側に向かってやや床面が高くになり、棺幅が広くなることから、北西頭位と考えられる。副葬品の出土はない。



第10図 2、3号甕棺墓出土ガラス小玉実測図 (1/1)



第11図 1号墓実測図（1/30）



第12図 1号墓出土遺物実測図（1/4）

3号墓（第14図、図版4）

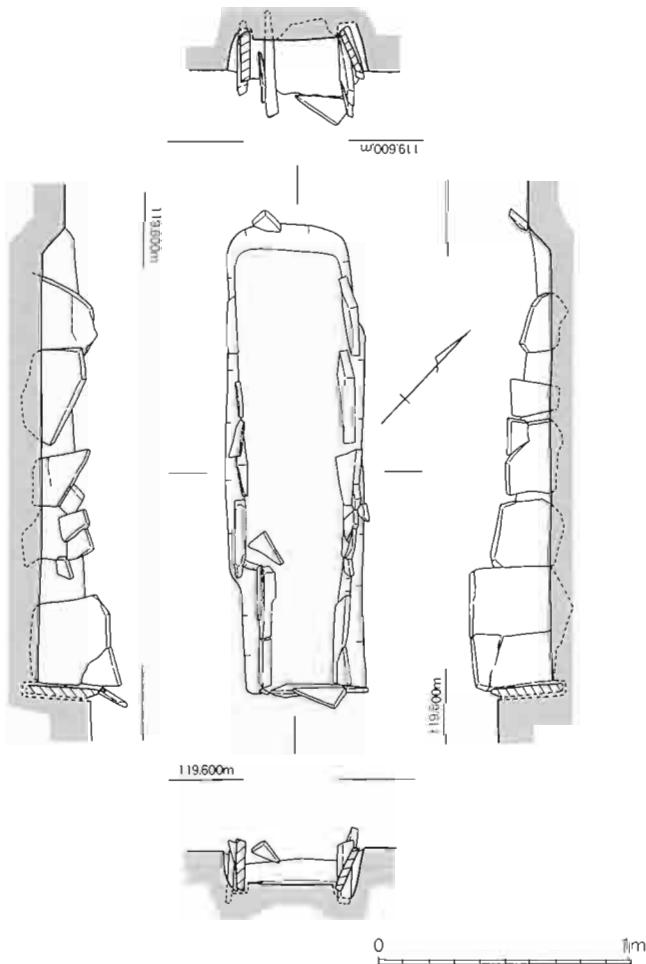
3号甕棺墓に近接して検出した箱式石槨墓である。上半部を大きく削平され、攪乱を受けているため、蓋石及び東側側壁は残存していない。平面形は西側に向かって棺幅が開く長方形で、その規模は側壁の抜き取り痕から、長軸0.70m、短軸0.45m、深さ26cmを測る。東側に向かって床面が高くなり、棺幅が開くことから東頭位と考えられる。副葬品の出土はない。

4号墓（第15図）

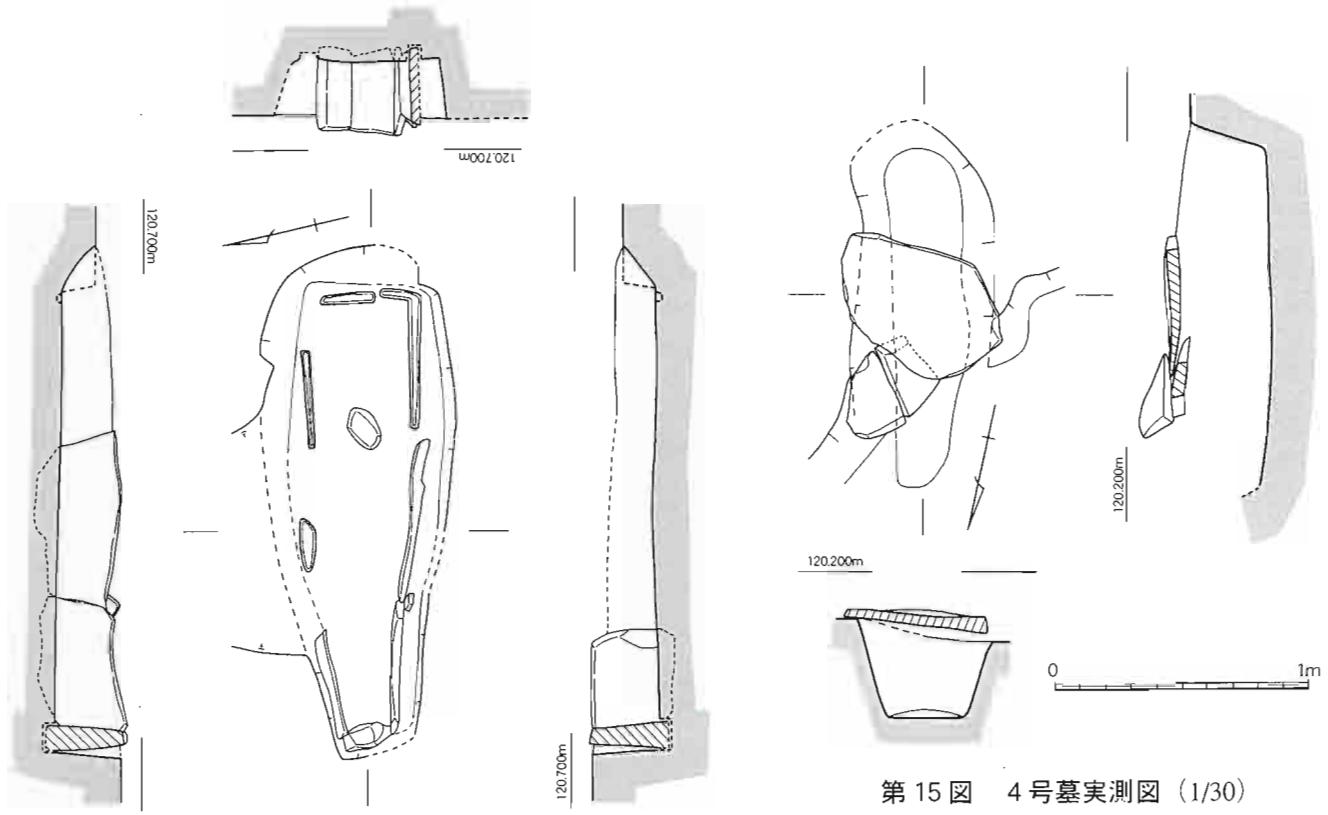
3号甕棺墓の南側で検出した石蓋土槨墓で、1号溝に切られる。墓槨の大半は削平を受けている。蓋石には扁平な石を2枚重ねており、目貼り粘土は見られなかった。その規模は床面の平面形から、長軸1.33m、短軸0.30m、深さ38cmを測る。南側に向かって床面が高くなり、棺幅が開くことから南頭位と考えられる。副葬品の出土はない。

1号土坑（第16図）

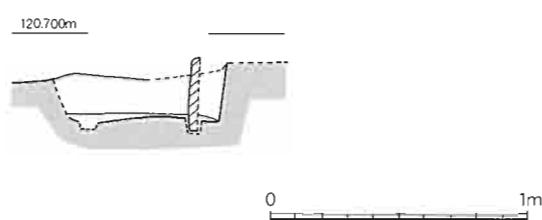
調査区南西端で検出した土坑である。一部調査区外にかかっているため完掘はしていない。平面形は隅丸方形を呈し、2段掘の土坑である。その規模は長軸2.02m、短軸1.50m、深さ95cmを測る。土坑上面には多量の礫が認められ、同時に土器片も多数出土している。



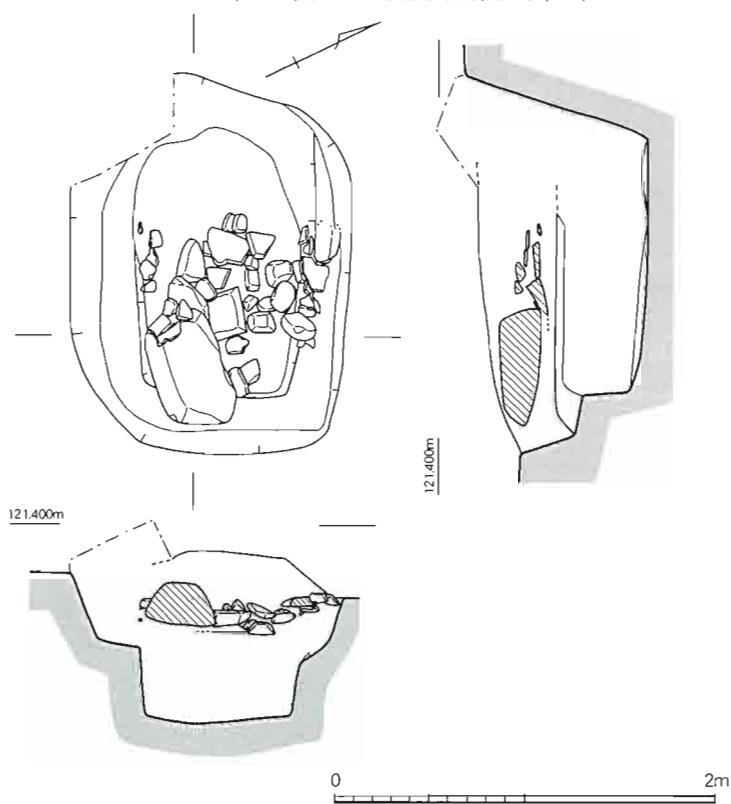
第13図 2号墓実測図（1/30）



第15図 4号墓実測図 (1/30)



第14図 3号墓実測図 (1/30)

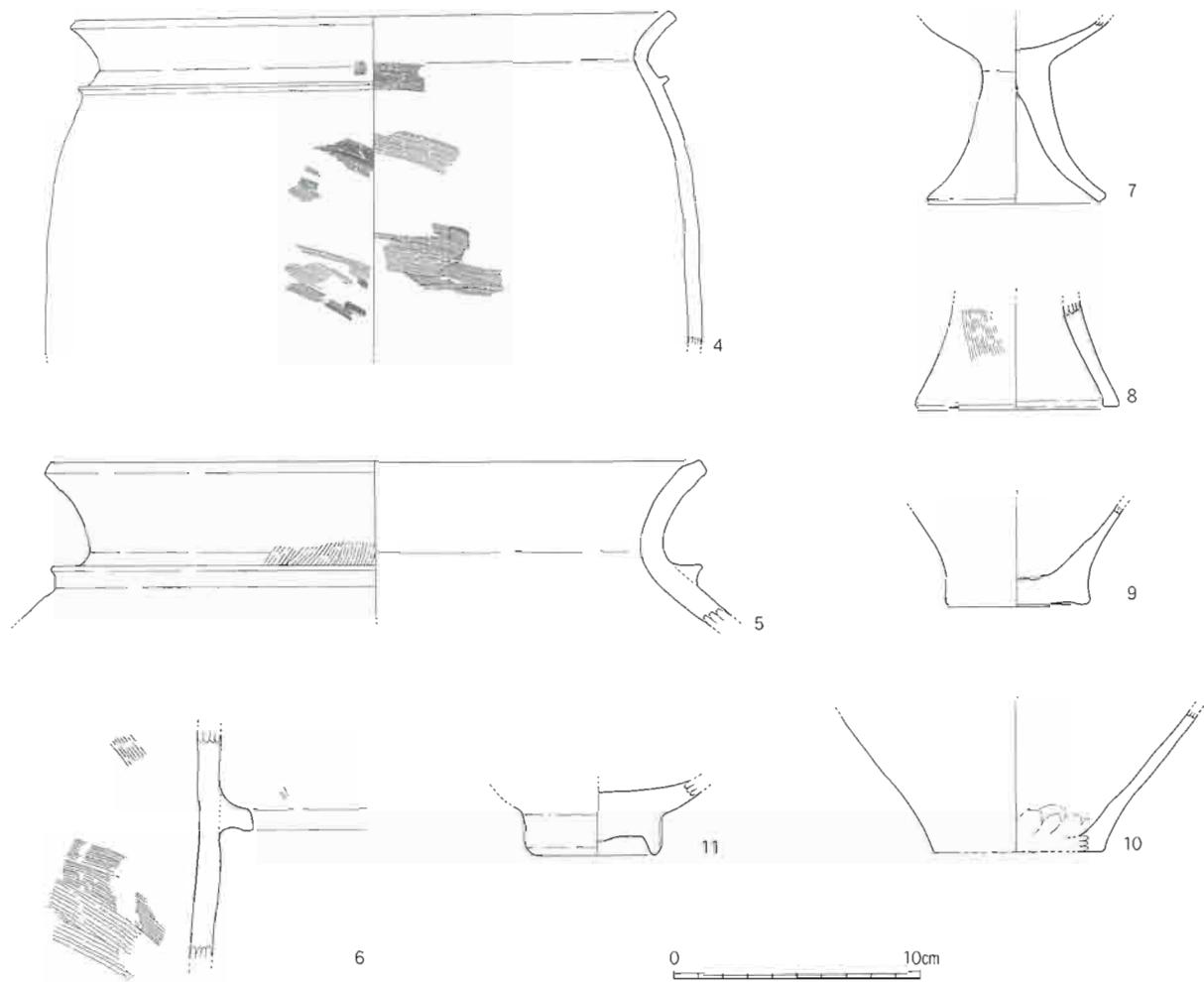


第16図 1号土坑実測図 (1/40)

埋土の状況からして、少なくとも中世以降のゴミ穴の可能性が考えられる。

1号土坑出土遺物 (第17図、図版7)

4～6は壺棺である。4、6は大型の壺の破片であり、4は頸部に1条の突帯を有し、口縁部は緩やかな「く」の字状に立ち上がり外反する。頸部には一部赤色顔料の付着が認められる。復元口径65.6cmを測る。5は壺の口縁であり、中型棺と考えられる。口縁部は緩やかな「く」の字状に外反し、頸部には1条の突帯を有する。口径は35.5cmを測る。6は胴部に1条の突帯を有する壺の胴部破片である。内面にハケが施される。7は高壺である。底径9.6cmで裾部は緩やかに外に開き、端部はやや平坦である。壺底部には赤色顔料が一部付着している。8は器台である。裾端部は平坦で、外面ハケ調整である。9は壺の底部である。底径7.8cmで、ほぼ平坦である。10は壺の底部である。底径9.4cmでほぼ平坦で



第17図 1号土坑出土遺物実測図 (1/4、4は1/8、8は1/3)

ある。底部内面には指頭圧痕が施される。11は青磁碗である。見込みには沈線が巡り、その中にスタンプが施される。

1号周溝（第18図、図版4）

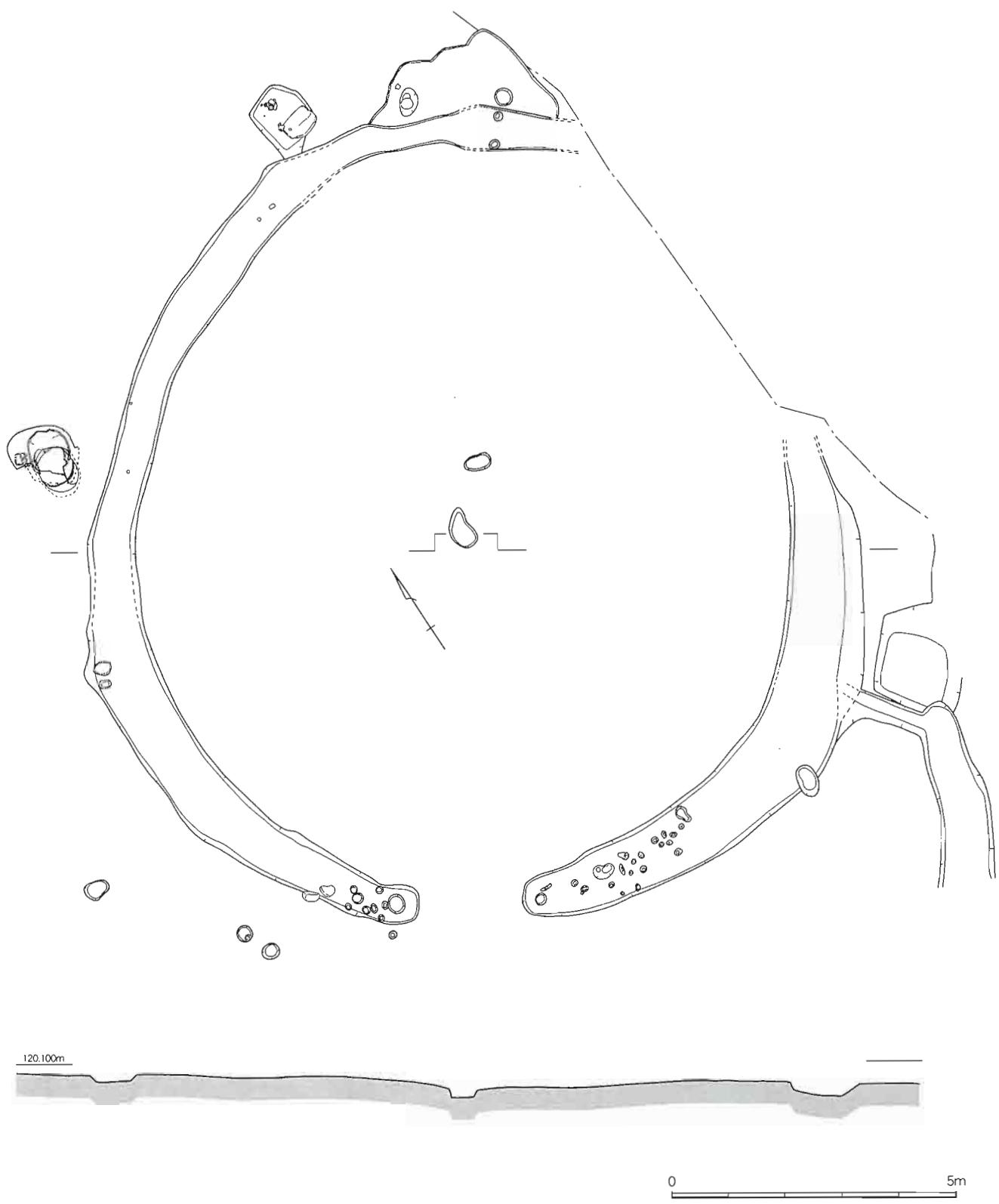
調査区南側で検出した円墳の周溝である。その中央部で不定形な土坑を2基検出したが、上面を大きく削平されているため、主体部の掘り方なのかは判断がつかない。一部調査区外にかかっているが、推定でその規模は13.2m～14.2mを測る。周溝の深さは残存で、20cm程度である。周溝から出土した須恵器から6世紀中頃と考えられる。

1号周溝出土遺物（第19図、図版7）

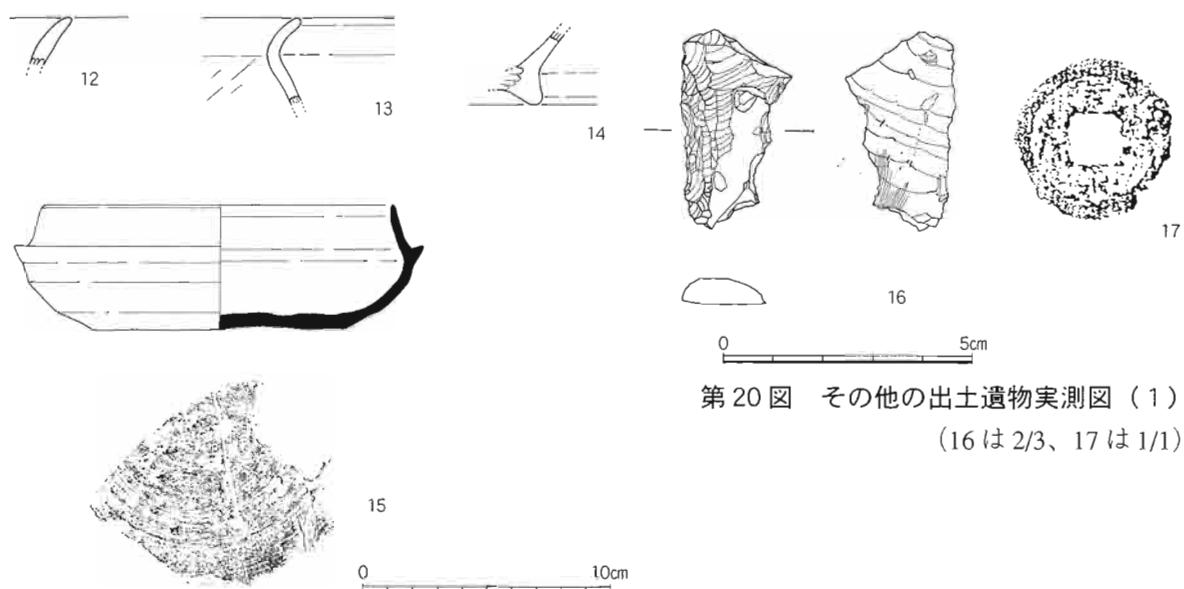
12、13は甕の口縁である。13は内面にケズリが施される。14は甕の底部である。やや上げ底を呈する。15は須恵器の壊である。口径14.1cmを測る。口縁部内面端部をわずかに窪ませており、底部は平坦である。底部にはヘラ記号が施される。

その他の遺物（第20・21図、図版7）

16、17は表土中より出土した。16は2次加工剥片である。石材は黒曜石である。17は寛永通宝である。18は1号溝より出土した甕の口縁部である。19～23は土坑からの出土であるが、整理段階で混在したことから一括して土坑出土とした。19は甕の口縁部破片で内面に赤色顔料が付着する。20は甕の口縁

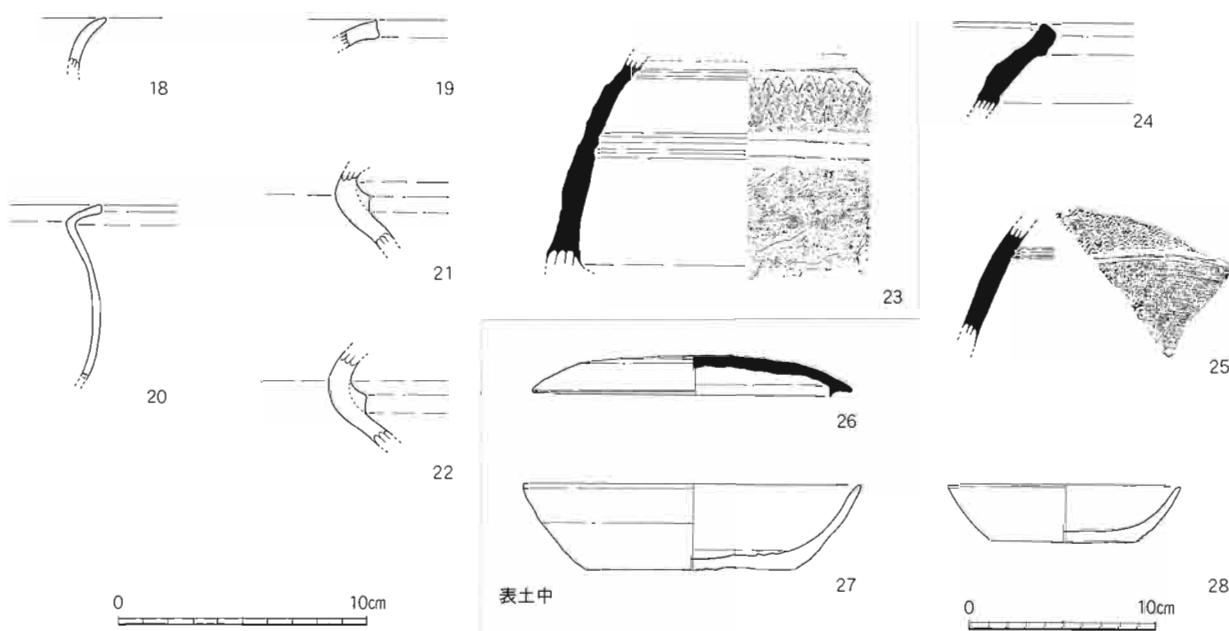


第18図 1号周溝実測図 (1/100)



第20図 その他の出土遺物実測図（1）
(16は2/3、17は1/1)

第19図 1号周溝出土遺物実測図（1/4、15のみ1/3）



第21図 その他の出土遺物実測図（2）（18～23は1/4、24～28は1/3）

で、21、22は甕の口縁部破片で頸部に突帯を有する。23は須恵器の大甕の口縁で2条の沈線で区画されたなかに波状文が施される。24～28は表土中からの出土である。24は甕の口縁、25は甕の口縁部破片である。沈線で区画された上面に波状文が施される。26は蓋である。口径は11.2cmを測り、坏上面にはヘラケズリが施される。27、28は土師器の坏である。27は底部外面に静止ヘラ切り痕が残り、内面にはハケヘラ輪状痕が残る。28は底部に回転糸切り痕が残る。

3. 小結

平島遺跡D地点の調査結果について、以下にまとめる。

まず、大型成人用甕棺墓3基であるが、北部九州の弥生後期甕棺墓の編年と比較すると、全体のプロポーションなどは、いわゆる三津式に類似している。しかし、日田市内の大型成人用甕棺墓が出土した草場第二遺跡の例を見ると、器形は三津式に類似するものの口縁部が短く直立気味になり、底部はレンズ状の平底などの特徴を持つ。本遺跡の甕棺の特徴もこれにあたりやや新しい印象を受ける。^{註3)}

また日田地域が大型成人用甕棺の盛行地域の周縁部にあたることなどから、大型成人用甕棺墓は三津式より後出する弥生時代後期後半以降と考えたい。この時期には大型成人用甕棺墓が残る地域は北部九州では少なくなり、福岡県西部から佐賀県にかけての限られた範囲に縮小していく。日田地方において大型成人用甕棺墓が残ることも、この傾向の表れであり、甕棺墓集中地域の周辺部としての日田地方の特色を如実に表している。

このほか、1～3号墓については、1号周溝より新しく、混入遺物に弥生土器が認められることなどから、大型成人用甕棺墓と時期を同じくするものと考えられる。大型成人用甕棺墓の衰退過程では、甕棺墓は大規模な墓域を形成することなく、箱式石棺墓や石蓋土壙墓等の様々な墓制が採用されることも特徴の一つである。平島遺跡でのこの状況はこれらの特徴と一致する。

こうした弥生後期の墓は、西側に隣接したE地点で大型成人用甕棺墓1基、石蓋土壙墓1基が確認されている。この両地点を合わせると、調査で確認された墓域構成は大型成人用甕棺墓4基、石蓋土壙墓3基、石棺墓2基となる。D地点では、北側の1、2号甕棺墓及び1・2号墓、南側の3号甕棺墓及び3・4号墓という墓群の抽出が可能ならば、E地点の2基の墓群はこれらの北側に続くものと考えられ、墓域が北西側に展開していたと考えられる。東側はすでに学校のグラウンドの造成により測り知ることができないが、E地点を含めた北西側は緩やかな傾斜が続いている、墓群は、さらに広がって行くものと推定される。また、2、3号甕棺墓に113点のガラス小玉が副葬されていたことも合わせて考えると、日田地方の中においても当遺跡が有力集団の墓域であった可能性を示している。^{註3)}

次に、1号周溝であるが、これは古墳時代の円墳の周溝であると考えられる。この塔ノ本1号墳であるが、周溝より出土した須恵器坏より、6世紀中頃の年代が与えられる。2、3号墳に関しても同様の時期であると考えられることから、この地域に6世紀中頃から群集墳が形成されたことを示しており、沖積平野に面した谷地の入り口にあたる本遺跡の状況は、この地域での墓域の形成過程を考える上で重要な資料を提供しているといえよう。

註1) 高橋 徹「まとめ1」草場第二遺跡出土の甕棺・壺棺について』『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

草場第二遺跡』大分県教育委員会 1989年

註2) 橋口達也 「4. 甕棺の編年的研究」『九州縦貫道自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXXI 中巻』

福岡県教育委員会 1979年

註3) 土居和幸 「平島遺跡E地点」『平成10年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2000年

註4) これまで平島古墳群のなかの平島3号墳として扱ってきたが、隣接した塔ノ本古墳、平島遺跡E区にも古墳が存在することから今回の報告からこれらを塔ノ本古墳群として扱い、本遺跡の周溝を塔ノ本1号墳、塔ノ本古墳を塔ノ本2号墳、平島遺跡E区を塔ノ本3号墳と名称変更することにする。

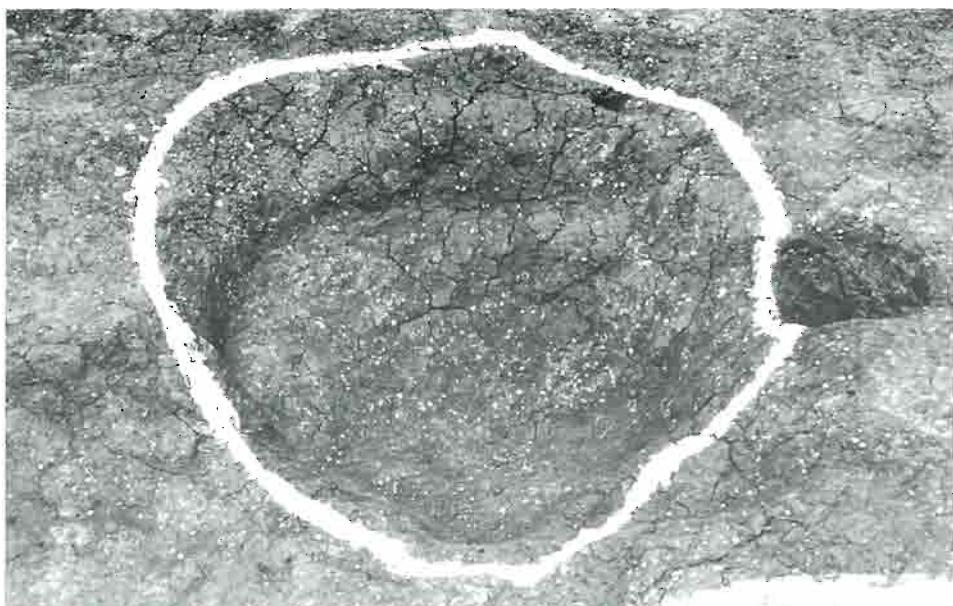


遺跡全景（北から）



遺跡全景（真上から）

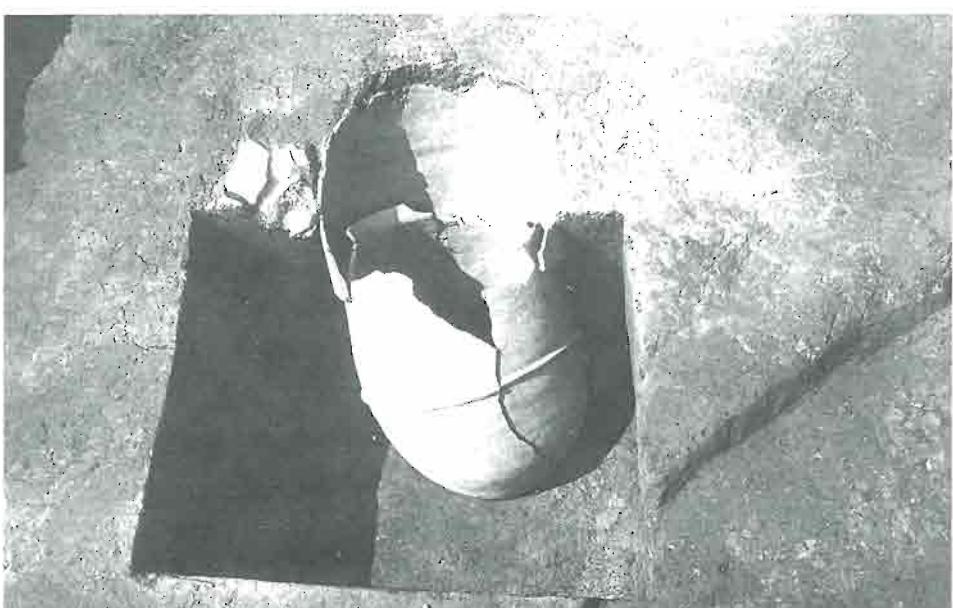
図版2



1号甕棺墓完掘（南から）



2号甕棺墓（北から）



2号甕棺墓（南から）



2号甕棺墓完掘（南から）



3号甕棺墓（南から）

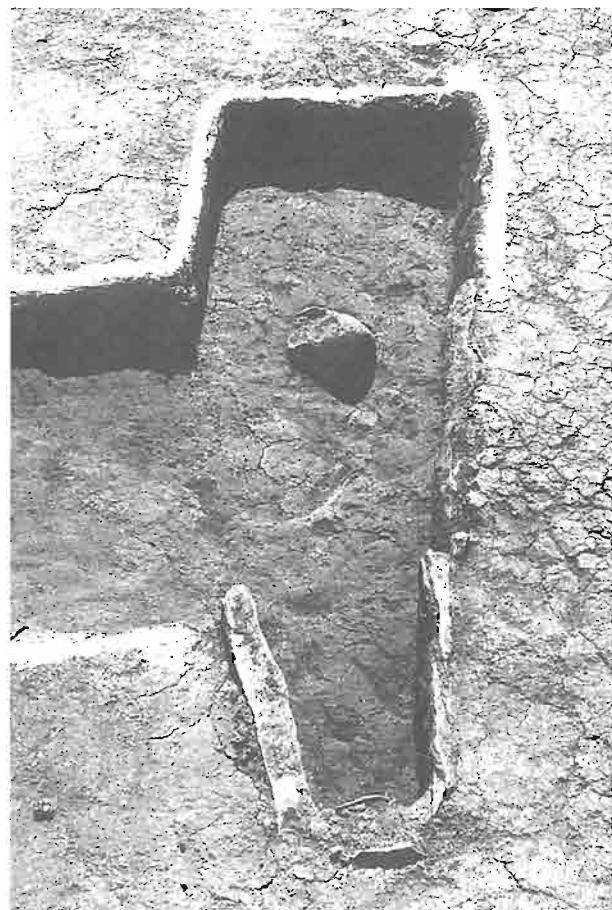


3号甕棺墓（北西から）

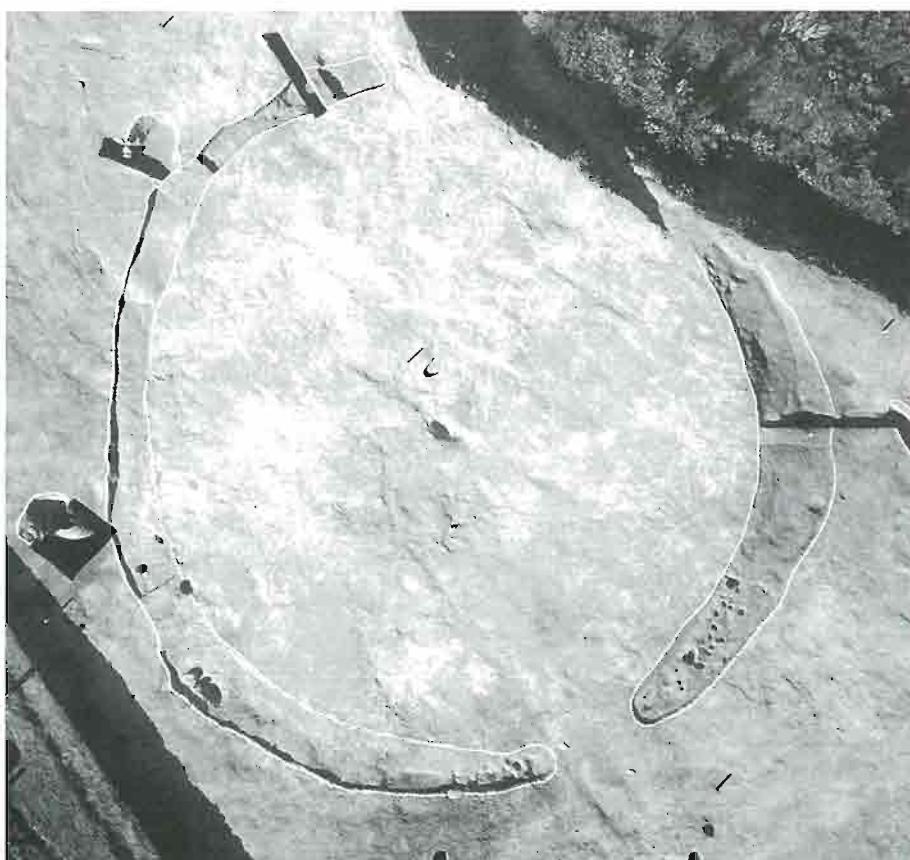
図版 4



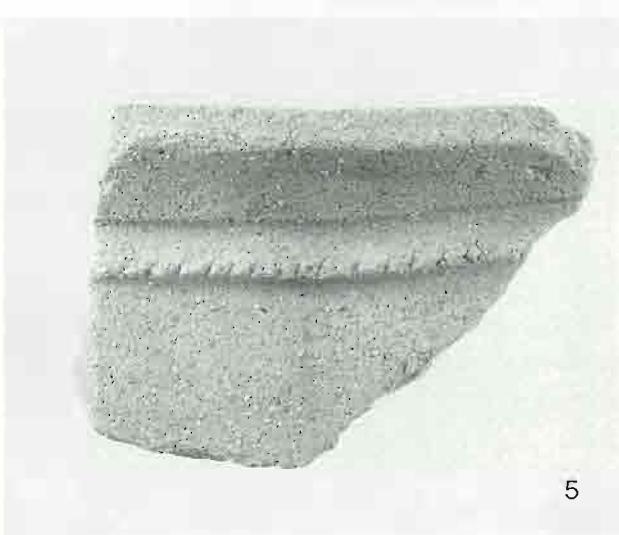
2号墓（南西から）



3号墓（西から）



1号周溝（南西から）

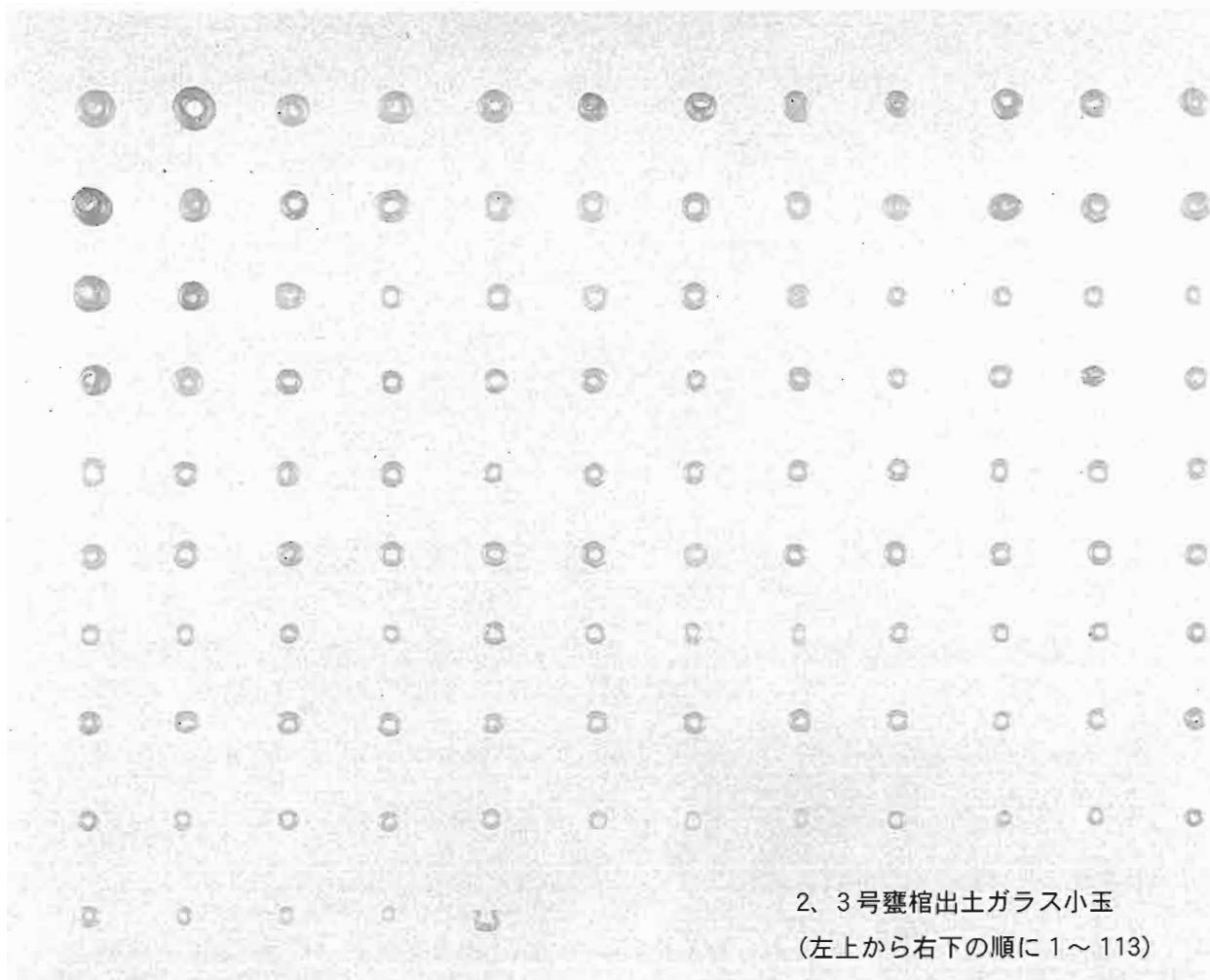


1 1号甕棺

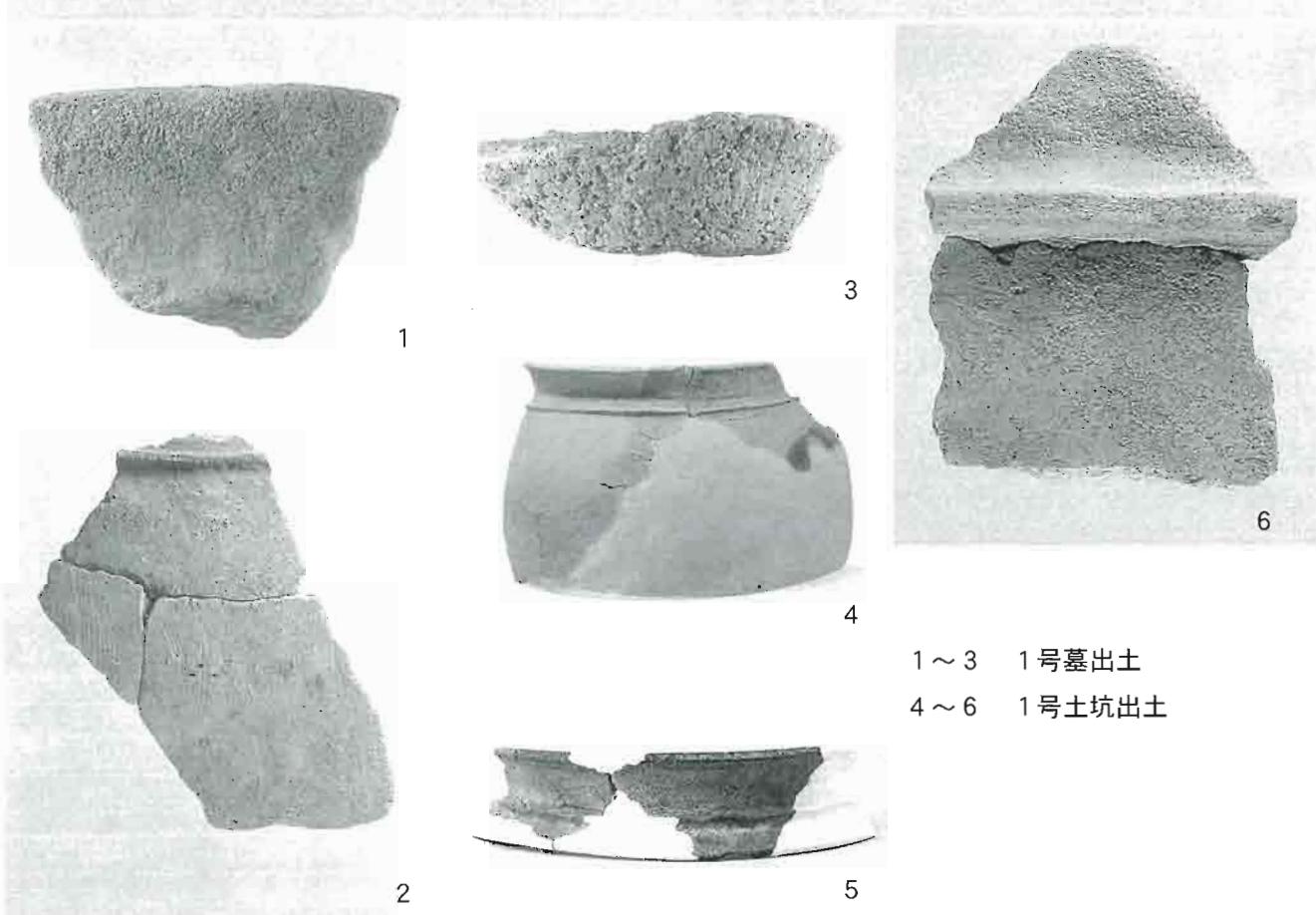
2、3 2号甕棺

4、5 3号甕棺

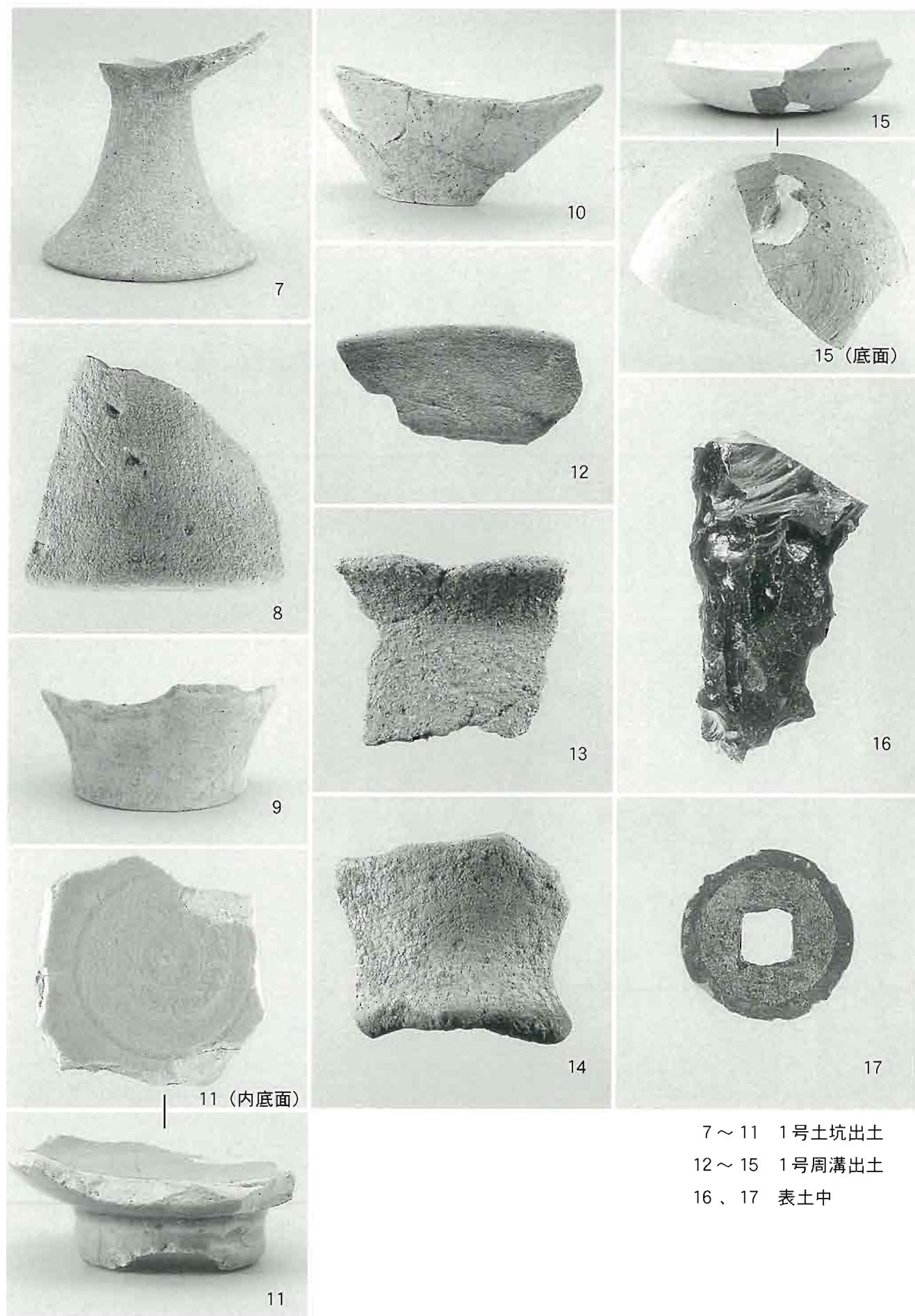
図版6



2、3号甕棺出土ガラス小玉
(左上から右下の順に1~113)



1~3 1号墓出土
4~6 1号土坑出土

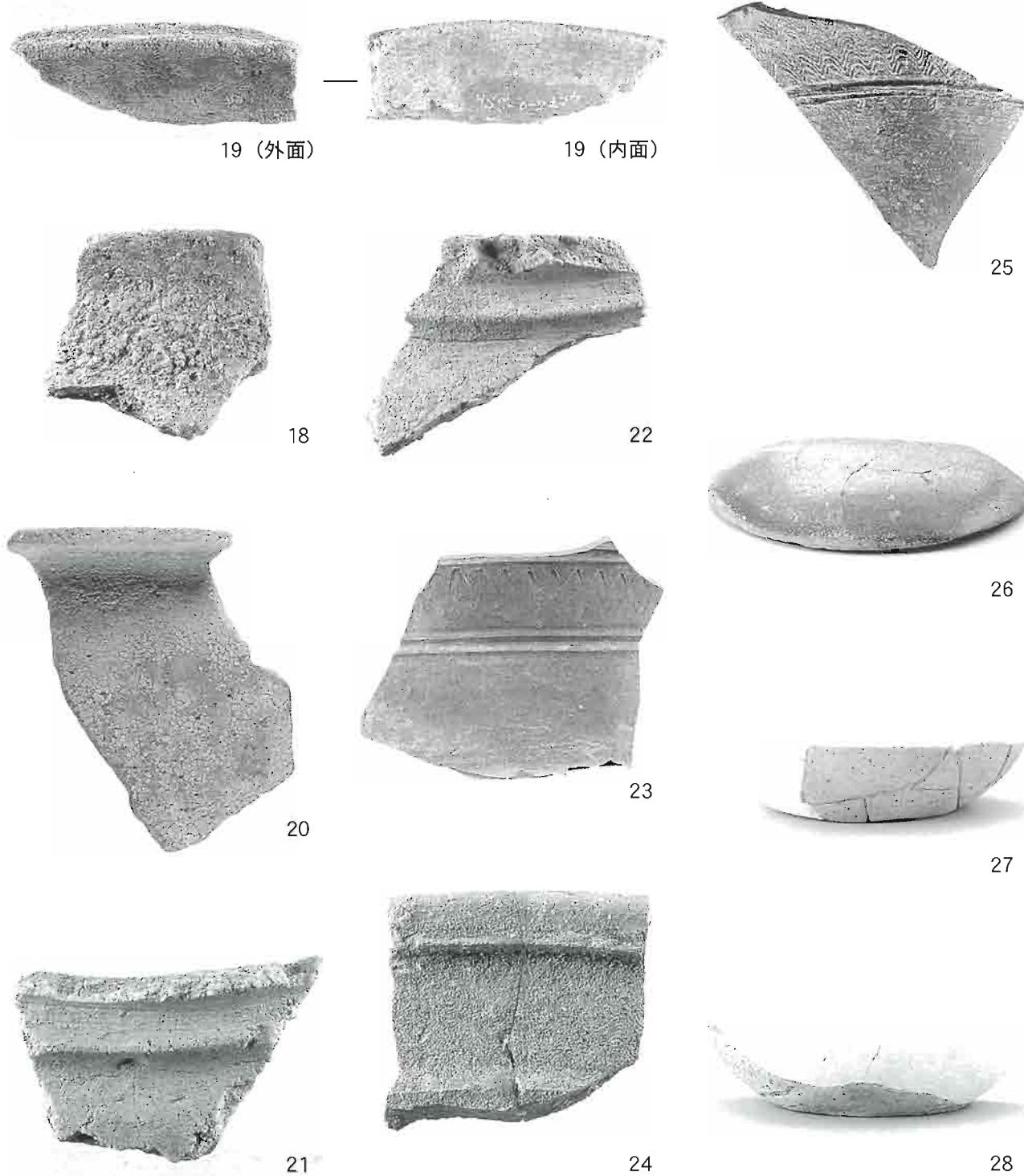


7 ~ 11 1号土坑出土

12 ~ 15 1号周溝出土

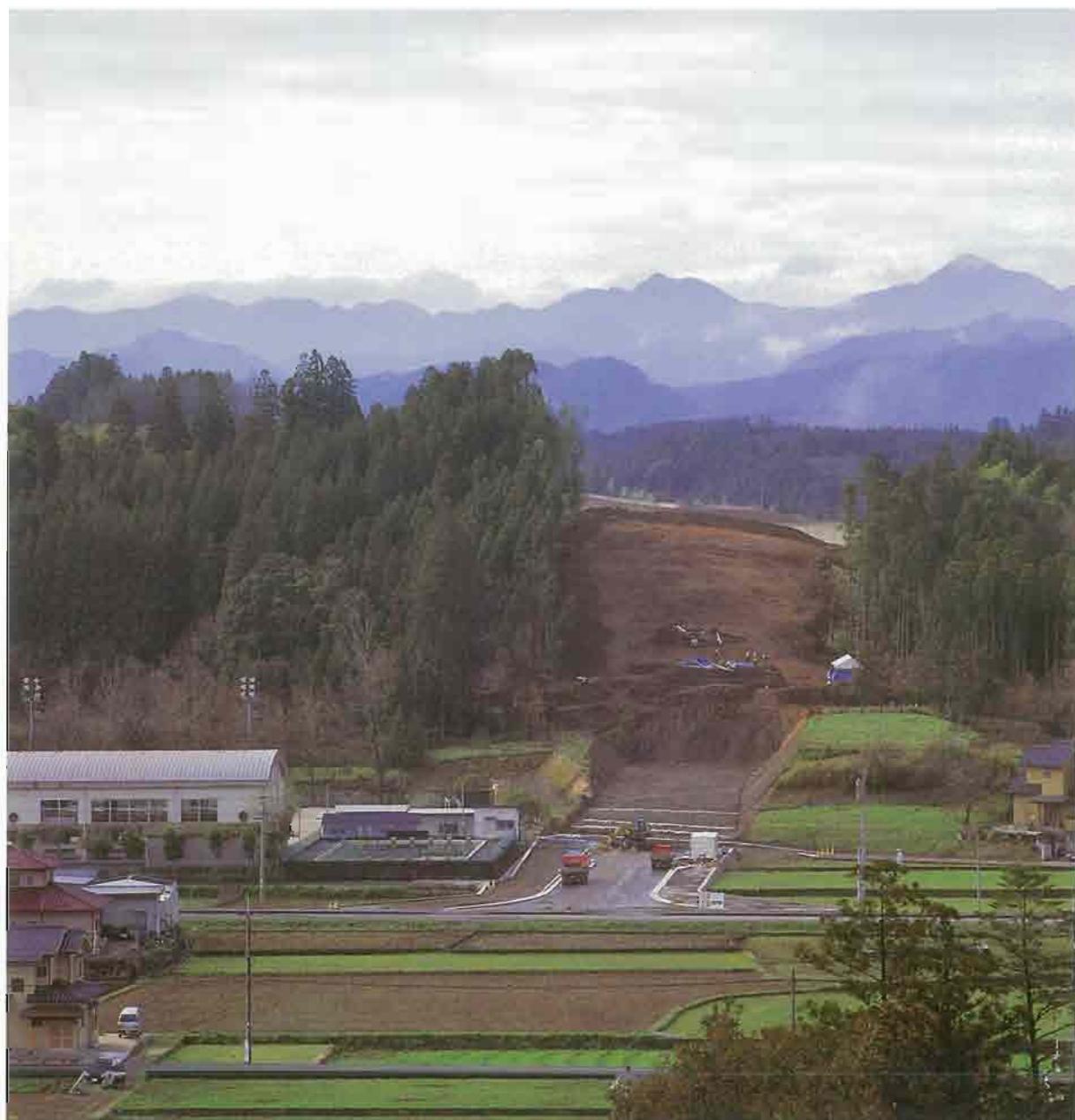
16、17 表土中

図版8



18 1号溝出土
19~23 土坑出土
24~28 表土中

第4章 塔ノ本古墳



1. 古墳の概要（第22・23図、図版9・10）

塔ノ本古墳は、市内東部を西流する有田川左岸の、標高140mの通称“祇園原”と呼ばれる丘陵斜面の中腹よりやや下位に位置している。古墳周辺には祇園原丘陵と類似した丘陵が有田川や来求里川沿いに繋がるようにのびており、そこには古墳が点在しており、これまでに約10数基が調査、確認されている。古墳のある場所は標高124m～130mを測り、背後には丘陵頂部まで急傾斜の斜面が続き、前面には西流する有田川を中心に広がる沖積地や、対峙する須ノ原台地などが一望できる見晴らしの良い所に立地する。

この古墳のあった斜面一帯の調査以前の現況は杉林であった。このため、塔ノ本古墳は知られることなく、今回の道路建設に先立つ分布調査の際に地元の古老の案内によって、初めてその存在が周知されることとなった。こうした経過を踏まえ、調査以前よりこの古墳の名称は字名をとって塔ノ本古墳と名付けたが、隣接した平島遺跡D・E地点^{註1)}の調査において古墳2基の存在が確認されたことから、本報告からこれらの古墳を一括して塔ノ本古墳群と呼ぶこととし、本古墳を“塔ノ本2号墳”と名称を変更する。

調査に入る前の古墳の現状は、天井石がすでに失われており、羨門の立石が露出した状態であった。このため少し離れた位置から見ると、露出した立石を中心に全体的にわずかな墳丘の高まりを知ることができた。それでも本古墳の西側は既に大幅な削平を受けており、東側に関しても風倒木処理のための作業道開設に伴って削平を受けていた。古墳が急斜面からやや緩やかな傾斜場所に選地していることから、調査以前から、おおよそ北向きに開口する横穴式石室を有する円墳であることが予想された。

調査ではまず杉木の伐採、除去を行った後に、機械を使って表土剥ぎから開始した。表土剥ぎは杉の木根を残したまま行い、その後作業員によって人力で除去した。こうした作業と並行して、墳丘確認のための十字トレンチの設定や石室内に堆積していた土砂の除去などを行った。石室^{註2)}はすでに天井石がなくなってしまい、石室上部に使われた扁平石や土砂が堆積していた。さらに周溝の確認や墳丘の土層観察、墳丘内施設の確認、写真撮影、空中写真撮影を行った後、地山整形の確認を進めた。調査中に石室内の壁に顔料が認められることから、その分析調査や、石室内の土砂の篩い作業などを行った後に全ての記録を作成して作業を終了した。

調査作業は平成9年8月19日から平成10年6月30日まで行い、整理作業は平成9年11月4日から11月28日まで行った。

註1) 本古墳のほかに、クエト古墳群、尾瀬古墳群、塚ヶ原古墳群、ガニタ古墳群、亀ノ坪古墳などである。

友岡・松本『佐寺原遺跡・尾瀬遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』大分県教育委員会 1998年

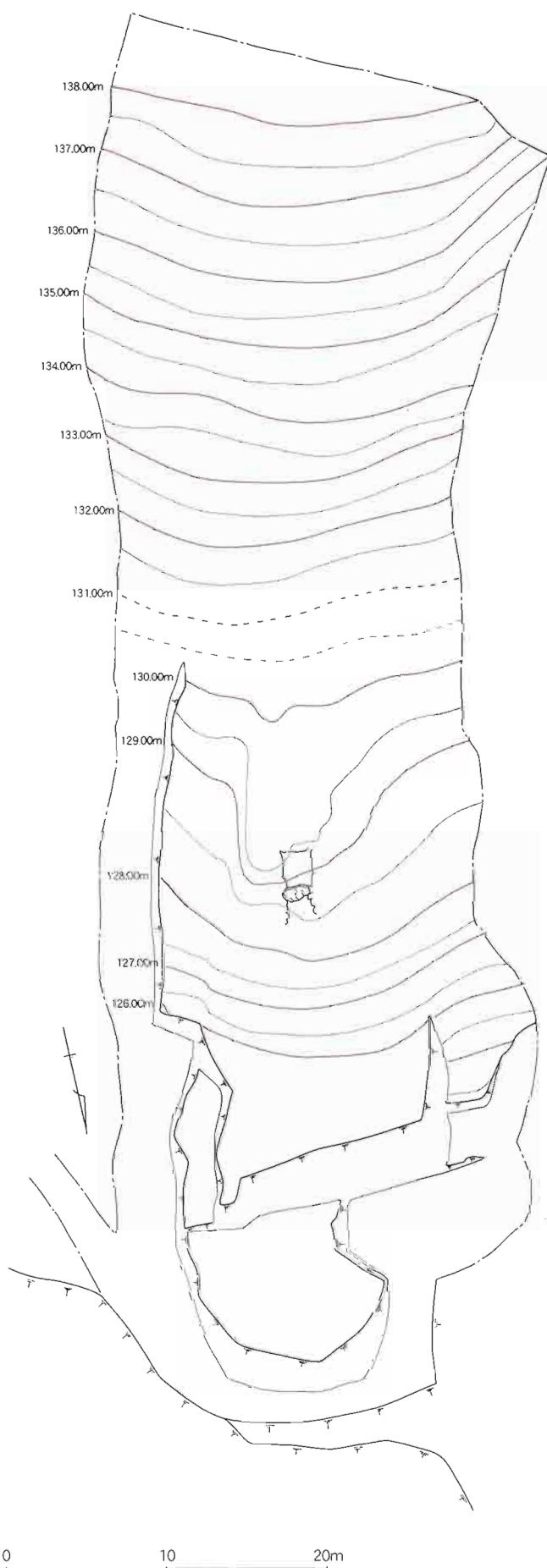
註2) 本報告の第3章平島遺跡D地点

註3) 土居和幸『平島遺跡E地点』『平成10年度臼田市埋蔵文化財年報』臼田市教育委員会 2000年

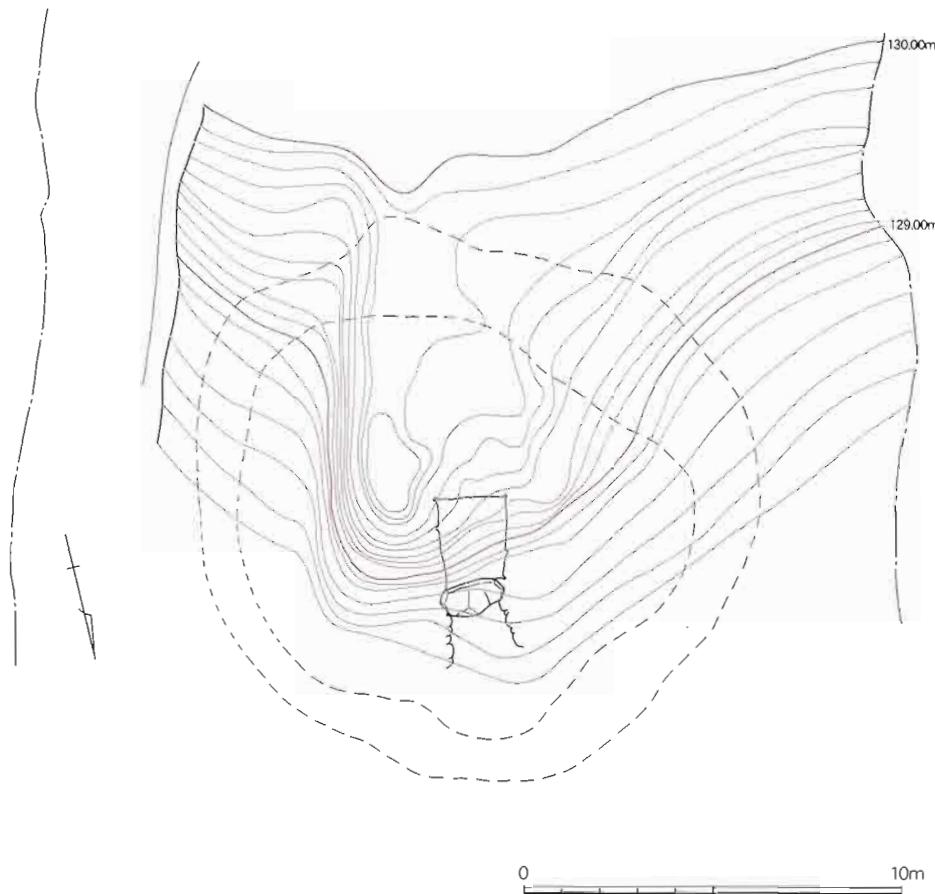
2. 調査記録（第24～26図、図版10～15）

1) 墳丘（第25・26図、図版10・13・14）

この古墳の墳丘は地山である硬質粘性黃褐色土層に盛土して構築されているが、石室西側では暗黃褐色土層の旧地表が残存している。このことから南側斜面の大部分の旧表土は地山整形の際に削平されたものと考えられるが、石室周辺部では斜面を大きく削ることなく旧地表の上に盛土したものと考えられる。墳丘の盛土は西側で1.3m、東側で0.2m程度残存し、その規模は石室主軸に沿って11.2m、直交して



第22図 遺跡周辺地形測量図 (1/400)



第23図 現況測量図 (1/200)

12.1mを測る。

墳丘の土層は概ね3層に別れ、それから推定される築造工程は、まず、石室の構築と掘方の埋め戻しを同時にいながら、一旦腰石のレベルまで版築を行い整形する。その後、石室の天井石を完全に覆うまで版築を繰り返し、2次整形を完了し、全体に盛土している。

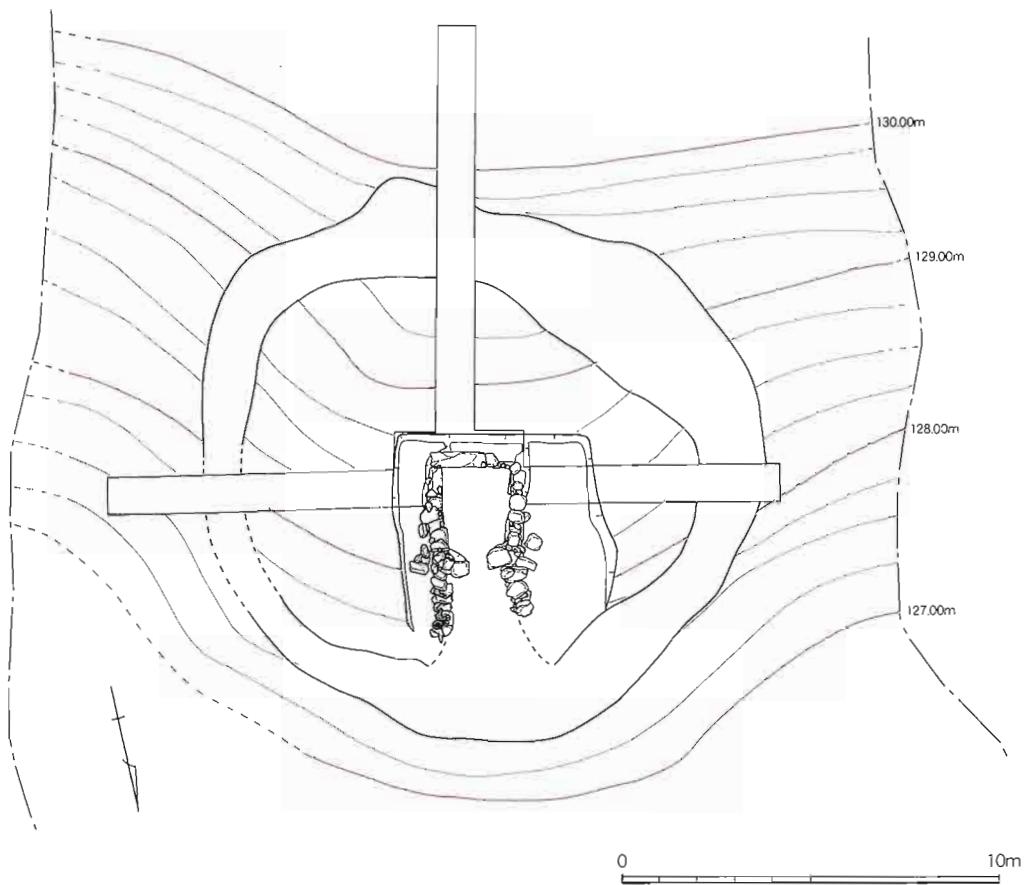
石室の掘方は南側では地山から直接掘り込まれ、東西側は旧地表から掘り込まれている。その形態は現状では斜面下方に開く方形を呈しており、最大幅約5.7m、長さ約5.9m、奥壁側で深さ約1mを測る。

2) 周溝（第25・26図、図版10）

この古墳の周溝は第25図に見るよう墳丘を覆うようにほぼ円形に巡ることが確認された。古墳西側の溝の幅が一定でないのは、調査段階での一部掘り過ぎによる結果である。周溝の断面形は浅い「U」字形を呈しており、深さは約30cmを測る。

3) 主体部（第27図、図版11・12）

内部主体は主軸をN-9°-Eにとる单室両袖の横穴式石室である。北側に開口する石室から羨道部にかけての平面形態は「只」状をなしている。石室は上部の削平が著しい割には残りが良好である。玄室は玄門袖石が左右非対称の位置にあるため両側壁の長さが異なってはいるが、基本的には正方形を呈する。玄室の長さは左側壁で2.56m、右側壁で2.28mを測り、幅は奥壁側で1.91m、羨門側で1.62mを測る。玄室奥壁には高さ約1m、幅約1.6mの大石1枚を立てているが、幅が足りなかつたのかその右側にはこれを補うように小型の石1枚と割り石により腰石として据えている。両側壁にはそれぞれ2枚の大石を利用して腰石とし、その上に割り石積みを行っているが、特に右側壁の腰石は、奥壁と同レベルになる



第24図 墳丘測量図 (1/200)

よう大石1枚を立てている。左側壁の割り石積みにおいては持ち送りが顕著に認められ、本来は左右両側壁上部も持ち送りの構造であったものと推定される。

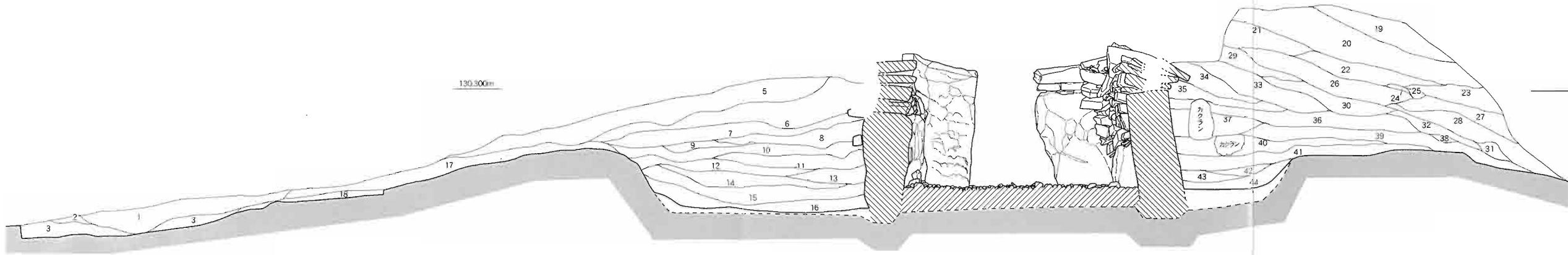
この玄室の四周壁体には赤色顔料による塗布が施されていた。当初は装飾壁画の可能性を示すような円文らしき図柄も想定したが、細かに精査すると赤色顔料は壁面全面に認められ、それが部分的に剥離したものであると判断した。赤色顔料（ベンガラ）は特に奥壁、両側壁に多く見られ、各壁の腰石や割石にもみられるなど、本来は玄室全面に塗布されていたものと推定される。

床面は拳大の河原石を用いた礫石敷きとしているが、奥壁から約60cmの位置には4枚の板石を敷いて屍床を作り出している。ただし、右側壁付近ではこれも奥壁と同じように屍床を示す仕切り石が認められず、板石を割った小石によって隙間を埋めたような状況を呈している。この礫石敷きは、サブトレーナーにて確認したところ、地山を平坦に整形した後に直接敷かれている。

また、玄門は、大型の石材を縦位に据えている。右側にやや大きな石材を用い、左側はその上部の割石が残っていた。この両袖石の上部には長さ約1.7mの石が横たわっているが、これは天井石の一部が滑り落ちたためと考えられる。現存高は左側1m、右側1.2mを測る。袖部は左側を0.62m、右側を0.5m突出させ、幅0.49mを測る。

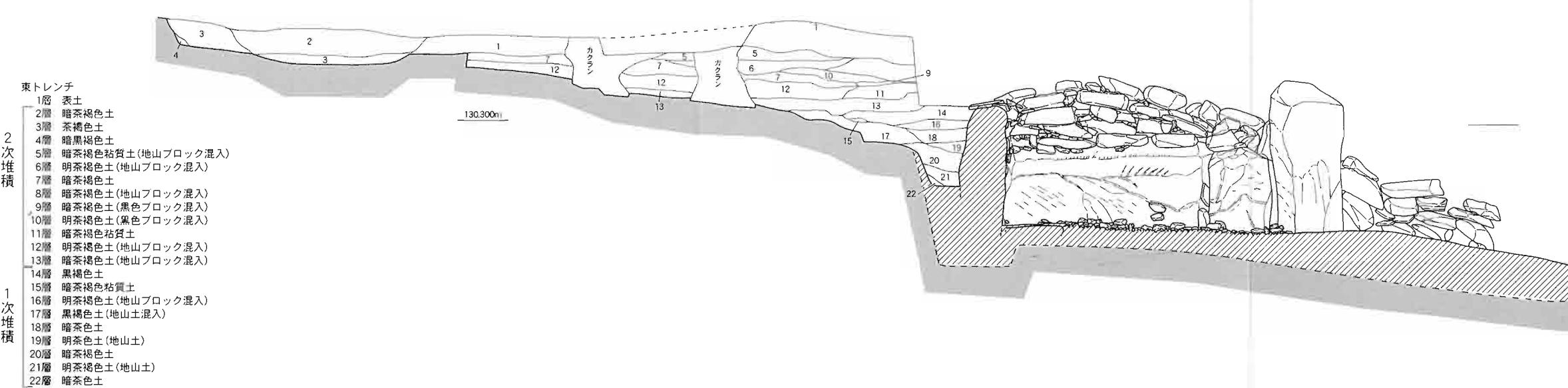
4) 羨道部（図版15）

羨道は左側壁が石室主軸方向と平行して1.41m、右側壁がやや外側に開き1.51mを測る。両側壁ともに腰石は使用されておらず、地山からの割り石積みで、3～4段が残存している。羨道の床面には敷石はない。墓道は本来羨道部に付設して存在したと考えられるが、削平により残存していない。



西トレント	
1 次堆積	1層 茶褐色土(ブロック少量混入) 2層 茶褐色土(黒色土少量混入) 3層 暗褐色土(ブロック混入) 4層 暗褐色土 5層 暗褐色土(黄褐色土ブロック混入) 6層 暗黃褐色土(黄褐色小ブロック混入、黒褐色土混入) 7層 黑褐色土(黄褐色土・黒茶褐色土ブロック混入) 8層 暗黃褐色土(粗粒、黄褐色土ブロック混入) 9層 黑褐色土(黄褐色土少量混入) 10層 暗黃褐色土(黄褐色ブロック多量混入) 11層 黄褐色土(黒褐色土混入) 12層 淡黒褐色土(粗粒、黄褐色土多量混入) 13層 黑茶褐色土(黒褐色土混入・黄褐色土ブロック少量混入) 14層 黄褐色土(軟質) 15層 黄褐色土(粗粒、黄褐色ブロック多量混入)
2 次堆積	16層 黄褐色土 17層 暗黃褐色土(黄褐色ブロック混入) 18層 暗茶褐色土 19層 暗黃褐色粘質土 20層 暗褐色土(黒褐色ブロック少量混入) 21層 黑褐色土(茶褐色ブロック多量混入) 22層 黑褐色土(茶褐色ブロック多量混入) 23層 淡黒褐色土(黄褐色土混入) 24層 淡黒褐色土 25層 黄褐色粘質土(ブロック) 26層 黄褐色土(ブロック、黒褐色土少量混入) 27層 黑褐色土(軟質、黄褐色土ブロック少量混入) 28層 暗褐色土(軟質、黄褐色土小ブロックやや多量混入) 29層 黄褐色土(軟質、ブロック) 30層 暗黃褐色土(黄褐色土ブロック多量混入・黒褐色土少量混入)

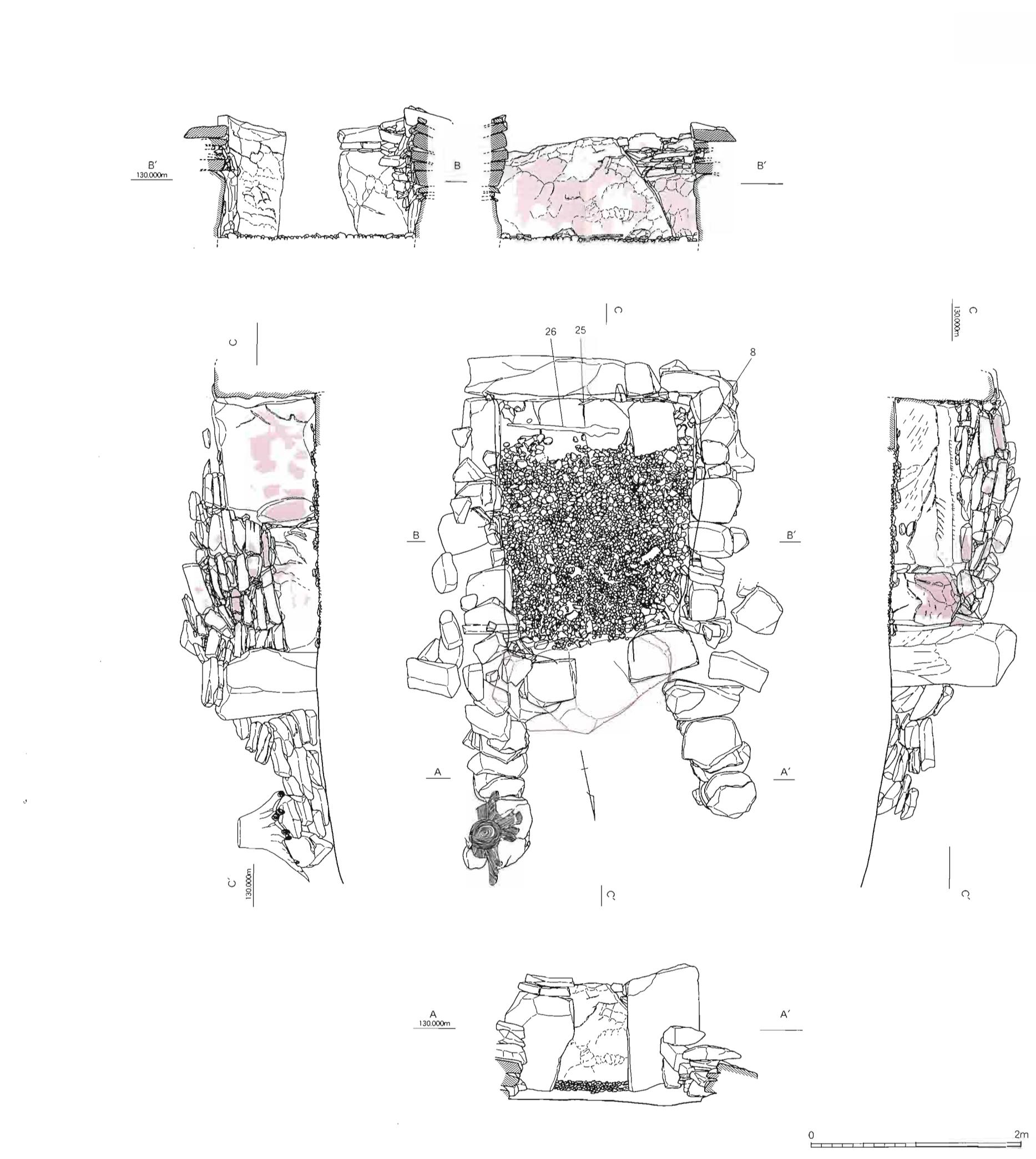
2次堆積	
1 次堆積	31層 黑褐色土(ブロック) 32層 黄褐色土(軟質暗黃褐色土多量混入) 33層 黄褐色土(軟質、ブロック) 34層 黑黄褐色土(硬質、ブロック) 35層 黑褐色土(黄褐色土小ブロック多量混入) 36層 黑褐色土(黄褐色土ブロック混入・黒茶褐色土ブロック多量混入) 37層 黄褐色土(軟質暗黃褐色土少量混入) 38層 黑褐色土(黄褐色土混入) 39層 黑褐色土(黄褐色ブロックやや多量混入) 40層 黑褐色土(黄褐色土混入) 41層 黑褐色土(硬質黄褐色ブロック多量混入) 42層 淡黒褐色粘質土(黄褐色土小ブロック混入) 43層 黑褐色土 44層 黄褐色土(地山ブロック主体)
2 次堆積	



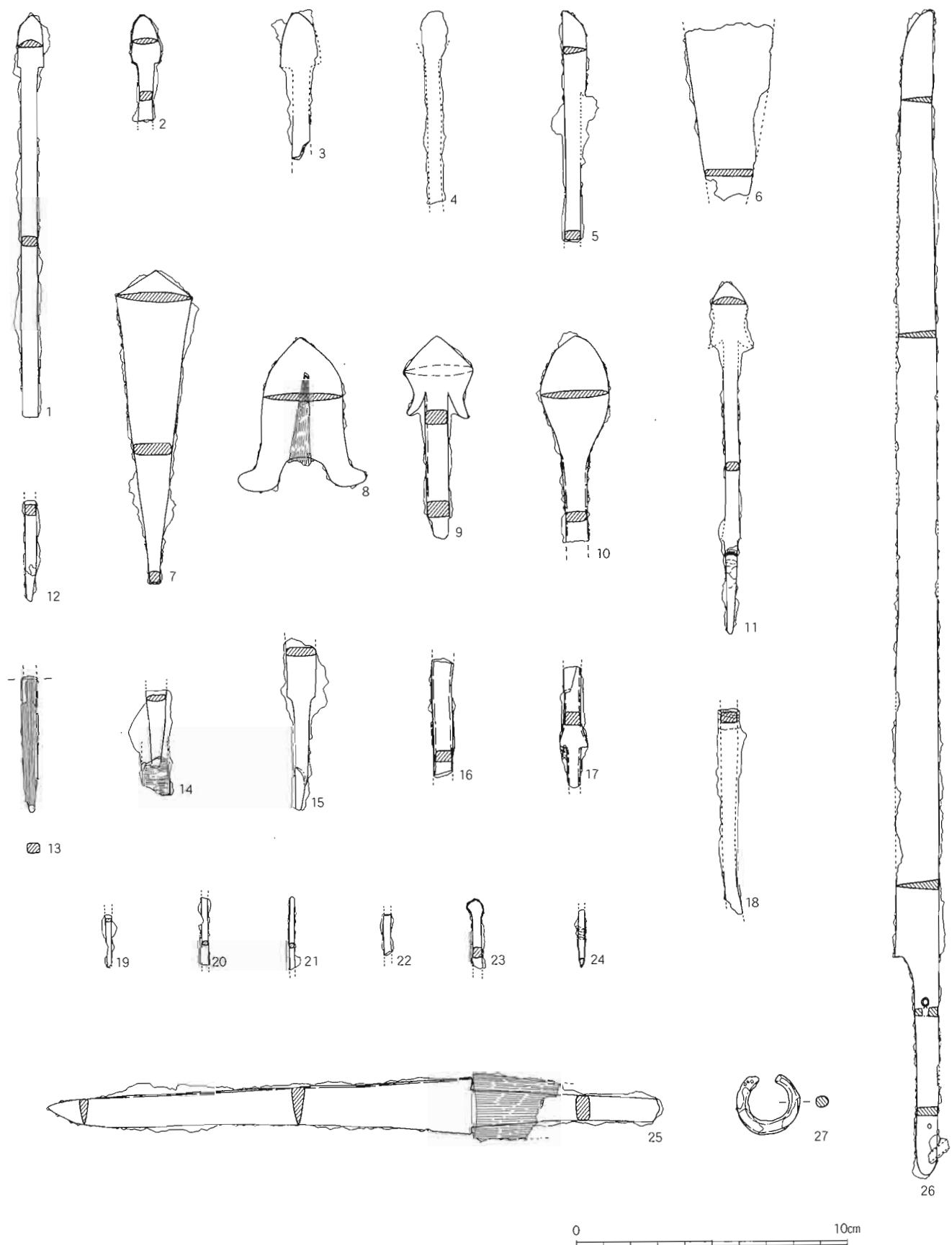
1 次堆積

東トレント	
1 次堆積	1層 表土 2層 暗茶褐色土 3層 茶褐色土 4層 暗黒褐色土 5層 暗茶褐色粘質土(地山ブロック混入) 6層 明茶褐色土(地山ブロック混入) 7層 暗茶褐色土 8層 暗茶褐色土(地山ブロック混入) 9層 暗茶褐色土(黑色ブロック混入) 10層 明茶褐色土(黑色ブロック混入) 11層 暗茶褐色粘質土 12層 明茶褐色土(地山ブロック混入) 13層 暗茶褐色土(地山ブロック混入) 14層 黑褐色土 15層 暗茶褐色粘質土 16層 明茶褐色土(地山ブロック混入) 17層 黑褐色土(地山土混入) 18層 暗茶褐色土 19層 明茶褐色土(地山土) 20層 暗茶褐色土 21層 明茶褐色土(地山土) 22層 暗茶褐色土

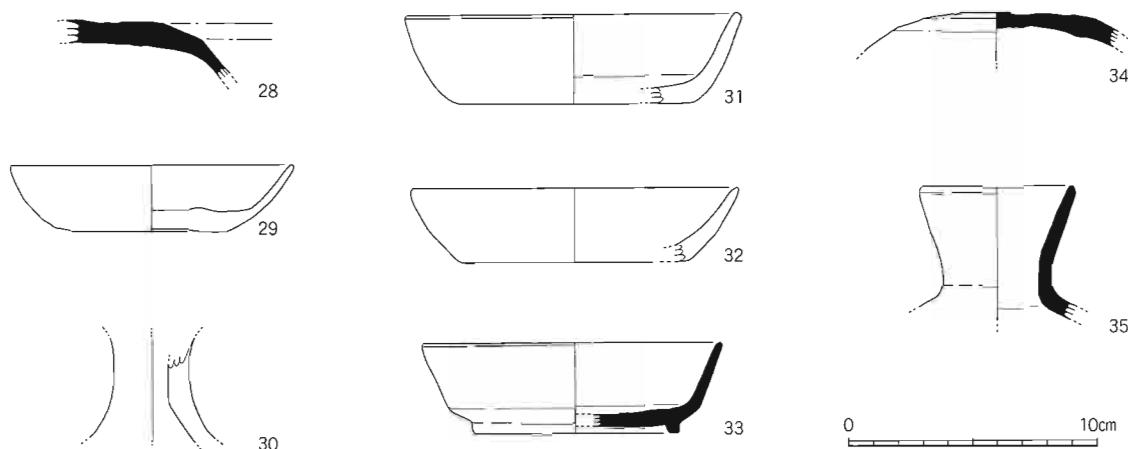
第25図 墳丘土層断面図 (1/40)



第26図 石室実測図 (1/40)



第27図 出土鉄器類実測図 (1/2、26のみ1/5)



第28図 出土遺物実測図（1）（1/3、30のみ1/4）

5) 遺物の出土状況（図版16）

今回の調査で出土した遺物には、鉄器、装身具、土器、銭貨、人骨片などがある。このうち、鉄器27点、装身具1点の副葬品と人骨片は玄室内から出土している。これらの遺物の出土場所は主に玄室内の屍床床面に集中して見られた。屍床の直上からは鉄刀1本、屍床奥壁側には刀子や鉄鎌、屍床右側壁側からは鉄鎌等がまとまって出土した。また、人骨の骨片が屍床右側壁側付近から出土しているが、小破片のため分析不可能であった。このほか、玄室内に堆積していた土砂の中からは、土師器や銭貨などが出土している。

第29図 出土遺物実測図（2）（1/1）

周溝からは須恵器や土師器などの土器が少量出土しており、表土中からは須恵器が出土している。

6) 出土遺物

鉄器（第27図、図版17）

1～18は鉄鎌である。11の完形品を除けばいずれも欠損品である。1～4は長三角形式、5は片刃式、6・7は圭頭斧頭式、8～11は腸抉柳刃式である。10は柳刃式の範疇に入るのではないかと考えられる。12～18は鉄鎌の基部片である。19～24は小鉄片であり、鉄鎌の一部分の可能性もあるが詳細は不明である。8・11・13・14には木質が残っている。25は刀子である。木質が残っている。26は鉄刀である。完形の直刀で、全長108cm、身長90cm、身幅柄部近くで3.9cm、切先近くで3cmを測る。柄部には2箇所目釘穴がみられる。柄に鉄鎌の破片が付着している。

装身具（第27図、図版17）

27は耳環で、銅製金張製品である。環径は2.3cmを測る。

土器（第28図、図版18）

28～30は周溝から出土した。28は須恵器蓋である。29は土師器皿で、30は土師器高杯である。31・32は石室内より出土した。31、32は土師器杯で、いずれもローリングのため調整は不明である。33～37は表土中よりの一括出土。33は須恵器の高台付の壺である。34は須恵器蓋破片である。35は須恵器提瓶の口縁部である。外面には自然釉がかかる。

その他（第29図、図版18）

36は寛永通宝、37は崇寧通宝である。

4. 小結

塔ノ本2号墳は今回の調査結果から、单室両袖式の横穴式石室を有する、直径約12mを測る円墳であることが明らかになった。

この古墳の築造時期については、時期を決定できるだけの土器が出土しておらず、周溝から出土した須恵器蓋では時期決定の材料としては根拠に乏しいので、別の角度から検討を行ってみる。

まず、塔ノ本2号墳の石室について簡単にまとめると平面形プランがほぼ長方形をなす单室構造で、奥壁と両側壁には大きな腰石を立て、その上部を扁平石による割石積みによる持ち送りとし、壁面には赤色塗布が施され、床面には円礫を敷き、奥壁際には扁平石で屍床を設けることで内部空間を分けている。また、墓道は短く、「只」状をなしている。こうした特徴のうち、单室で、腰石と割石による持ち送り構造は、北部九州では5世紀後半頃から出現している。市内では近接して存在する尾漕古墳（1号墳）において類似した石室構造の調査例があり、その報告によれば、この古墳は5C末に築造された单室両袖式の横穴式石室で、塔ノ本2号墳と同様に石室の壁面に赤色塗布が施されている。塔ノ本2号墳と比較した場合には構造面や壁面への赤色塗布など共通点が見られるが、石室の形態は尾漕古墳（1号墳）がその長さと幅の比率が1：1.9に比べ、塔ノ本2号墳ではその比率はほぼ1：1.2と、前者はより長方形に、後者は正方形に近い。

さらに、尾漕古墳（1号墳）は奥壁に1枚石を用いるなど構造的にも安定した構築がなされているのに対し、塔ノ本2号墳は奥壁に複数の石を使用し、袖石は左右が不揃いと構造的には安定感に欠けるなど雑な構築が窺えることなどから、構造的には5C代の構築技術を残すものの尾漕古墳（1号墳）よりは後出するものと推定され、その年代は6C前半代に比定されると考えられる。

最後に、この古墳は天井石や上部の墳丘を欠いているが、玄室内から出土した中世の所産と考えられる土師器の杯や、1102年鋳造の崇寧通宝と1636年以降鋳造の寛永通宝が出土していることから、少なくとも中世～近世期にはこの古墳が開口あるいは一部崩壊したと考えられる。この時期に古墳が何らかの祭祀行為の場所となり、それらの遺物はその道具として使われたものと推定される。

註1) 友岡・松本 『佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

大分県教育委員会 1998年

追記

この古墳の報告に関しては、本来ならば現場の大半を指揮した調査担当者が直接的または間接的にも、遺物の実測や遺構や遺物の製図から原稿作成まで行うべきところであるが、諸般の事情もあり、また協力要請にもかかわらず調査担当者の協力はほとんど得ることは出来なかった。

そのため、本古墳の整理、報告などすべて渡邊が担当して行うという結果となった。調査記録や図面、内容などには不備が多いとも感じており、本報告の内容責任についてはすべて土居にあることをお断りしておく。



玄室奥壁



玄室前壁



玄室左側壁



玄室右側壁

写真3 石室内赤色顔料塗布状況



古墳遠景（北から）

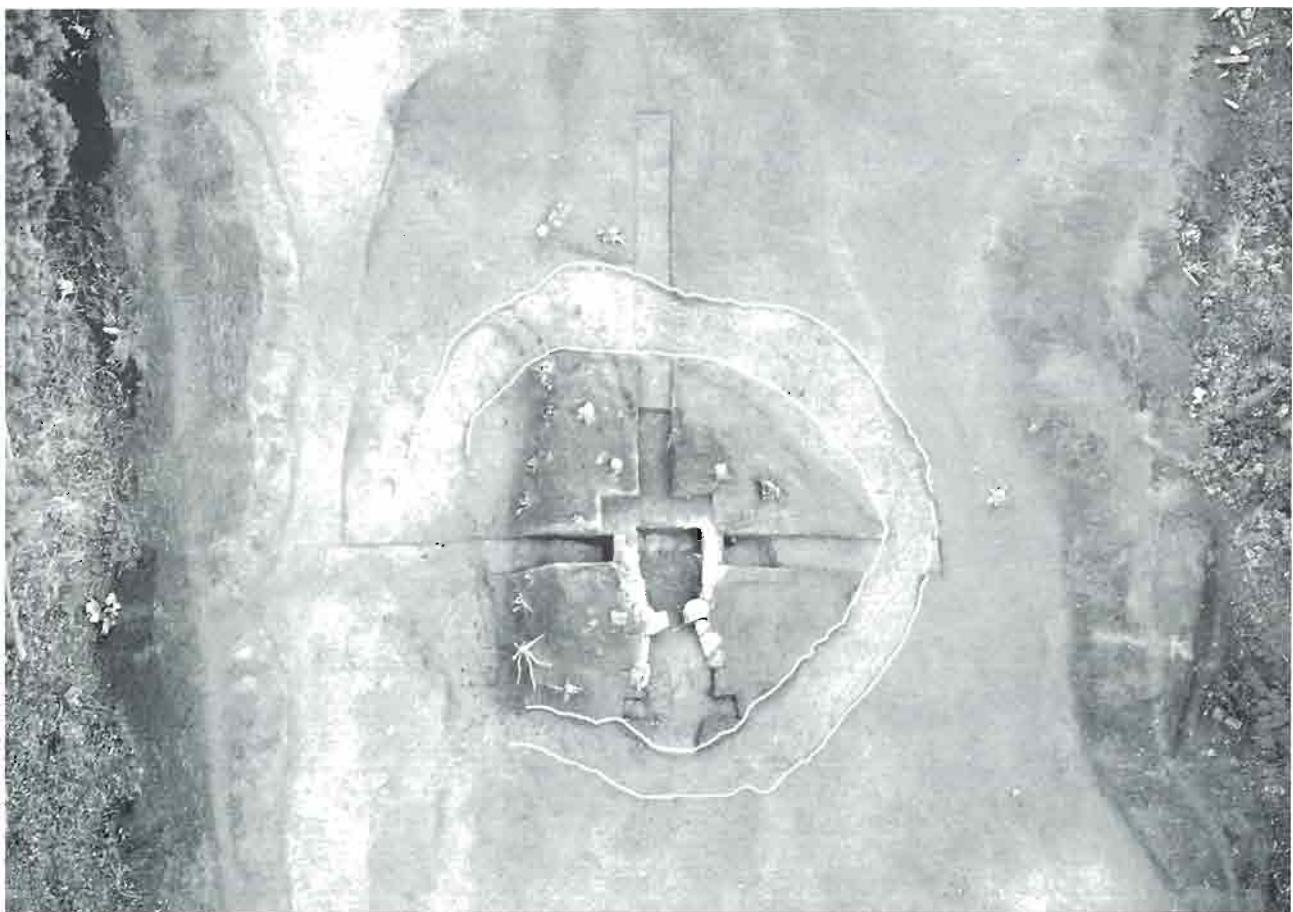


古墳全景（北から）

図版 10



墳丘現況（北から）



古墳全景（上空から）



玄室奥壁



玄室前壁

図版 12



玄室左側壁



玄室右側壁



墳丘完掘状況（北から）



墳丘土層断面（北から）



墳丘西側土層断面

図版 14



墳丘東側土層断面



墳丘南側土層断面



奥壁・左側壁石組状況



石室掘方状況（北より）



羨道部



玄室（羨道側より）

図版 16



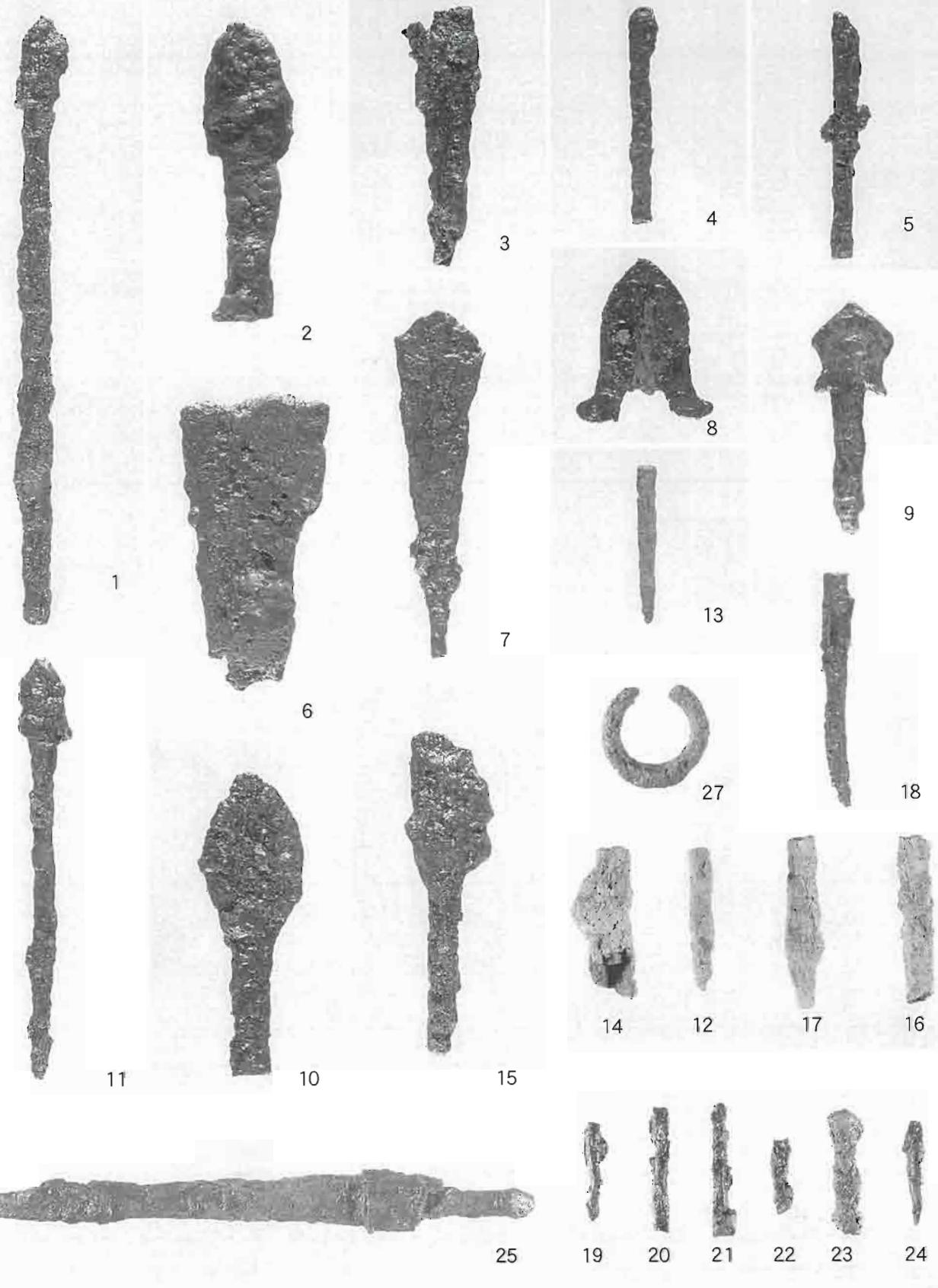
人骨出土状況



遺物出土状況（1）

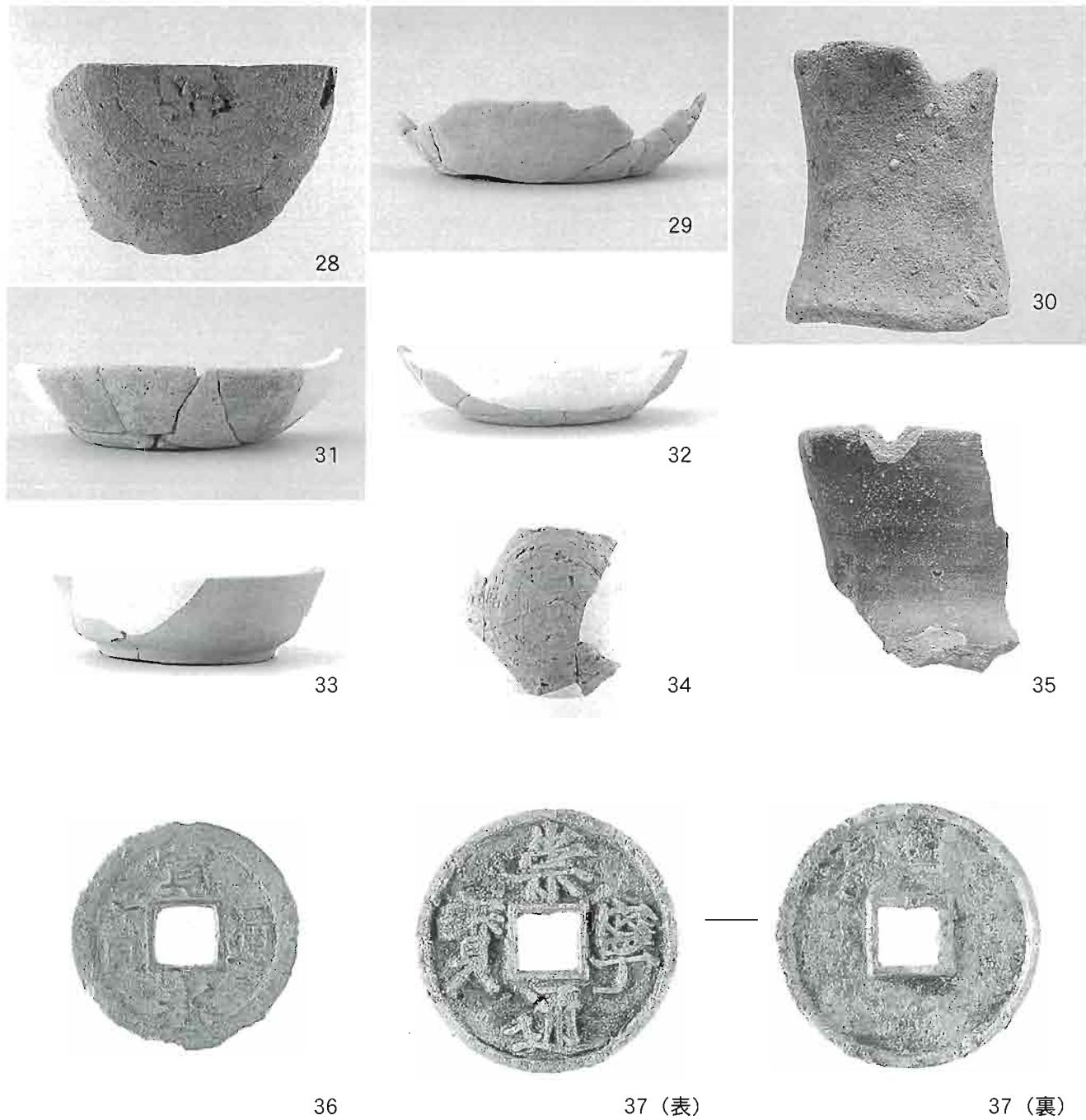


遺物出土状況（2）



26

図版 18



第5章 祇園原遺跡



1. 遺跡の概要

遺跡は日田市東部の大字東有田字ギオン原に所在し、比高差約40mを測る通称“祇園原”と呼ばれる標高約140mの丘陵上に存在する。この低丘陵はその西側を北流する求来里川と、その北側を西流する有田川の両河川が合流する地点に立地しており、眼下には二つの河川域の沖積地が一望できる好所でもある。

現在この丘陵地は、平成5年度から事業が進められた日田市木材流通加工団地（ウッドコンビナート）開発によってその大半は無くなり、一部を残すのみとなっているが、それ以前の現況は主に畠地で、その縁辺の斜面には杉が植栽されている。

今回発掘調査を行った2次調査地点は、祇園原丘陵の西側の位置にあたり、主に丘陵頂部から斜面へと地形が変化する場所でもある。道路建設予定地がこの丘陵斜面部を中心に横断することから、調査区の下位は急斜面となっていた。

この2次調査地点のすぐ東側の1次調査地点は、先の日田市木材流通加工団地（ウッドコンビナート）開発に伴って、平成8年度から継続した発掘調査が実施されている。^{註1)} 調査では主に弥生時代中期から後期の竪穴住居跡24軒、掘立柱建物跡8棟、円形周溝遺構1基、小児用甕棺墓5基などで構成される弥生期の集落跡や、古墳時代後期の竪穴住居跡2基、さらには近世墓57基などの遺構と多くの遺物が発見されている。

こうした調査のなかでも、弥生時代中期から後期の集落遺構は注目される。それは、集落の周囲を円状に竪穴住居跡を配置し、その中心の空間には3間×7間、3間×6間、2間×5間などの大型建物や1間×2間の掘立柱建物がみられ、さらにはこうした施設とは離れた位置に棟持柱建物が存在するなど、この時期の集落構造を考える上で興味深い構成をなしている。さらに、竪穴住居跡に限ってみれば、その平面形が円形や方形、さらにはその中間形態が存在し、円形から方形へと変遷する過程が窺い知ることができる好資料を提供している。

今回の2次調査は、道路予定地と東側に隣接して存在していた近世墓を対象として、前者は全面発掘調査を、後者の近世墓についてはグリット掘りで実施した。調査では、以前の現況が杉林であったことから、表土剥ぎは杉木の根を残したまま行い、その後人力で木の根を除去した。また、すでに存在が明らかであった近世墓については、人力による作業とした。

註1) 行時志郎 「祇園原遺跡」『平成8年度日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会 1998年

行時志郎 「祇園原遺跡」「有田塚ヶ原遺跡群」 日田市教育委員会 1999年

2. 遺構と遺物（第30図、図版19・20）

2次調査で検出した遺構は掘立柱建物8棟、柵列？1、土坑1基、近世墓2基、近世以降の溝1条である。これらの遺構の大半は第2図に見るように、調査区南側の標高141m以上の頂部に近い場所において集中的に検出された。こうした遺構の密集する場所から低い位置で検出したピットは、遺物もなく、埋土の状況から大半が木の根跡である。

なお、地山は茶色ローム土で、その下位には黄色ローム土が堆積しているが、標高が下がるにつれ地山は黄色ローム土へと変化していた。検出した遺構の大半は茶色ローム土から掘り込まれていた。



第30図 遺構配置図 (1/200)

1号掘立柱建物（第31図、図版19）

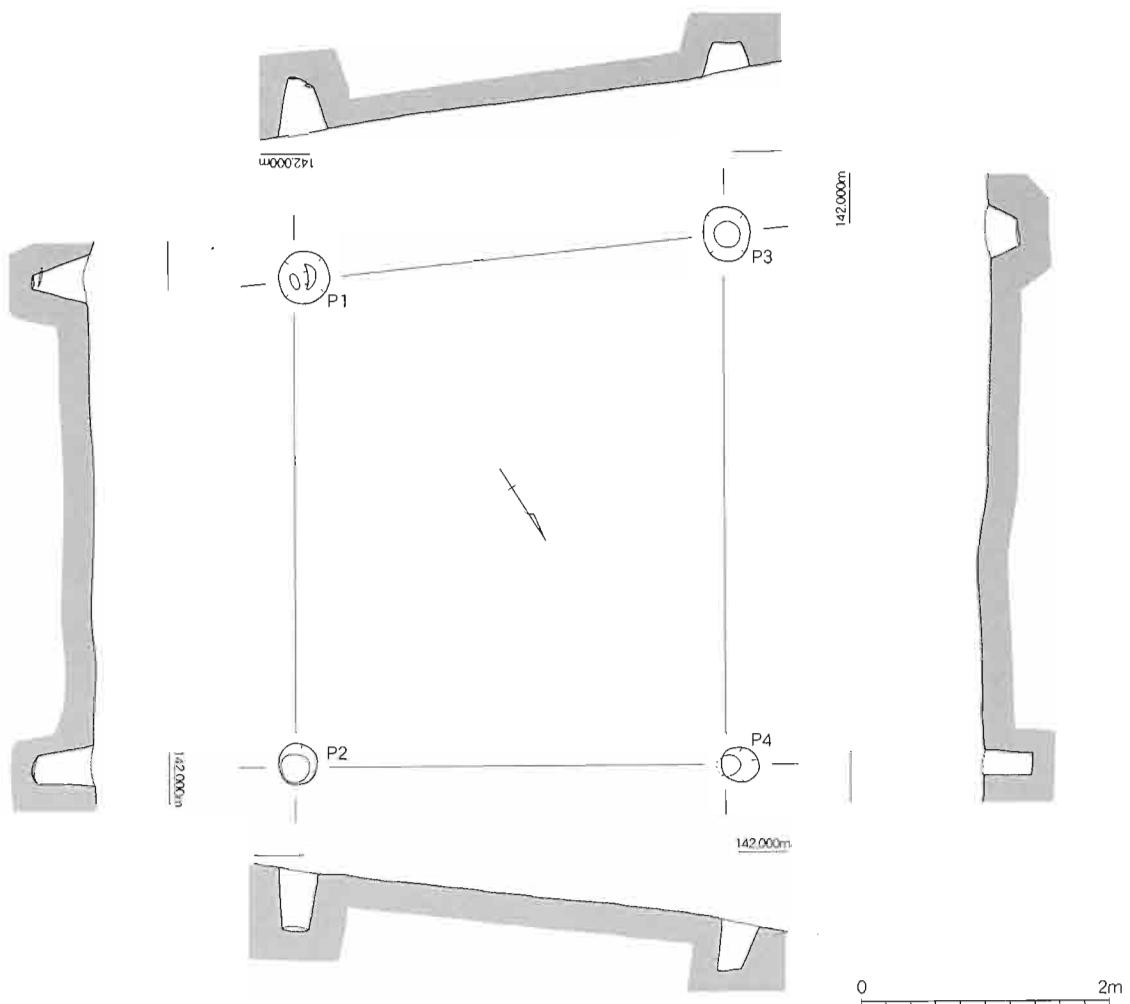
調査区の北側隅で検出した1間×1間の建物で、主軸はN-57°-Wを測る南北方向である。その規模は心心距離で長軸が4.26m、短軸が3.5m、床面積は14.4m²である。柱穴の深さは26cm～49cmを測る。柱穴の中からは遺物は出土していない。

2号掘立柱建物（第32図、図版20）

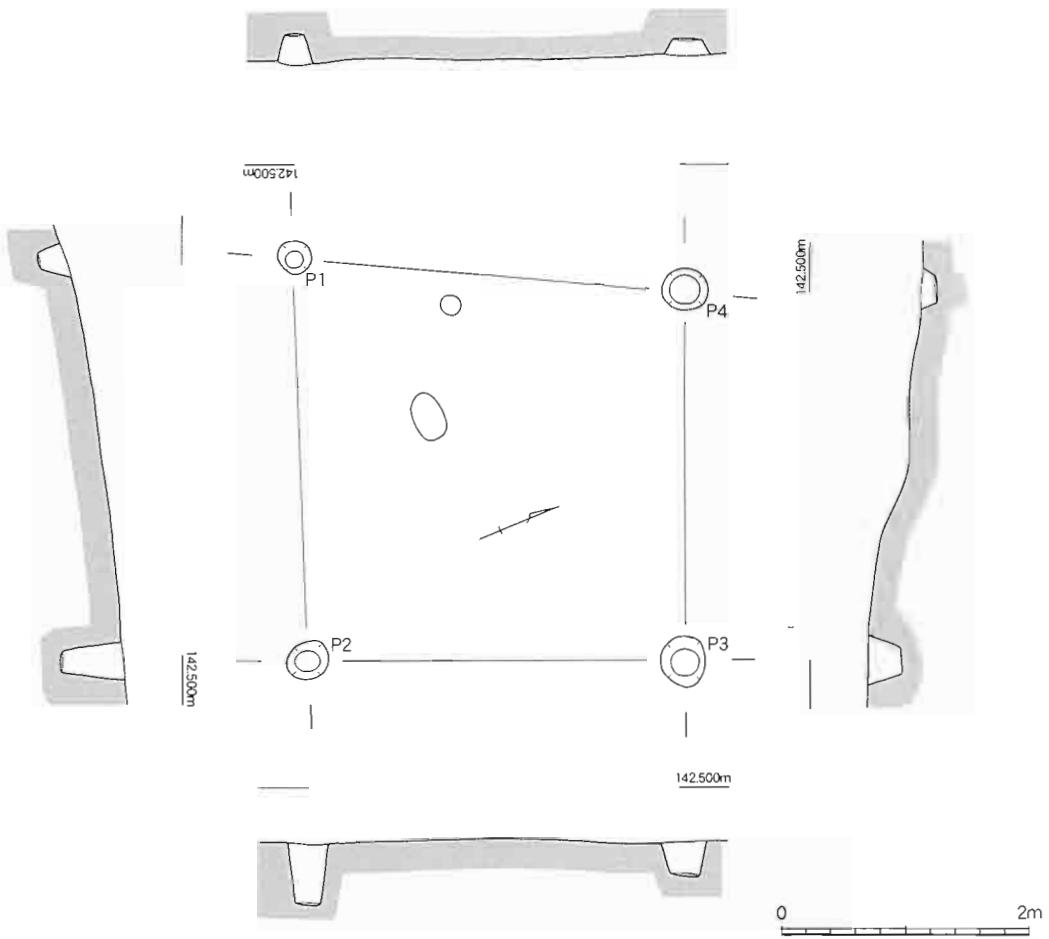
1号掘立柱建物のすぐ北側で検出した1間×1間の建物で、主軸はN-70°-Wを測る南北方向である。その規模は心心距離で長軸が3.24m、短軸が3.14m、床面積は9.6m²である。柱穴の深さは13cm～51cmを測る。柱穴の中からは遺物は出土していない。

3号掘立柱建物（第33図、図版21）

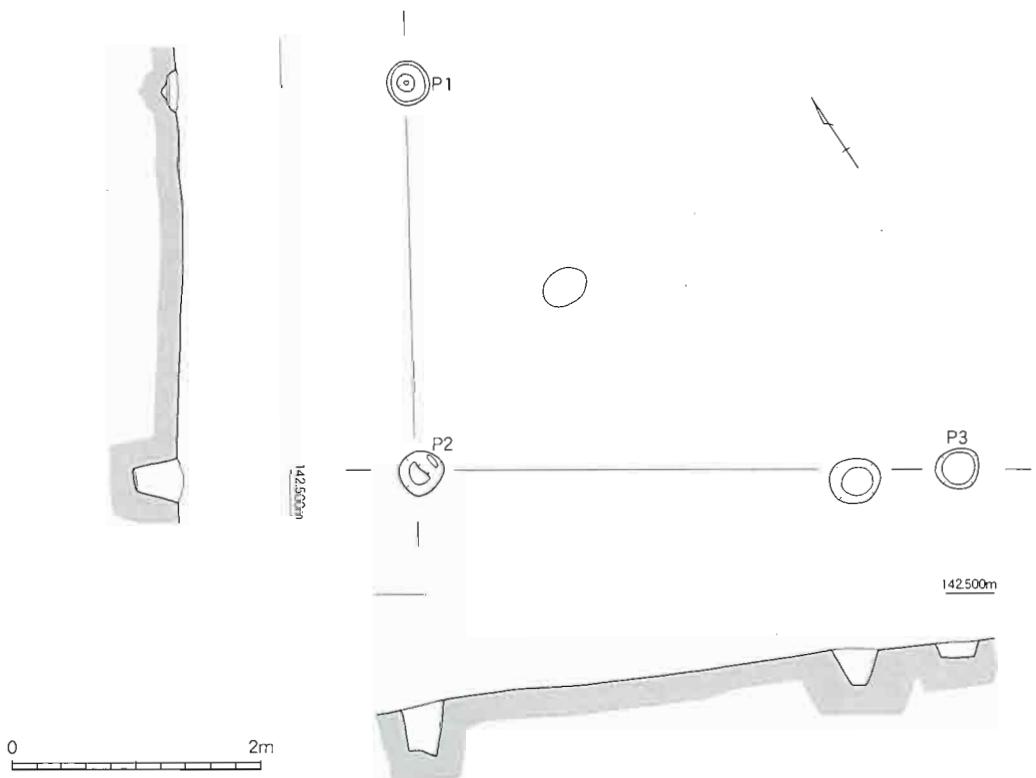
2号掘立柱建物のすぐ北側で検出した1間×1間の建物と推定され、主軸はN-57°-Wを測る南北方向である。その規模は心心距離で長軸が4.24m、短軸が3.04m、床面積は推定で12.8m²である。柱穴の深さは11cm～45cmを測る。柱穴の中からは遺物は出土していない。



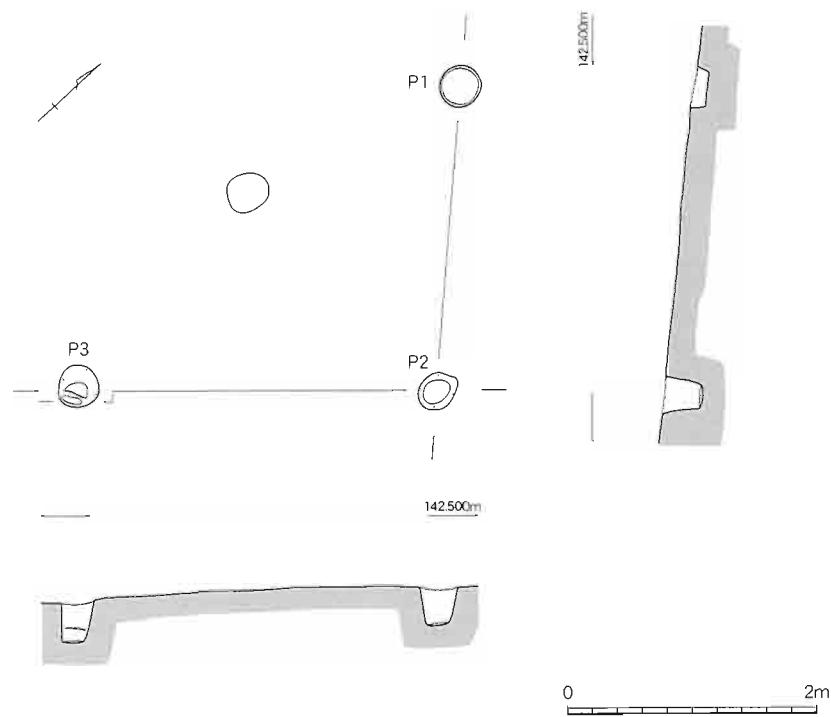
第31図 1号掘立建物実測図 (1/60)



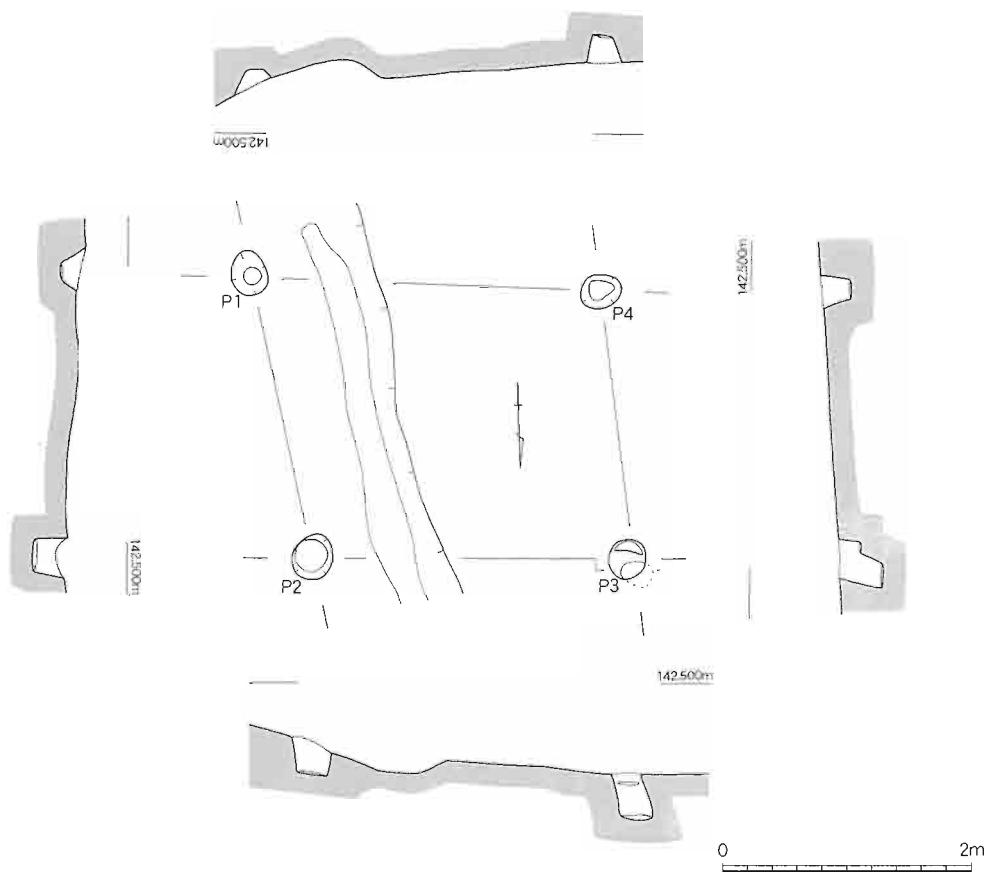
第32図 2号堀立柱建物実測図 (1/60)



第33図 3号堀立柱建物実測図 (1/60)



第34図 4号堀立柱建物実測図 (1/60)



第35図 5号堀立柱建物実測図 (1/60)

4号掘立柱建物（第34図、図版20）

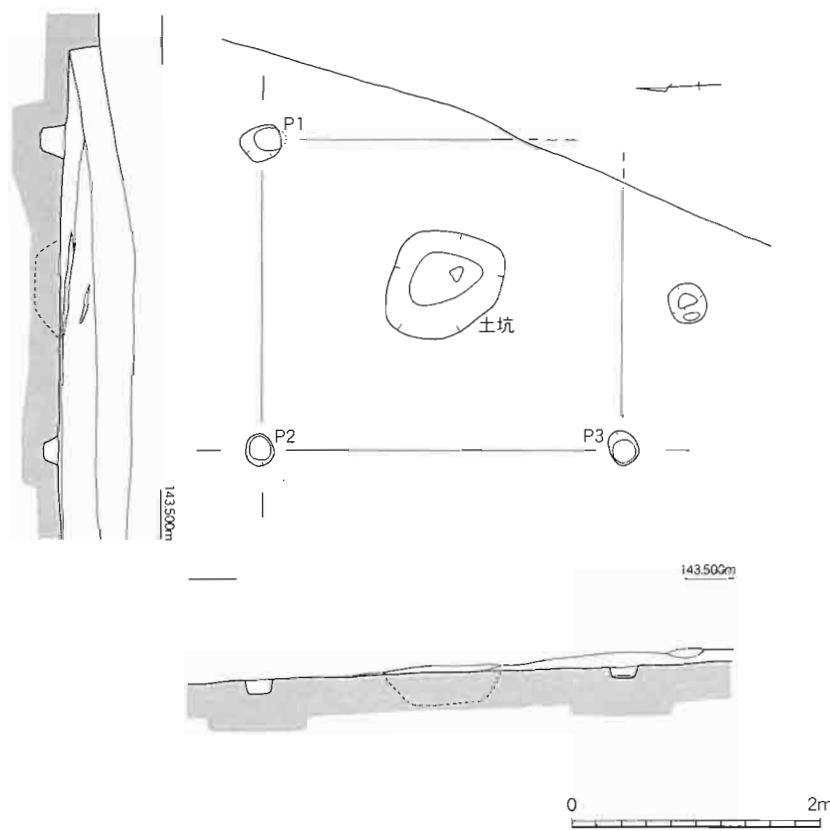
3号掘立柱建物と切り合うように検出した1間×1間の建物と推定され、主軸はN-43°-Eを測る南北方向である。その規模は心心距離で長軸が2.92m、短軸が2.48m、床面積は推定で7.2m²である。柱穴の深さは14cm～31cmを測る。柱穴の中からは遺物は出土していない。

5号掘立柱建物（第35図、図版20）

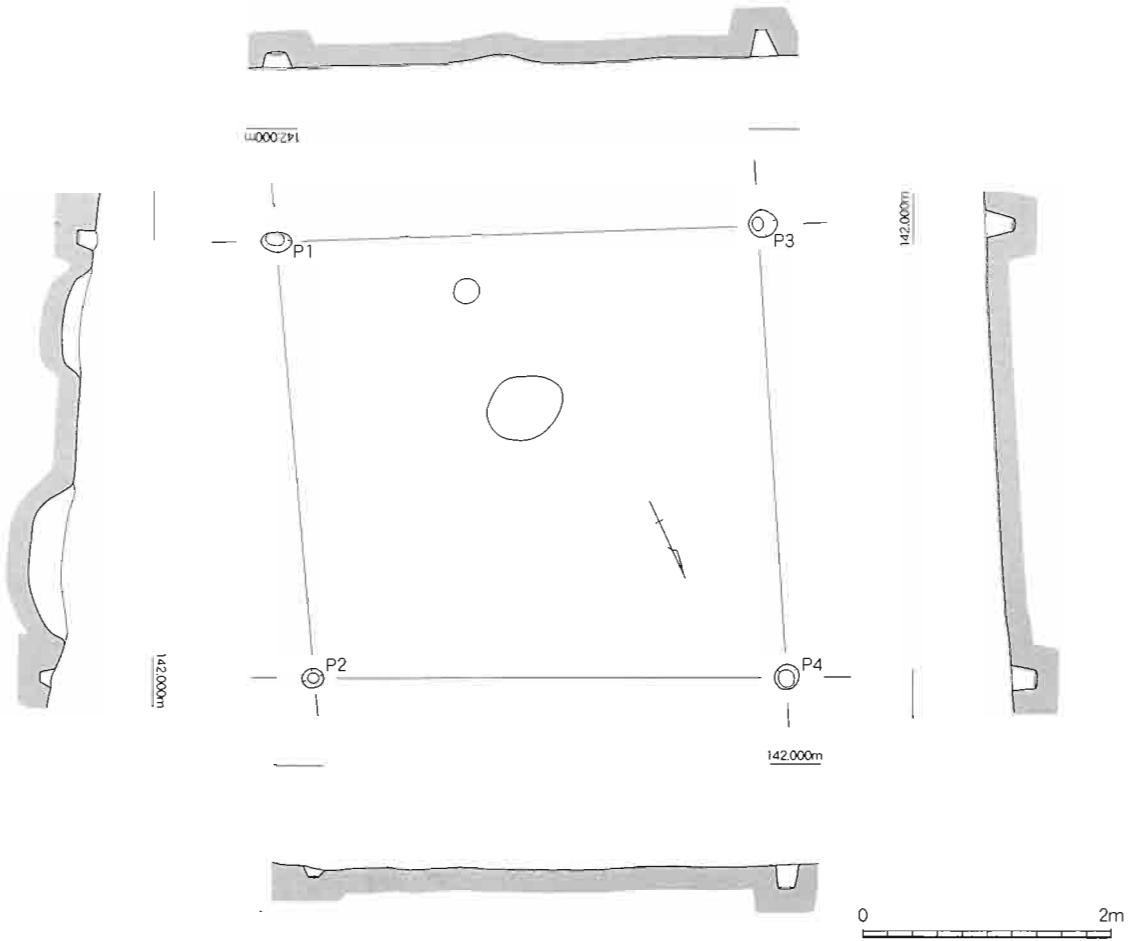
4号掘立柱建物の北側で検出した1間×1間の建物で、主軸はN-85°-Wを測る南北方向である。その規模は心心距離で長軸が2.08m、短軸が2.32m、床面積は6.2m²である。柱穴の深さは19cm～34cmを測る。柱穴の中からは遺物は出土していない。

6号掘立柱建物（第36図、図版21）

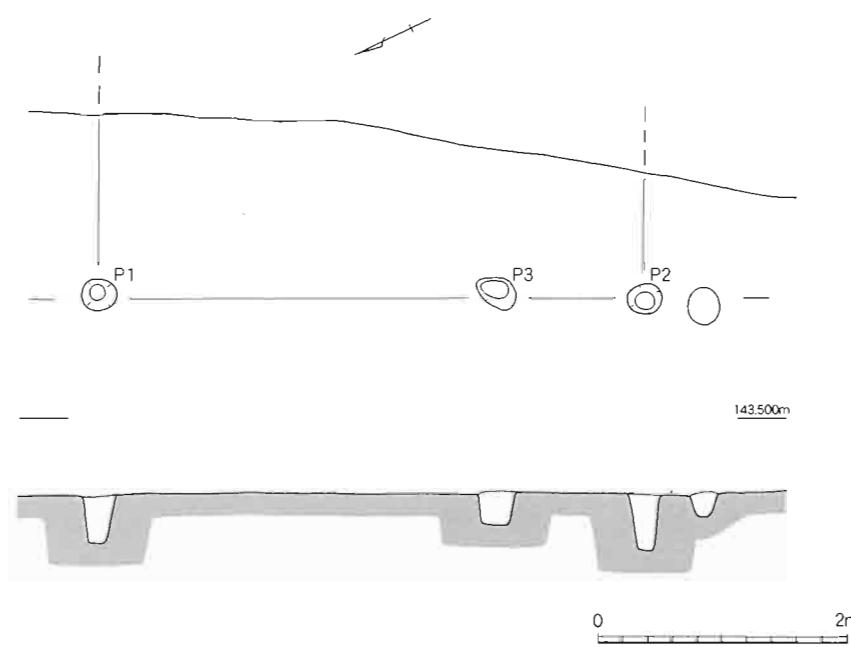
5号掘立柱建物の東側で検出した1間×1間の建物と推定され、主軸はN-4°-Eを測る南北方向である。その規模は心心距離で長軸が2.92m、短軸が2.05m、床面積は推定で7.3m²である。柱穴の深さは10cm～19cmを測る。建物の中心には長軸が92cm、短軸が84cm、深さが29cmを測る不定形な土坑が伴う。柱穴や土坑の中からは遺物は出土していない。



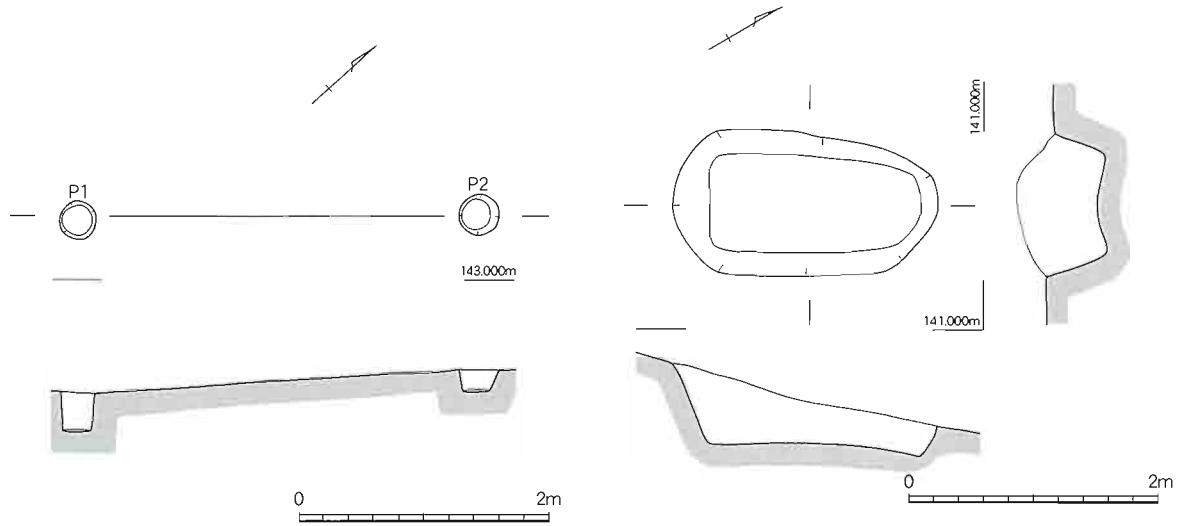
第36図 6号掘立柱建物実測図 (1/60)



第37図 7号堀立柱建物実測図（1/60）



第38図 8号堀立柱建物実測図（1/60）



第39図 1号柵列実測図 (1/60)

第40図 1号土坑実測図 (1/60)

7号掘立柱建物（第37図、図版21）

他の建物とはやや離れた調査区の東側中央で検出した1間×1間の建物で、主軸はN-67°-Wを測る南北方向である。その規模は心心距離で長軸が3.86m、短軸が3.56m、床面積は13.8m²である。柱穴の深さは11cm～22cmを測る。柱穴の中からは遺物は出土していない。

8号掘立柱建物（第38図）

6号掘立柱建物の南側で検出した1間×1間以上の建物と推定され、その規模は心心距離で長軸が4.4m、短軸が1.5m以上である。柱穴の深さは39cm～41cmを測る。柱穴の中からは遺物は出土していない。

1号柵列（第39図）

8号掘立柱建物の西側で検出した。調査段階では掘立柱建物として意識したが、対応する柱穴が無いことや建物の主軸とは異なることから、柵列と考えたい。その規模は心心距離で4.4mである。柱穴の深さは40cm前後を測る。柱穴の中からは遺物は出土していない。

1号土坑（第40図）

7号掘立柱建物の北側で検出した楕円形の土坑である。規模は長軸長1.07m、短軸長59cm、深さ12cmから32cmを測る。土坑内の壁面には炭や焼土がみられた。遺物は出土していない。埋土の様子から近世以降の所産であろう。

近世溝（第30図）

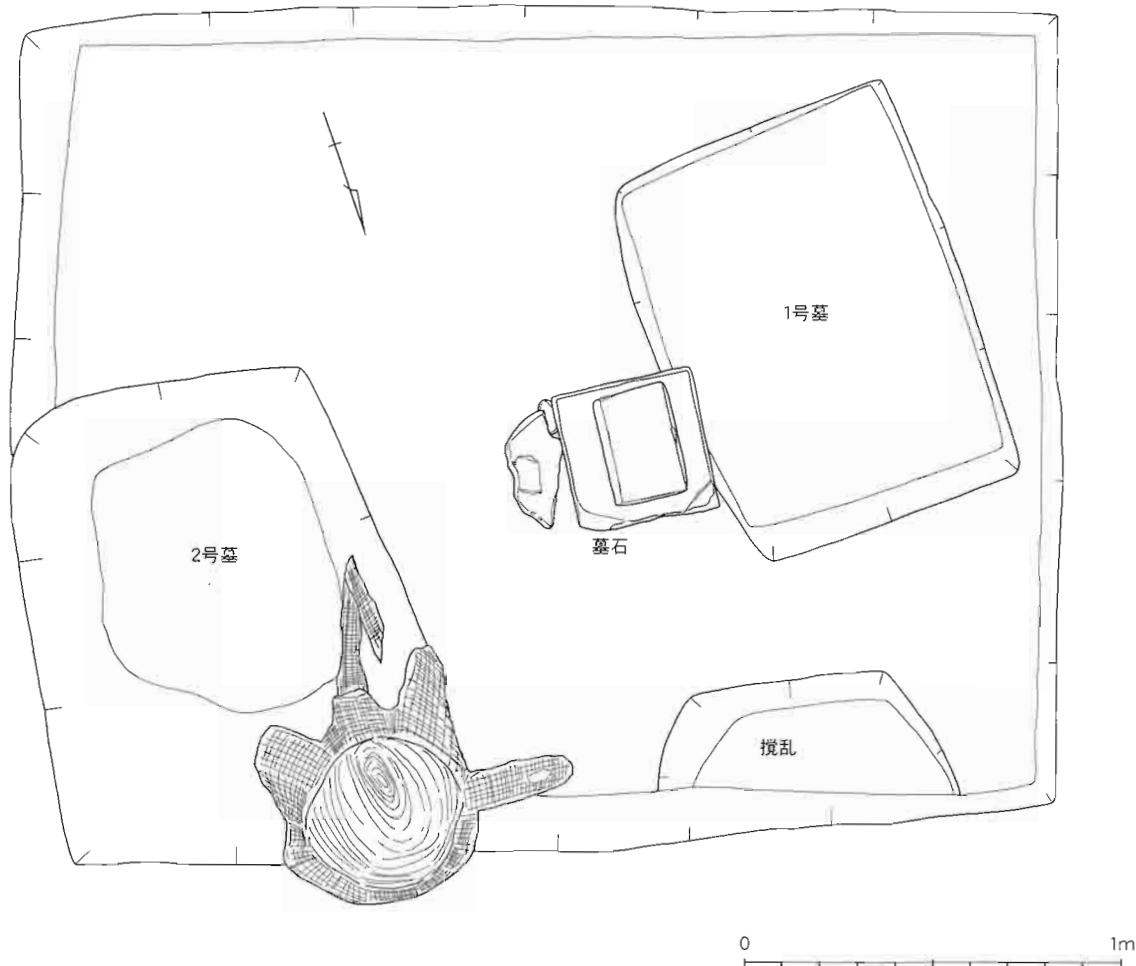
調査区を南北に走る溝である。検出での長さ約23.5m、最大幅3mを測る。この溝は隣接する1次調査地点でも確認されており、近世以降の道である。

近世墓（第41～44図、図版21～22）

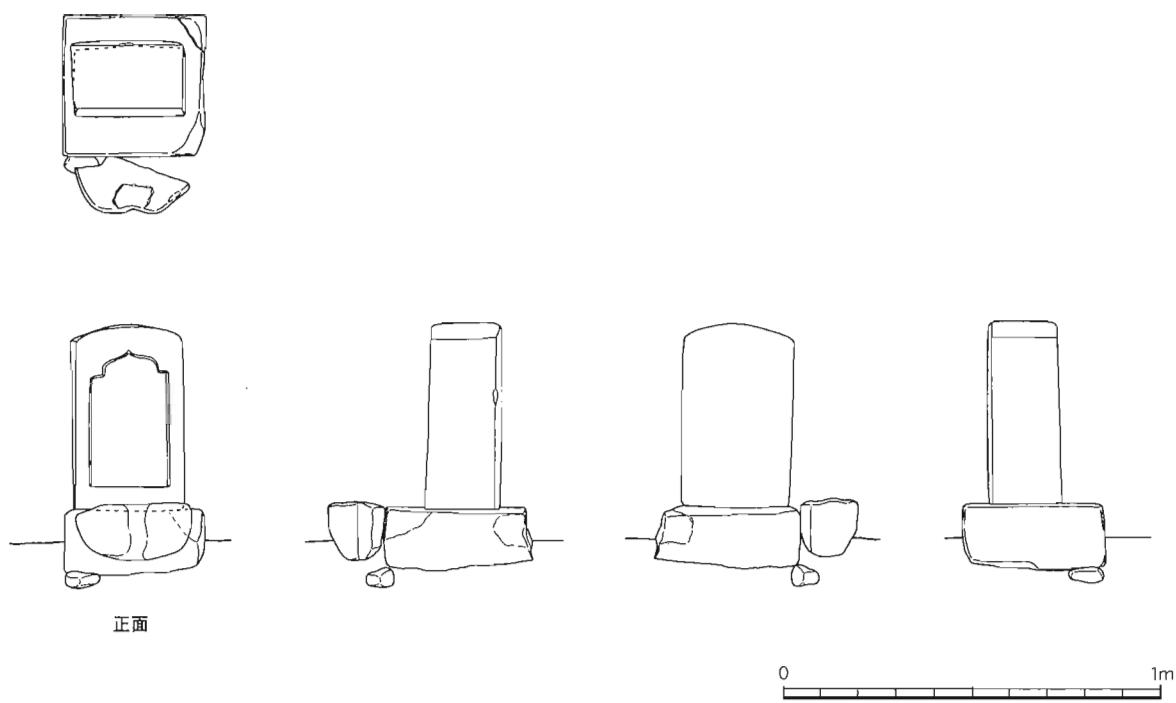
近世墓については、調査以前から墓石1基の存在が明らかとなっていたことから、調査区とは別に墓石を中心とした範囲にグリッドを設定し、調査を行った。当初は墓石1つに伴う墓壙1基と想定していたが、掘り下げの結果、墓壙2基と攪乱坑1基が検出された。攪乱坑については墓壙の可能性もあるが、他の墓壙と比較したときに深さが浅く、プランも不整形なことから、攪乱坑と判断した。墓壙の出土状況からみると、さらにその周辺にまで広がる可能性もあったが、時間的な制約からグリッドを拡張しての確認までにはいたらなかった。調査面積は約560m²である。

墓石（第42図、図版22、写真3・4）

墓石は西側を正面としている。本体1石、台石1体からなる。本体の高さ49cm、幅29cm、厚さ18cmを測る。台石は高さ17cm、幅37cmの方形をなす。本体正面の花燈形は一段彫りで、向かって右には「元禄八乙亥年」、中央には「积 淨口」、左には「〇〇二十日」と彫り込まれている。また、右側面にも文字が彫り込まれているが、判読不明。石材は本体、台石とも凝灰岩である。墓石の位置から、1号墓に伴うものと考えられる。



第41図 近世墓グリッド配置 (1/20)



第42図 墓石実測図 (1/20)

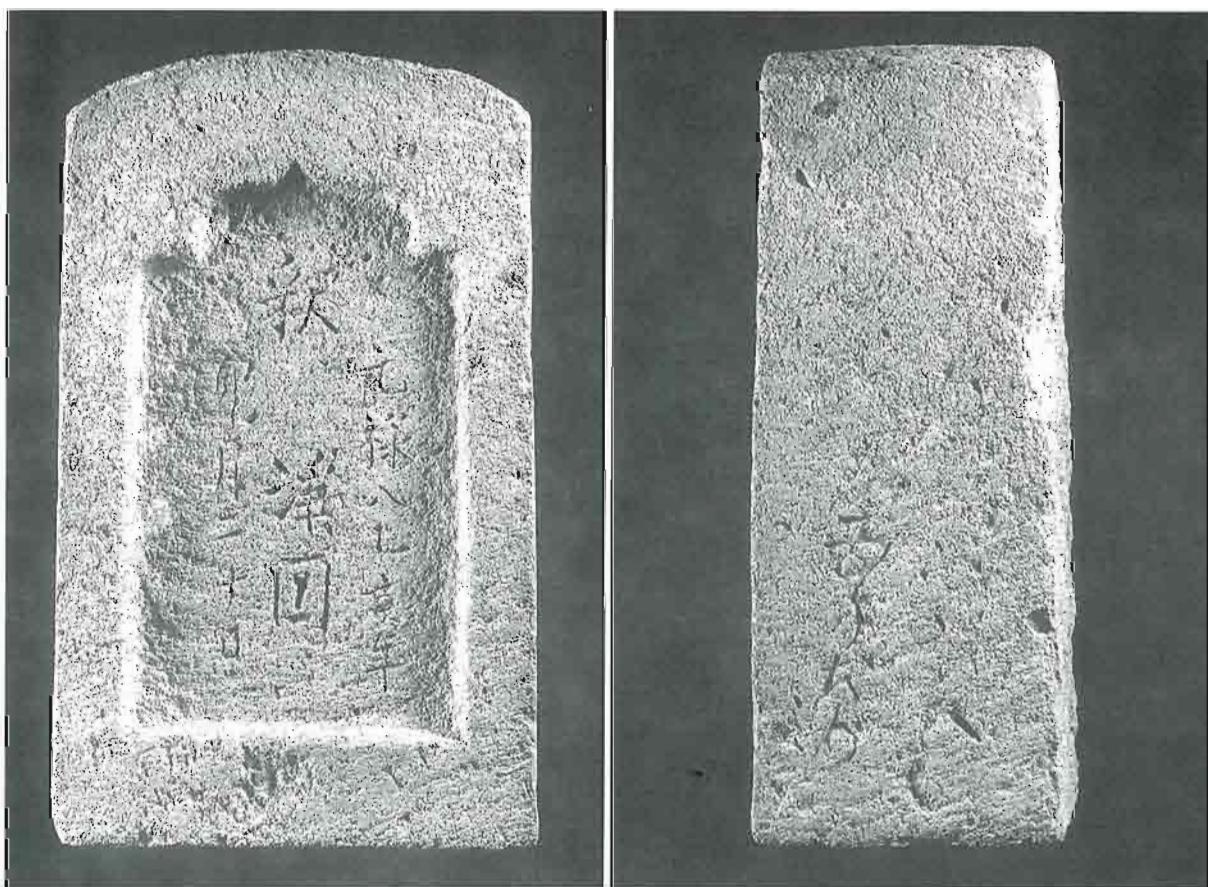


写真4 墓石正面

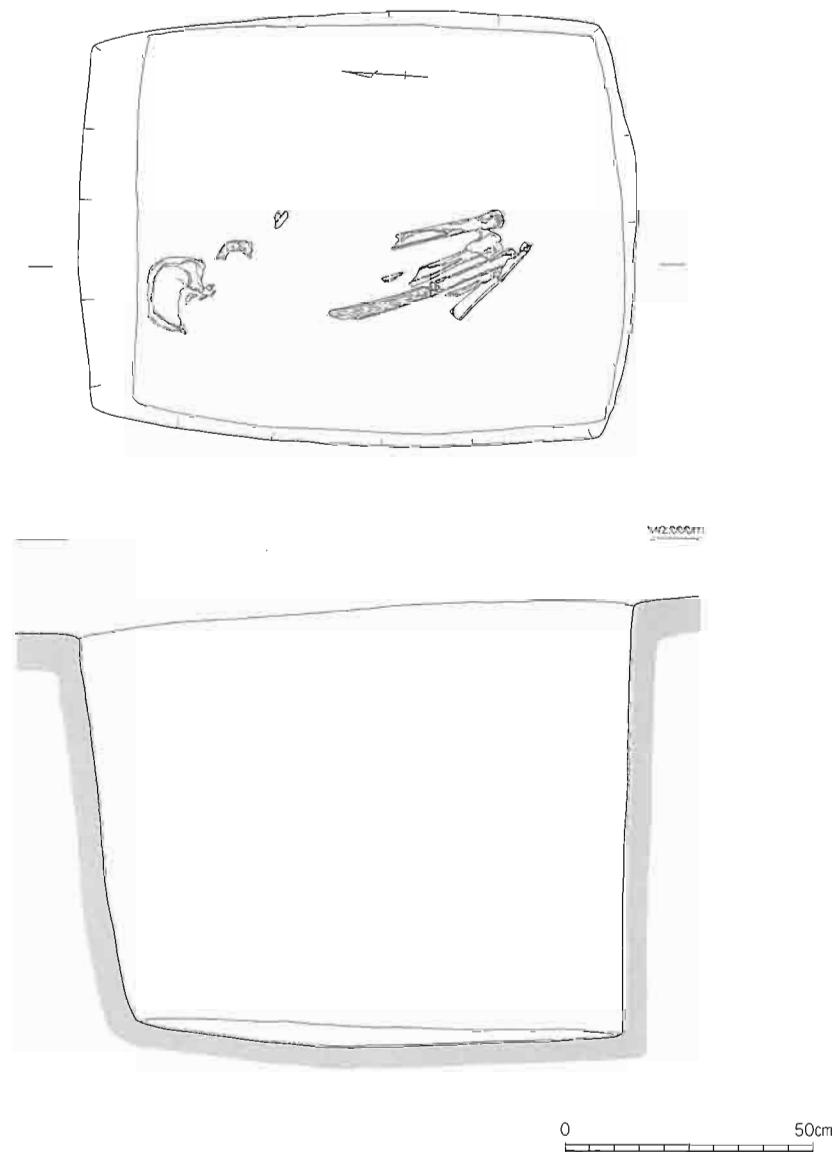
写真5 墓石右側面

1号墓（第43図、図版22）

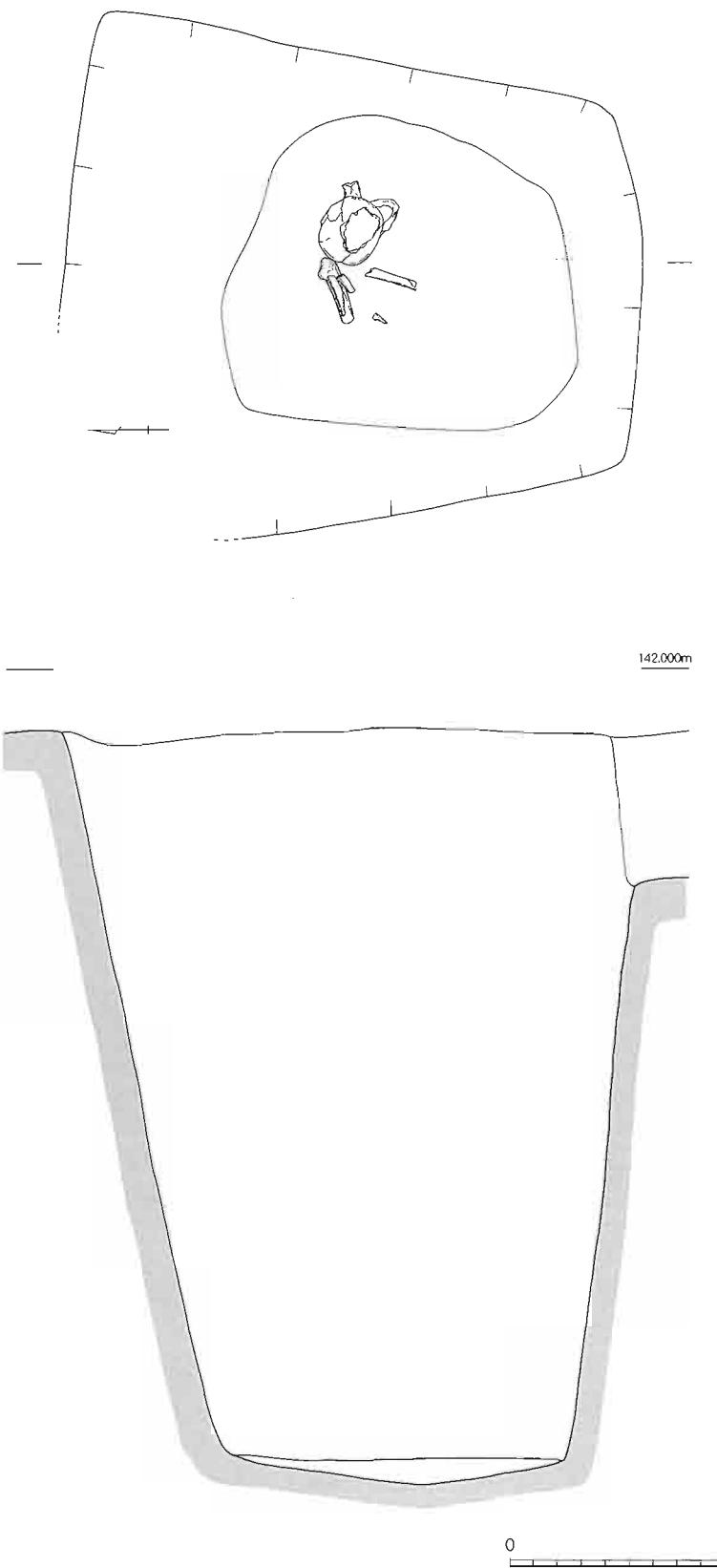
グリットの西側で検出した。墓壙は平面形が長方形で、長軸1m12cm、短軸86cm、深さ89cmを測る。墓壙の壁はほぼ垂直に掘られており、底は平坦に整えられている。墓壙内からは、人骨一体が出土した。頭蓋骨が墓壙北側に位置することから、頭位北向きの副葬である。副葬品は伴っておらず、また、鉄釘も出土していない状況からして、木製の棺桶が使用されたと推定される。

2号墓（第44図、図版22）

グリットの北東隅で検出した。墓壙は平面形が不整形をなしており、長軸1m20cm、短軸1m05cm、深さ1m58cmを測る。墓壙の壁は内傾し、底はほぼ平坦に整えられている。墓壙内からは、人骨一体が出土した。副葬品はなく、鉄釘も出土しておらず木製の棺桶が使用されたと推定される。



第43図 1号墓実測図 (1/15)



第44図 2号墓実測図 (1/15)

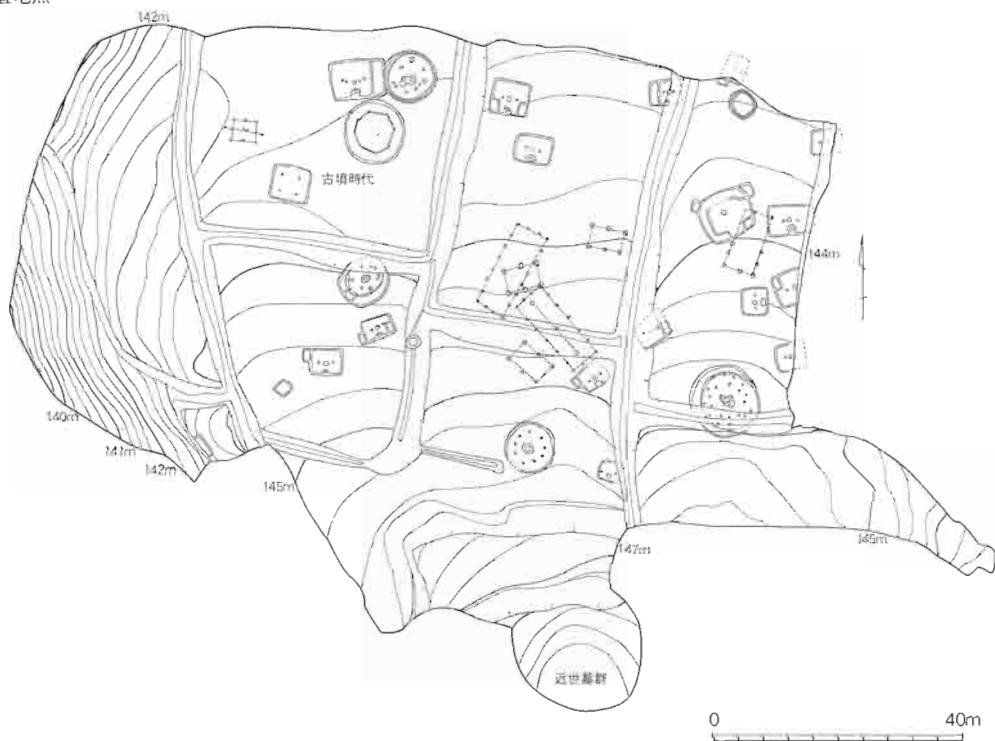
3. 小結

今回の調査について、以下簡単にまとめる。

まず、調査区の南側にまとまって発見された掘立柱建物群であるが、8号掘立柱建物を除けばすべて1間×1間の規模である。これらは2～4号掘立柱建物に切りあい関係が認められることから、少なくとも2ないし3時期の時間幅が存在することは間違いない。これら掘立柱建物群の柱穴や土坑内からは土器が出土していないため、年代ははっきりとしないが、埋土の様子や1間×1間という規模、さらには第45図にみるよう^跡に隣接した1次調査地点での弥生時代の遺構のあり方を考慮すれば、弥生時代の所産と考えてよさそうである。さらに丘陵頂部を中心に竪穴住居跡や建物群によって構成されている1次調査地点の遺構が、弥生時代中期後半から後期中頃とやはり時期幅をもって存在していることから、2次調査での掘立柱建物群もこの時期幅のなかで捉えられるものと考えられる。

こうした掘立柱建物群は、すべて標高141～143mの位置に集中して存在している。この場所より下位は急な斜面となり、削平を受けていると言え、遺構と思われるピットなどが見られないことから、関連する遺構は無いとみてよさそうである。6・8号掘立柱建物のように、柱穴が調査区外へとのびている状況からすると、さらに調査区の南側や東側へと展開すると予想できそうであるが、1次調査地点では連続しそうな掘立柱建物跡は確認されていない。削平が若いことも考えられるが、ほとんど遺構らしきものが発見されていないことからすれば、今回の掘立柱建物群は広がることはなく、集中的に存在

2次調査地点



第45図 1次調査の主要遺構配置図 (1/1200)

するものと推定される。

それではこれら掘立柱建物群の性格であるが、いくつかの想定ができる。まず、削平が著しいことから竪穴住居跡と考えた場合は、土坑を伴う掘立柱建物は存在するが、炉跡などは見られず、しかも、掘立柱建物群が広がると考えられる1次調査地点においても関連する遺構が見当たらないことから積極性に欠ける。次に、位置的には周辺を遠望できる場所にあることから、見張台的な施設とも考えられなくはないが、数が多く近接し合っている点は十分な説明に欠ける。こうしたことからこれら建物群は、弥生時代にみられる1間×1間の建物構造を有していることから、高床倉庫群として捉えておきたい。この点については、掘立柱建物群の詳細な時期とともに1次調査地点の整理、報告において検討が必要である。¹²⁾

次に近世墓であるが、今回の調査では2基が確認され、このうち1号には「元禄八年（1695年）」と刻まれた墓石が伴っている。やはり1次調査地点南側にも57基の近世墓がまとまって発見されているが、それらの中で最も古い年号が記されている墓石は「正徳四年（1714年）」である。この1次調査地点での近世墓のうち正徳四年の墓が最も古いとしたならば、今回の2基の墓はそれより一時期前の墓地と言えそうである。

ただし、近世墓については周辺での聞き取り調査などを十分に行っていないため、単に2次調査地点から1次調査地点への墓地の変遷と断言するには乏しく、弥生期の掘立柱建物群と同様に1次調査地点の今後の整理、報告の中で十分なる検討が必要であろう。

註1) 行時志郎 「祇園原遺跡」『平成8年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年

註2) 1次調査地点には、第45図に示す建物以外にも1間×1間の掘立柱建物も多く存在することである。調査担当者である行時氏より、ご教示いただいた。

註3) 調査担当者である行時氏より、ご教示いただいた。

祇園原遺跡掘立柱建物跡一覧表

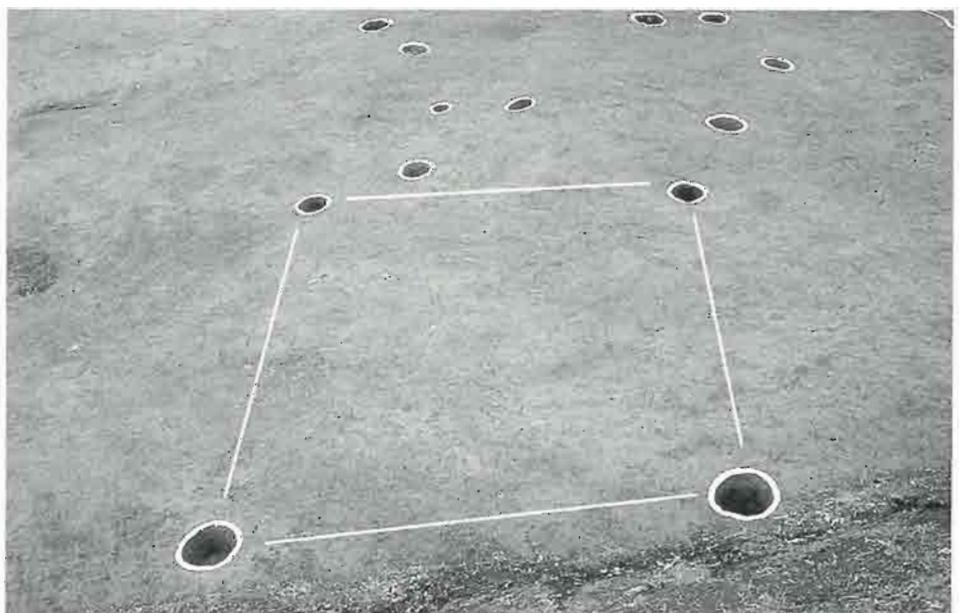
遺構番号	規模	長軸長(cm)	短軸長(cm)	床面積(m ²)	方位角	備考
1号	1間×1間	426	350	14.4	N-57°-W	
2号	1間×1間	324	314	9.6	N-70°-W	
3号	1間×1間	424	304	(12.8)	N-57°-W	
4号	1間×1間	292	248	(7.2)	N-43°-W	
5号	1間×1間	280	232	6.2	N-85°-W	
6号	1間×1間	292	250	(7.3)	N-4°-W	中央に土坑を伴う。
7号	1間×1間	386	356	13.8	N-67°-W	
8号	1間×1間?	440	150以上	?	?	



調査区全景（南から）

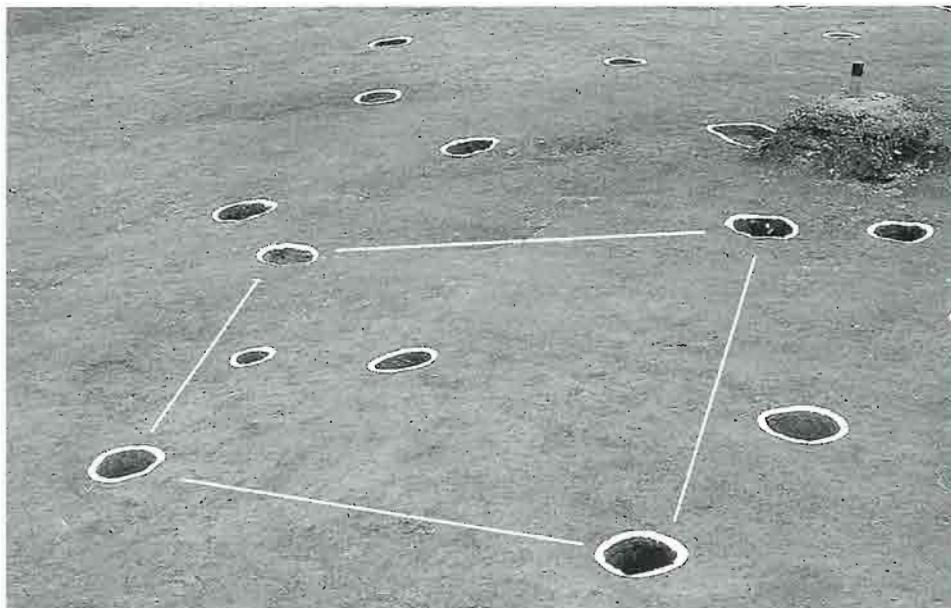


調査区全景（北から）



1号建物（南西から）

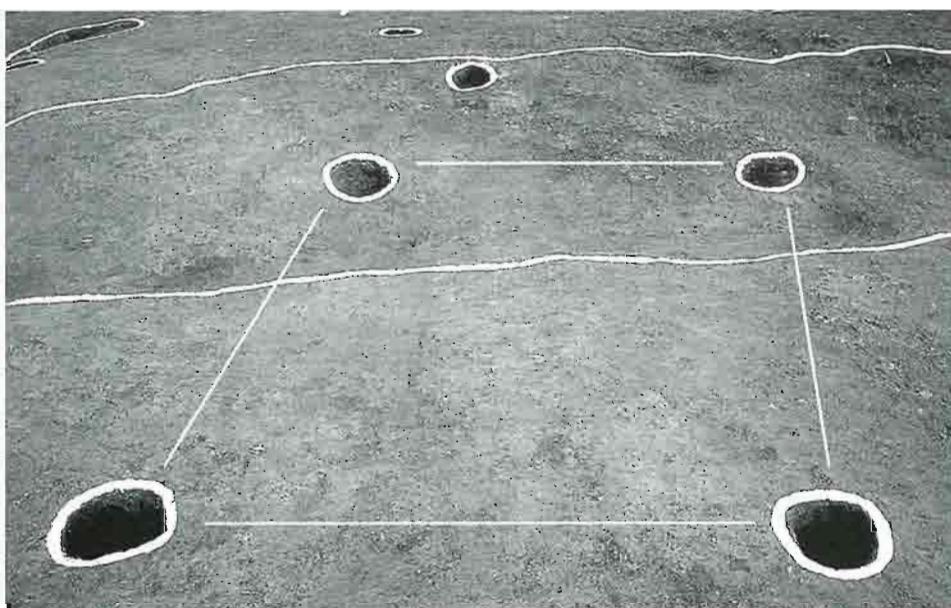
図版 20



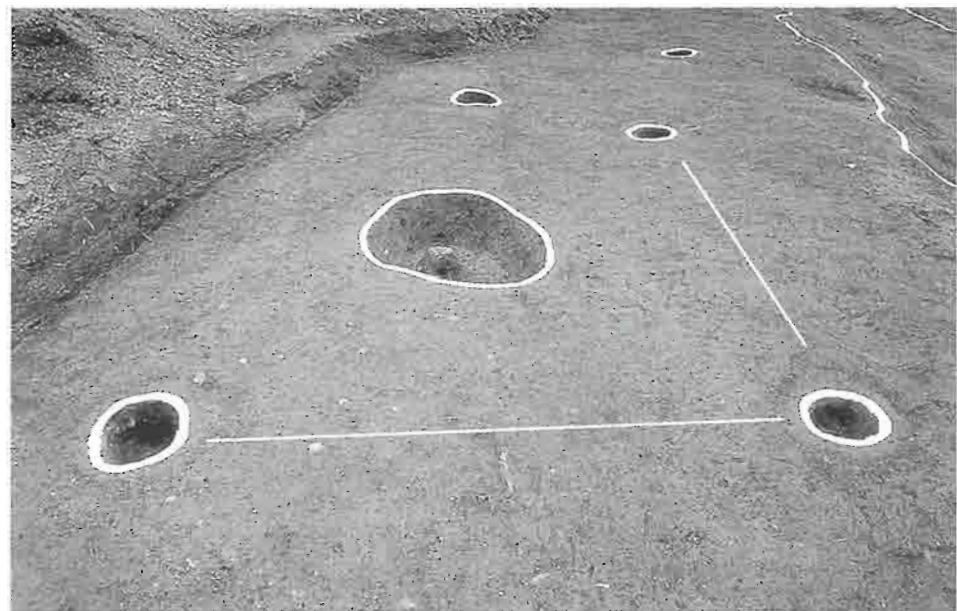
2・3号建物（南西から）



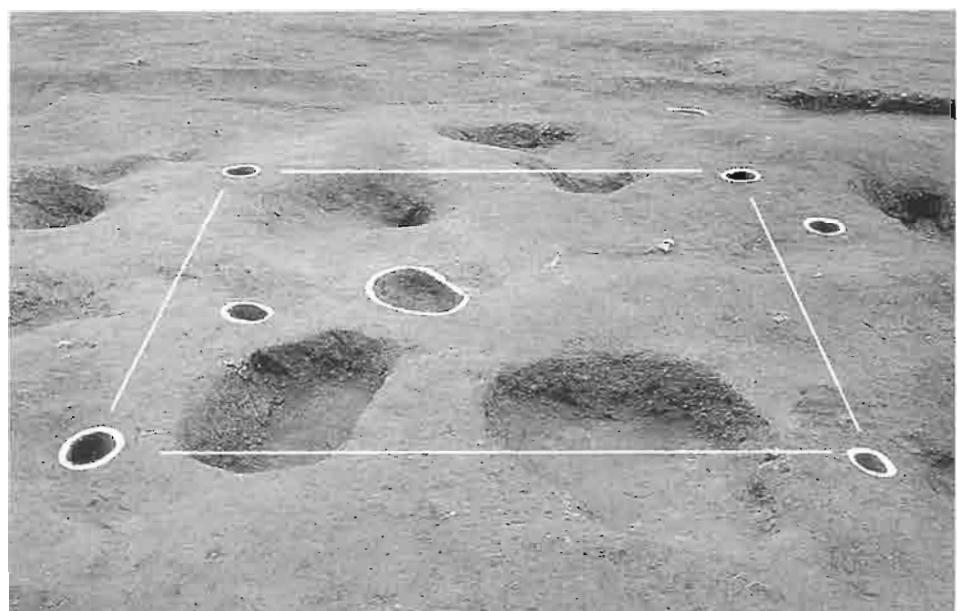
4号建物（北東から）



5号建物（西から）



6号建物（北から）



7号建物（東から）



近世墓全景（東から）

图版 22



1号近世墓



2号近世墓

第6章 長迫遺跡C地点



1. 遺跡の概要（第46～50図）

遺跡は求来里川によって形成された低位沖積地右岸の西側に開いた谷部の小支谷に位置している。遺跡のすぐ東は長迫遺跡A・B地点、南側はD地点と接し、周辺には塔ノ本古墳、尾漕古墳などが存在する。

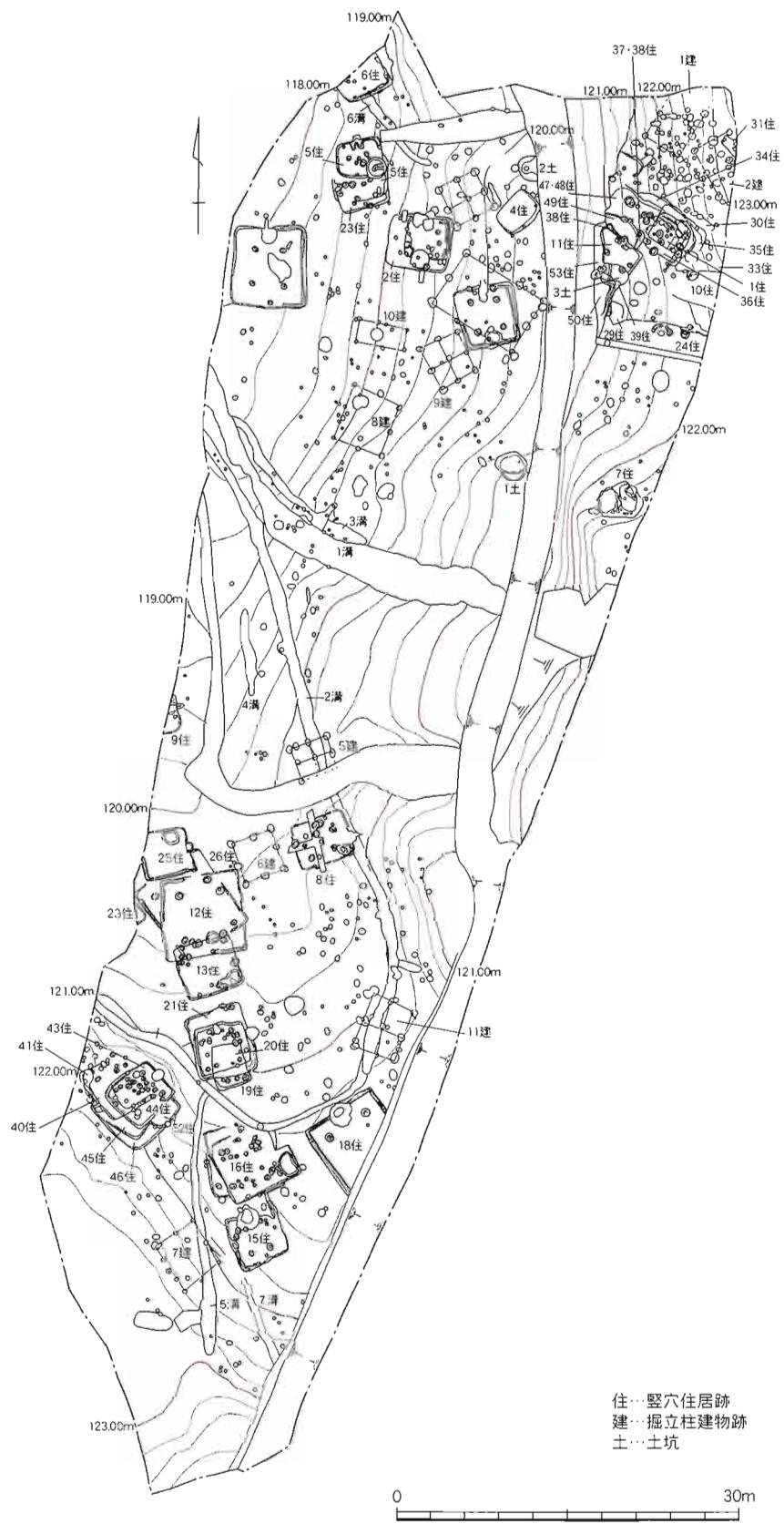
調査は平成8・9年度に実施された長迫遺跡A・B地点に隣接していることから、遺跡の広がりと遺構の密度は調査前からある程度考えられていた。調査では古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての堅穴住居跡が54軒確認されたほか、掘立柱建物11棟、土坑2基、溝6条などが検出された。出土遺物は、堅穴住居跡に伴う土師器・須恵器・紡錘車などを中心に打製石器、磨製石器、輸入陶磁器、石鍋、五輪塔などが出土している。

調査の結果、集落は中央の鞍部を境として南北に集落が営まれているが、北側では北斜面に営まれているのに対し、南側では傾斜が緩やかになっている谷部の中央に立地しているという点で異なりを見ることができる。集落内の堅穴住居はA地点でみられたような大型住居ではなく、一辺4～6mほどの住居がまとまりをみせている。また、南側の谷では集落内を小単位で区画するように溝が確認されたが、傾斜に沿って巡っていることから排水利用していたものと思われる。住居内のカマドの付設箇所は古墳時代の堅穴住居跡では北側に集中しているが、奈良時代の堅穴住居跡では東あるいは北東側に位置するようである。さらに掘立柱建物跡は内3棟（2間×2間）が総柱の構造を有しており、略南北方向に構築されている。

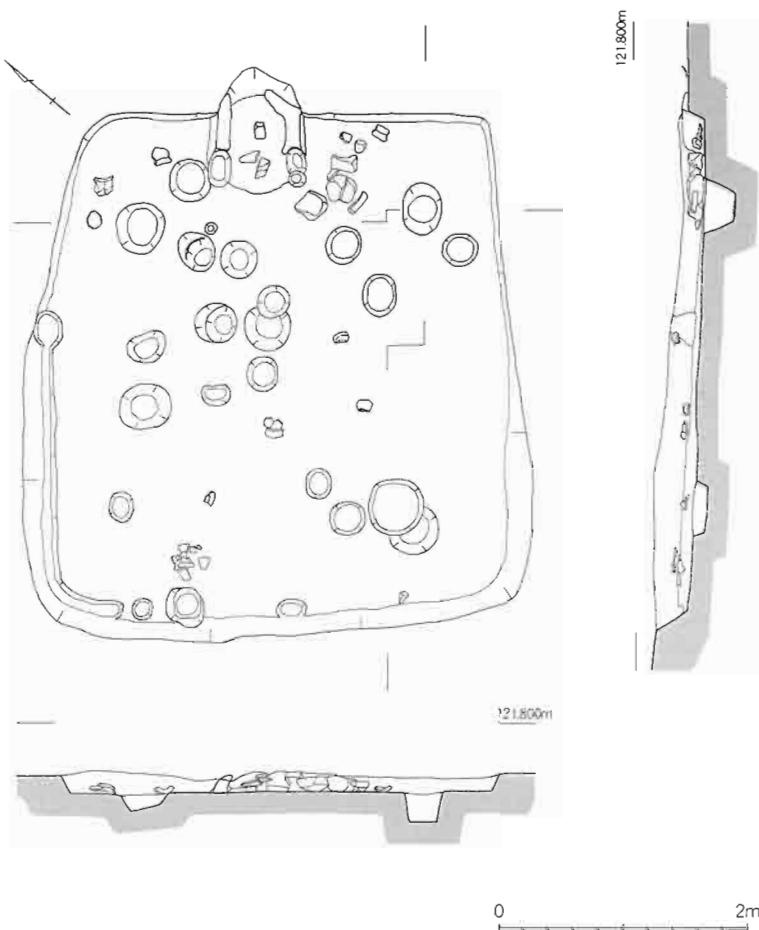
今回の調査内容を含め、長迫遺跡A・B・D地点およびC地点で確認された遺構は一連の集落跡と考えることができ、古墳時代後期にかぎっては大規模な集落（現在約100軒が確認されている）が営まれていたことがわかつてきた。近年、この周辺では調査が多数行われており、本遺跡の性格を理解する上で、周辺遺跡の成果も踏まえて今後検討していきたい。



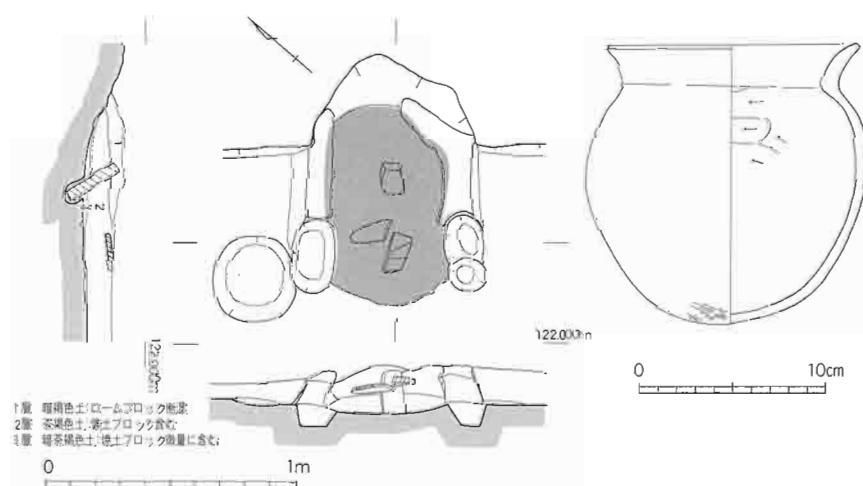
写真6 長迫遺跡C地点全景（真上より）



第46図 遺構配置図 (1/400)



第47図 44号竪穴住居跡実測図 (1/60)

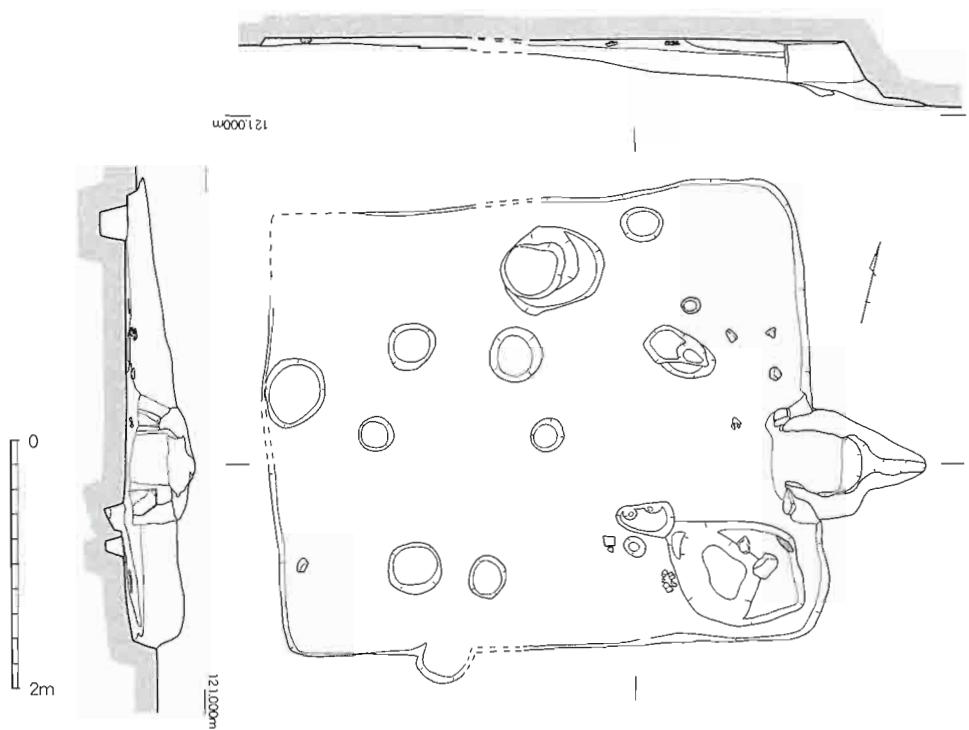


第48図 44号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

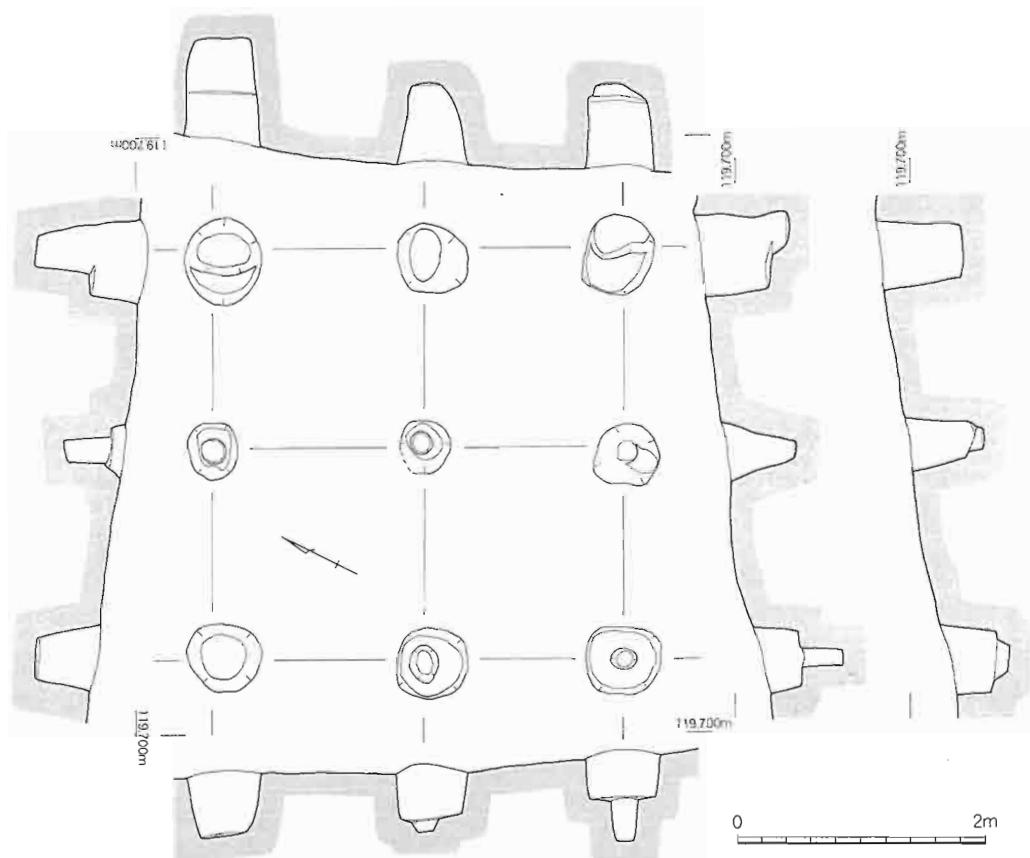
〃 出土土器実測図 (1/4)



写真7 44号竪穴住居跡カマド



第49図 8号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第50図 3号掘立柱建物実測図 (1/60)



調査区北側

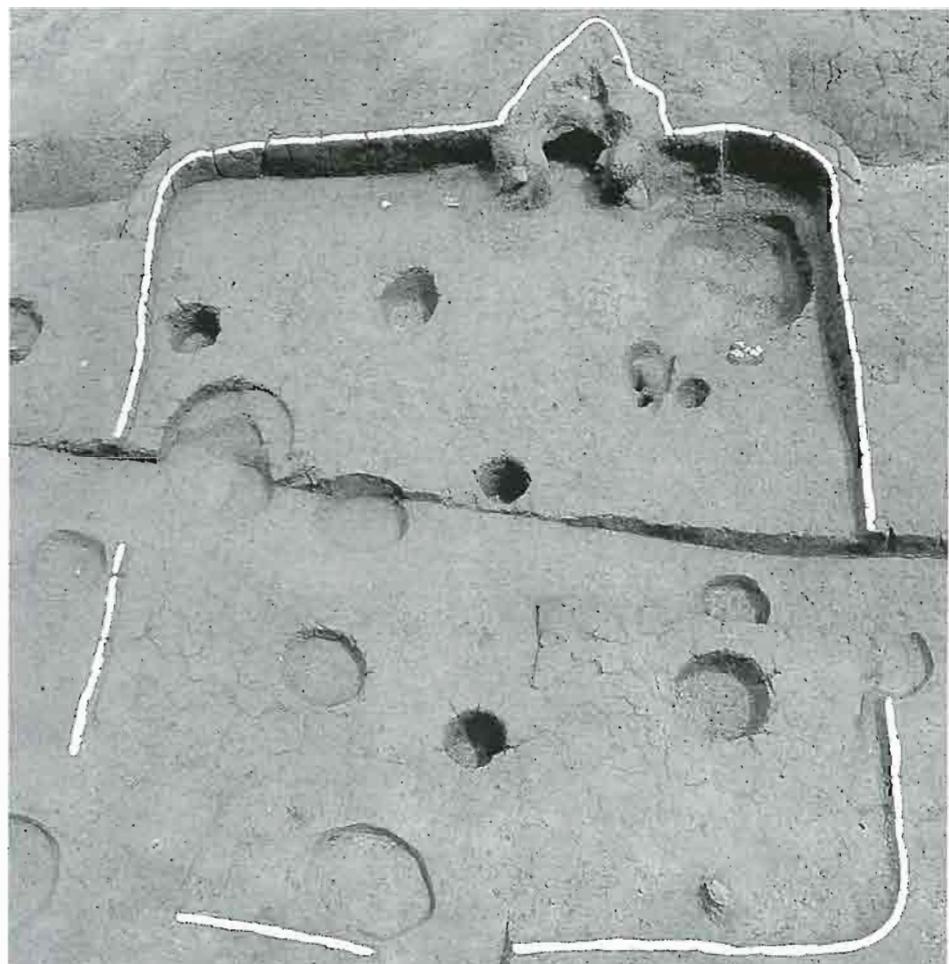


調査区南側

図版 24



44号竖穴住居跡
(南西から)



8号竖穴住居跡
(西から)



3号掘立柱建物
(西から)

第7章 長迫遺跡D地点



1. 遺跡の概要（第51図）

遺跡は、通称小原と呼ばれる丘陵から、西側に向かって幾筋にも派生する尾根に挟まれた小さな谷地形の最高所に立地している。

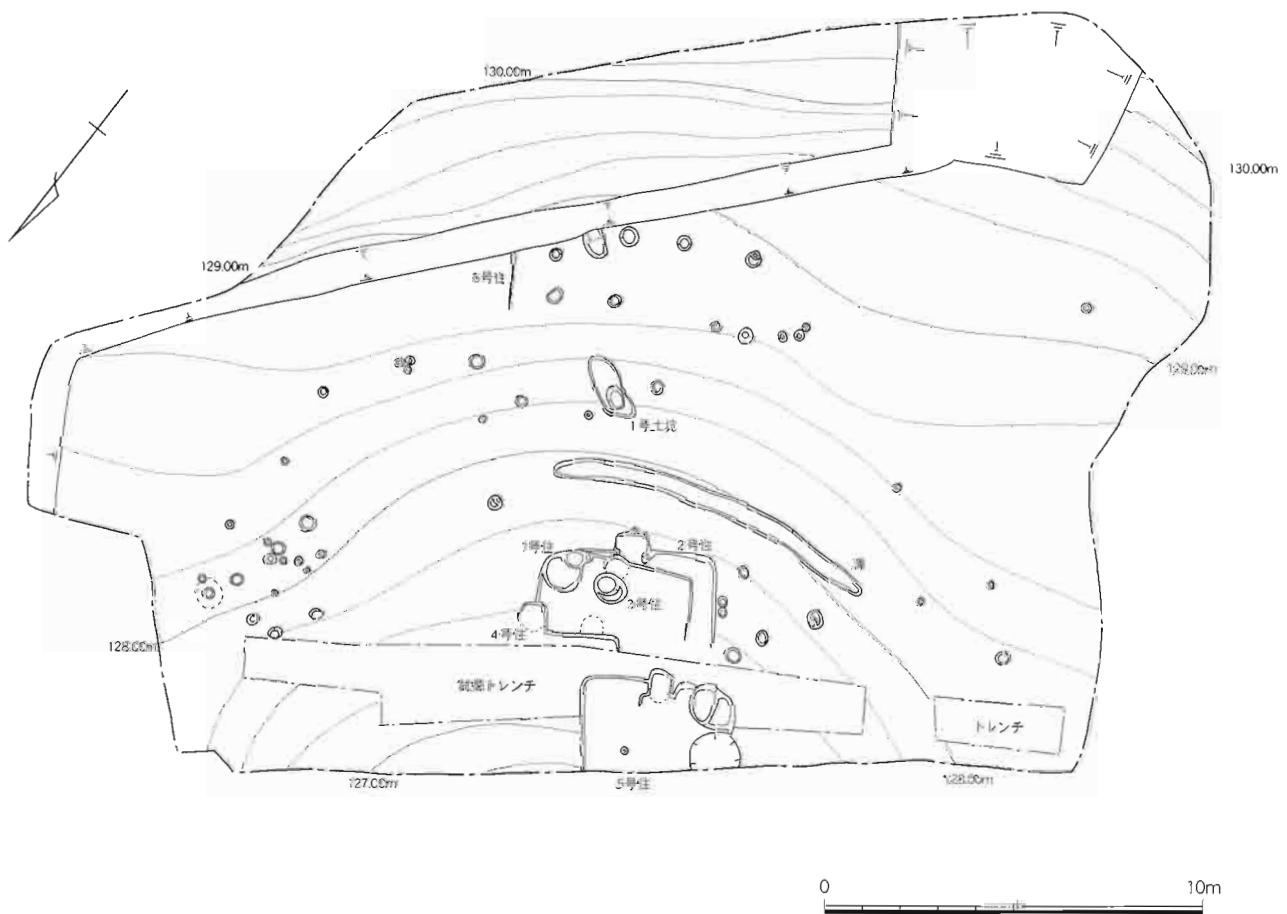
この谷を見下ろす東側の尾根上鞍部には、古墳時代中期に築造された尾漕2号墳が、また尾根を一つ隔てた北側の谷部には古墳・奈良時代の多数の堅穴住居跡が発見された長迫A～B地点が存在する。

調査は、事前に行った試掘調査の結果を踏まえ、遺跡を囲むように急傾斜地となっている斜面の落際までを調査対象地として設定し、平成9年9月19日より機械による表土剥ぎ作業を開始した。

調査区は調査前は杉林で、さらにそれ以前は畑として利用されていたこともあり、遺構は斜面に近い場所ほど削平を受け、谷部中央の窪んだ位置で集中的に見受けられた。

調査区内で確認された遺構は、堅穴住居跡6軒、土坑1基、溝1条、柱穴などがある。また、調査区南側では、地下水などの影響により生じた自然の崩落穴がみられた。

発掘調査はその後、平成9年12月15日まで行い、出土遺物の整理作業は平成9年12月9日から平成10年1月30日まで実施した。



第51図 遺構配置図 (1/200)

2. 遺構と遺物

1号竪穴住居跡(第52・53図、図版25)

調査区のほぼ中央で検出され、2・3号住居跡を切り、4号住居跡に切られる。住居跡の一辺は、北側半分はすでに失われており不明であるが、東西方向では約4.0mを測る。

カマドは南側壁面中央に付設されており、東側の一部がわずかに残っていたが、西側は全く残っておらず、大部分は住居跡の建替の際に壊されたものと推測される。焚口付近の床面は赤く焼成し、硬化していた。

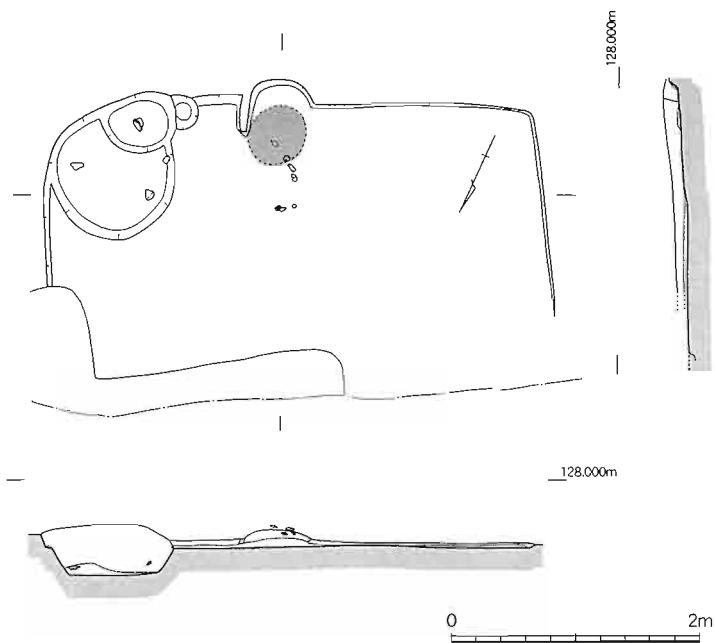
この他、住居東側コーナーには、直径約1.0m、深さ約20cmを測る屋内土坑が付設されていた。また、この住居跡の中からは主柱穴や周溝は検出されなかった。

1号竪穴住居跡出土遺物(第59図1～12、図版29)

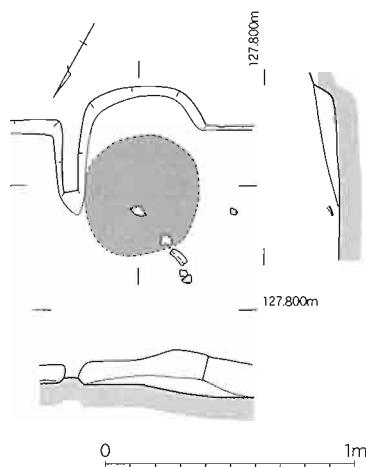
1は屋内付設土坑内より出土した須恵器杯身である。底部は回転ヘラ切りで粘土紐のつなぎ目が残る。底端部付近はやや斜め方向に緩やかに屈曲し、口縁部へ向かってわずかに外反する。2は住居跡北側埋土中から出土した。須恵器杯身の小破片で底端部付近のみ残る。3はカマド焚口付近より出土した高台付須恵器杯身である。高台は底端部より少し離して接着している。底端部は明瞭な稜を持ち、そこから口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がる。端部付近はわずかに外反する。4は屋内付設土坑内より出土した。分厚い底部で屈曲部付近に斜めに高台を接合する。口縁部は欠損している。この土器の内面には赤色顔料が付着していた。5は付設土坑内より出土した須恵器高杯脚部片である。端部は鳥嘴状を呈している。6は土師器皿である。体部から口縁部にかけて屈曲し、そこからほぼ垂直方向に内湾気味に立ち上がる。7はカマド内より出土した製塩土器片で、3つの破片に分かれるが同一個体である。底部がレンズ状となり、口縁端部は内湾する長胴タイプとなろう。外面は指頭圧痕が顕著に見られ、内面は布目痕が残る。8～11は土師器甕口縁部片である。9は屋内土坑より出土し、それ以外はいずれもカマド内または焚口付近より出土した。12は屋内土坑より出土した刀子である。先端部を欠損し、残存長9.9cmを測る。

2号竪穴住居跡(第54・55図、図版25・26)

調査区のほぼ中央で検出され、1号住居跡にカマドと西側の一部を除く大部分が切られる。住居跡の



第52図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第53図 1号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

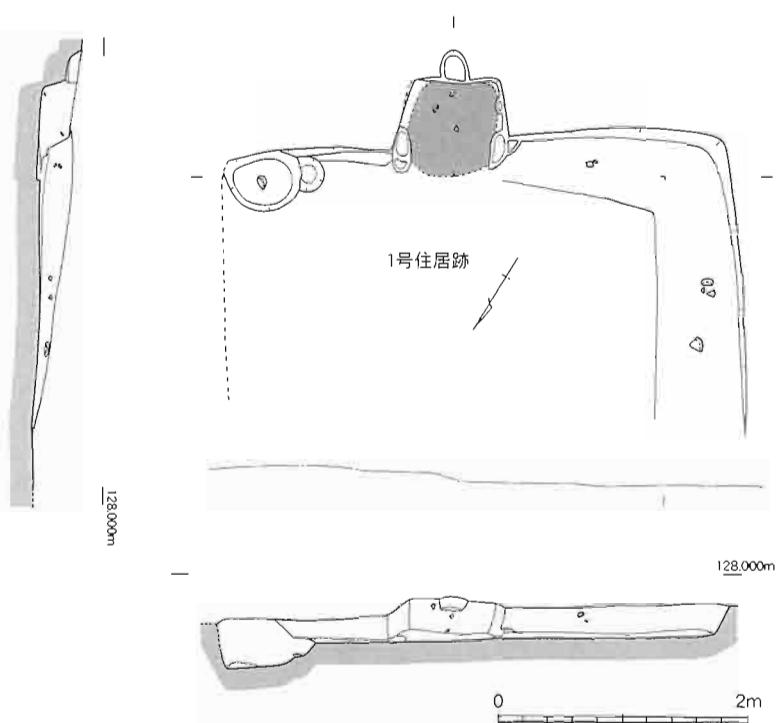
東側には、1号住居跡付設土坑の下からそれに切られた小型の土坑が検出されており、これが2号住居跡の屋内土坑になると推測されことから、住居跡のコーナーにあたると想定できる。この土坑の端から西側コーナーまでの長さは約4.1mを測る。

カマドは1号住居跡同様南側壁面中央に付設されている。焚口部分から住居跡の外に張り出す形で造り付けられており、両袖の内側に袖石の抜き取り痕が確認された。また、カマドの埋土をみると、天井部の崩落壁がかなり上層で確認されることから住居廃棄の後、しばらくたってから崩れたことがわかる。カマド袖の幅は約90cm、カマド奥壁の幅は約70cm、袖から奥壁までの長さは約60cm、深さは約25cmを測る。奥壁中央には、半円形に掘り込まれた長さ約25cm、幅約20cm、深さ約15cmの煙道部が残っていた。

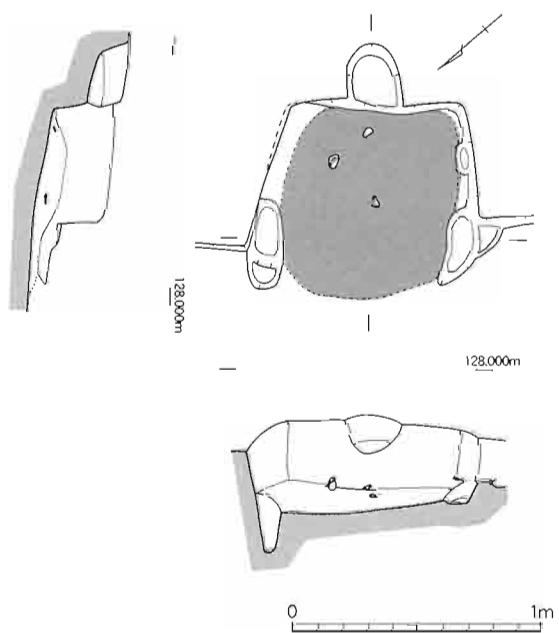
また、この住居跡の中からは主柱穴や周溝は検出されなかった。

2号竪穴住居跡出土遺物(第59図13~18、図版29)

13はカマド内より出土した須恵器杯身であり、底部を欠損している。体部はラッパ状に大きく開き、口縁端部はわずかに外反気味に延びる。14はカマドより西側壁面沿いより出土した口縁部の小破片である。端部にかけては直線的に延びる。15はカマド内より出土した。口縁部を欠損する。底部は分厚く仕上げ、底端部から体部にかけては、斜め方向に外反気味に立ち上がる。16はカマド内より出土した須恵器甕頸部である。胴部は大きく開く。外面は刷毛目やタタキが顕著に残る。17は住居跡西側で出土した土師器皿である。底部はほぼ平坦となり、底端部から口縁部にかけてはやや内湾気味に延びる。18も17のすぐ傍から出土した。底端部から口縁部に向かってやや外反気味に開く。



第54図 2号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第55図 2号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

3号竪穴住居跡（第56図、図版26）

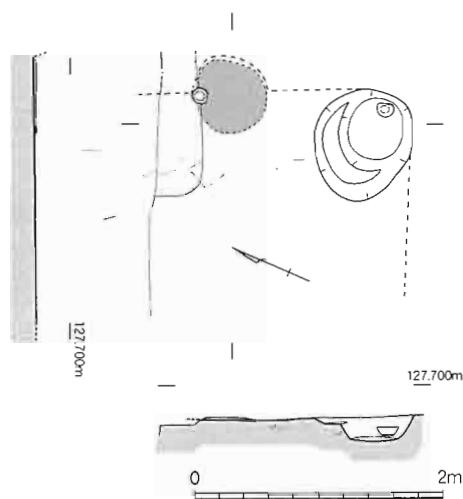
調査区のほぼ中央で検出され、1・4号住居跡に切られる。1号住居跡の下からカマド焚口部分の焼成面が検出されたが、住居跡の明確な平面プランは確認できなかった。このため調査時点では、他の住居跡と同様にこの住居跡のカマドは南方向に向けて造られていたと想定していたが、1号竪穴住居跡のカマドの下から検出された土坑が、1・2号住居跡同様に住居の屋内土坑の用途として考えられること、位置的にも1・2号住居屋内土坑とカマドとの距離が3号のそれがほぼ等距離であること、さらに3号のカマド焼成面のほぼ中央と土坑の東側先端を結んだ住居の復元推定線が1・2号住居跡のカマドを主軸とする中心軸からほぼ直交することなどから、この土坑を3号住居跡の屋内土坑と判断した。

のことから3号住居跡はこの調査区の中では唯一東方向にカマドを設けていたことになる。

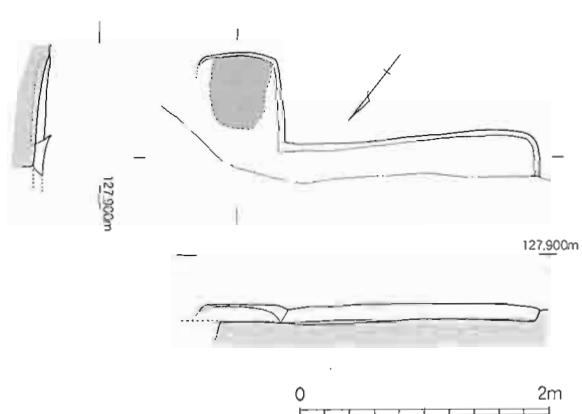
この屋内付設土坑の規模は長軸約1m、短軸約80cm、深さ約20cmを測る。床面直上からはほぼ完形の須恵器杯身が口縁部を上向きにして出土したが、この土器の底の方には1cm程度の厚さで赤色顔料が充填されていた。この赤色顔料は整理作業中に失われた。

3号竪穴住居跡出土遺物（第59図19、図版30）

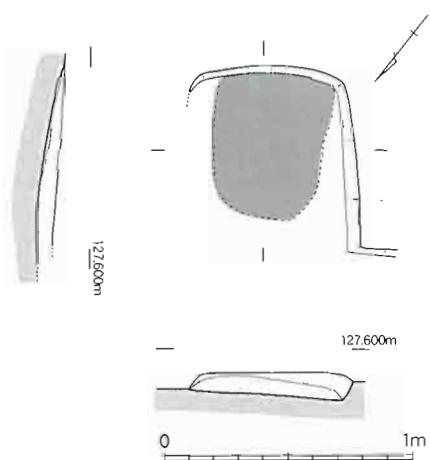
19はその屋内付設土坑から出土した須恵器杯身である。底部はレンズ状となり、底端部から口縁部にかけてはやや内湾気味に長く延びる。粘土紐の輪積痕がナデ消しされずに外面に残っている。



3号竪穴住居跡実測図（1/60）



第57図 4号竪穴住居跡実測図（1/60）



第58図 4号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

4号竪穴住居跡（第56・57図、図版27）

調査区中央よりやや北側で検出され、1・3号住居跡を切る。遺構の残りが浅く、また試掘時のトレチのため、カマドと南側壁面近くのプランがわずかに確認されたにすぎない。カマドの中央から西側コーナーまでの長さ約2.2mを測る。

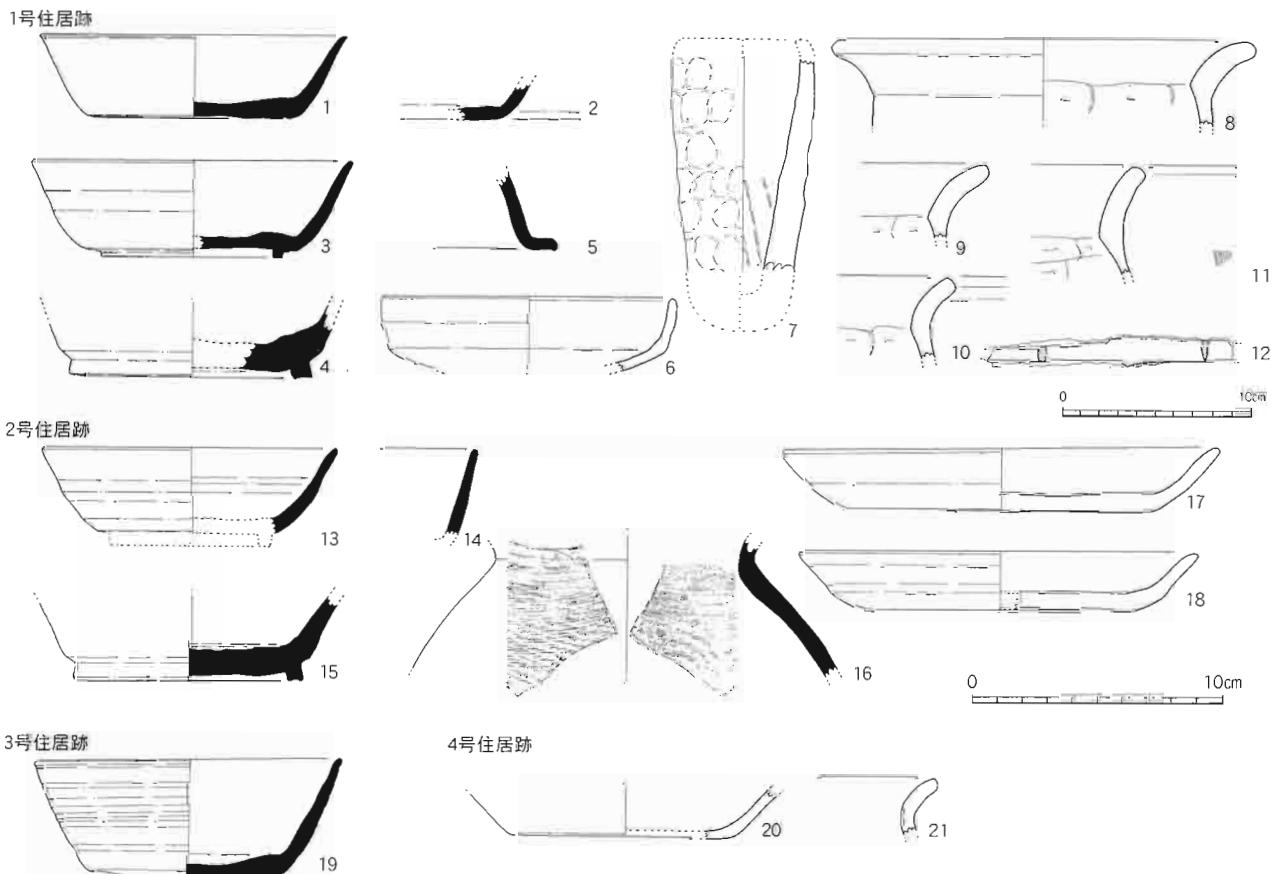
カマドは2号住居跡と同様、袖部分から外に張り出す形となっているが、袖の東側のプランは不明である。またカマド袖石の痕跡は確認されなかった。袖から奥壁までの長さは約70cm、深さ約15cmを測る。

4号竪穴住居跡出土遺物（第59図20・21、図版30）

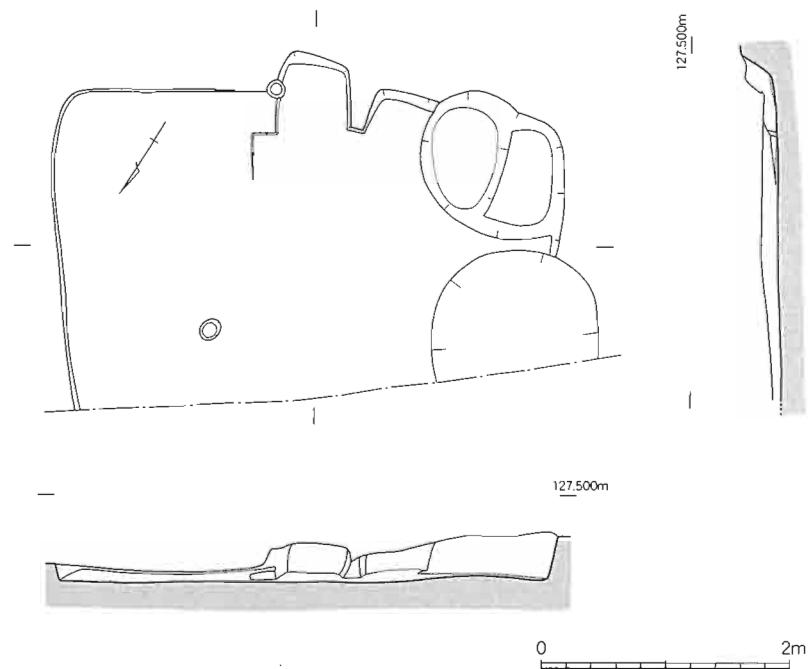
20はカマド内より出土した土師器杯の小破片である。底端部から口縁部にかけてやや外反しながら開く。21は土師器甕の口縁部である。頸部から口縁端部にかけて「く」の字に外反する。

5号竪穴住居跡（第60・61図、図版27・28）

調査区の北側で検出された。住居跡の規模は、北側が調査区外へ続いており、主軸方向は不明であるが、東西方向では約4.1mを測る。住居跡北側で浅い柱穴が1基検出されたが主柱穴とは考え難い。住居跡西側コーナーには屋内付設土坑が確認された。この土坑とほぼ同じ位置とさらにこの土坑の北側に落ち込みが確認されたが、これらは深さが深く、1.5m以上下げても地山が検出されないことから、自然の崩落穴と考えられる。残った屋内付設土坑の規模は長さ約1.0m、深さ約50cmを測る。



第59図 1～4号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)



第60図 5号竖穴住居跡実測図 (1/60)

カマドは、東側袖部分を一段低く掘り込み、その上に袖を造り付けたと推測され、また西側袖部分は地山を削り出しで造り付けていた。1号住居跡と2号住居跡の折衷的な造りである。

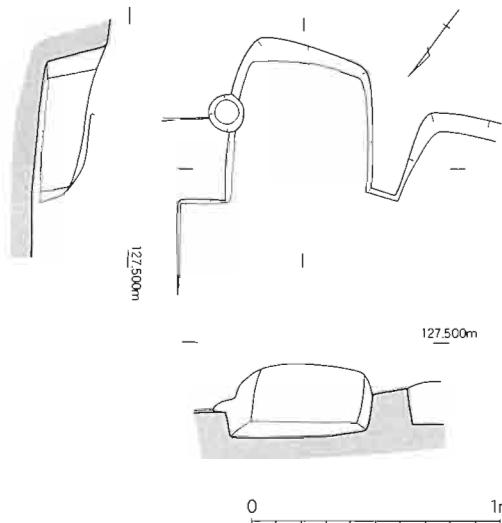
カマド袖間の幅は約50cm、袖から奥壁までの長さは約60cm、奥壁の幅は約50cm、深さ約20cmを測る。

5号竖穴住居跡出土遺物（第62図、図版30）

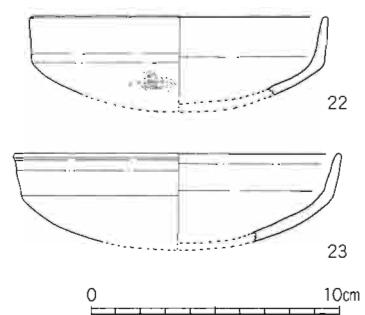
22は住居跡埋土内より出土した土師器皿である。丸みを帯びた体部から口縁部にかけては一端屈曲し、そこから端部まではほぼ直口する。外面刷毛目調整痕が残る。23は屋内付設土坑より出土した土師器皿である。22と同様丸みを帯びた体部より口縁部にかけて一端屈曲し、そこからやや開き気味に直口する。外面はわずかに手持ちヘラ削り痕が残る。

6号竖穴住居跡（第63図、図版28）

調査区の南側で検出された。住居跡の張床はカマドより東側は残っていたが、西側及び南側壁面部分は削平されていた。このため、住居跡の規模は不明である。カマド中央より東側壁面までの距離は約2.1mを測る。住居跡の中には3



第61図 5号竖穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第62図 5号竖穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

個の柱穴が検出されたが、浅くこれが主柱穴となるかどうかは不明である。

カマドは南側壁面沿いに付設されており、2号住居跡と同様、壁面より外へ張り出すタイプである。カマドは、床面より約10cmほど掘り込まれて造られ、焼成面は張り出した位置で確認された。

6号竪穴住居跡出土遺物（第64図）

24は埋土中より出土した土師器皿である。体部は丸みを帯び、口縁部にかけては一端屈曲し、そこからやや開き気味に真っ直ぐ延びる。25は、カマド内より出土した土師器甕である。頸部から口縁部にかけて「く」の字に大きく外反する。

1号土坑（第65図、図版28）

調査区中央で検出された不定形の土坑である。主軸を南北方向にとり、長軸約1.9m、短軸約80cm、深さ約10cmを測る。中央には柱穴状の落ち込みが見られた。この土坑の中からは、土師器の小破片が出土している。

柱穴出土遺物（第66図、図版30）

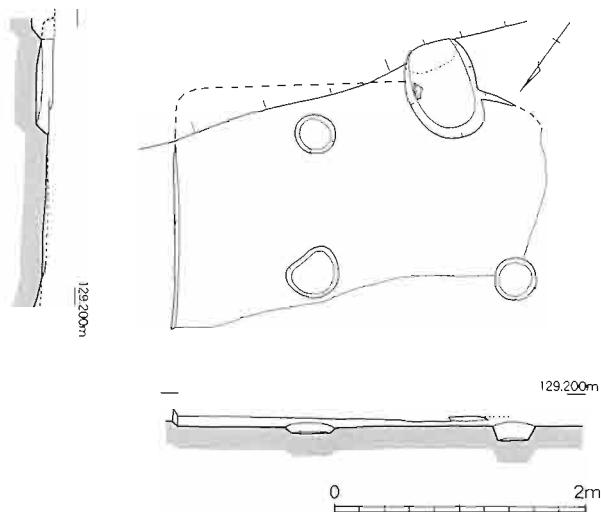
柱穴は、谷の中心部と調査区東側におもに集中して検出された。東側柱穴群の中にも1カ所硬くしまった焼成面が存在したが、これが住居跡のカマドであった可能性もある。この焼成面の近くの柱穴から鉄器が1点出土した。

26は用途不明鉄器で、逆「U」字形を呈し、先端部を欠損している。残存長約8.4cm、幅約4.8cm、厚さ約9mmを測る。

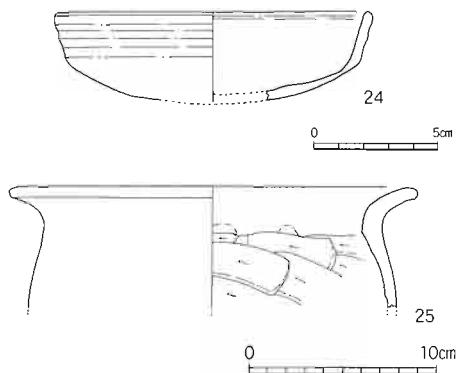
溝状遺構（第67図）

2号住居跡の約2m南側から西側に弧状に延びる。確認面での長さは約8.7m、幅約60cm、深さは10~20cmを測る。溝の埋土の中からは土師器の小破片が数点出土している。

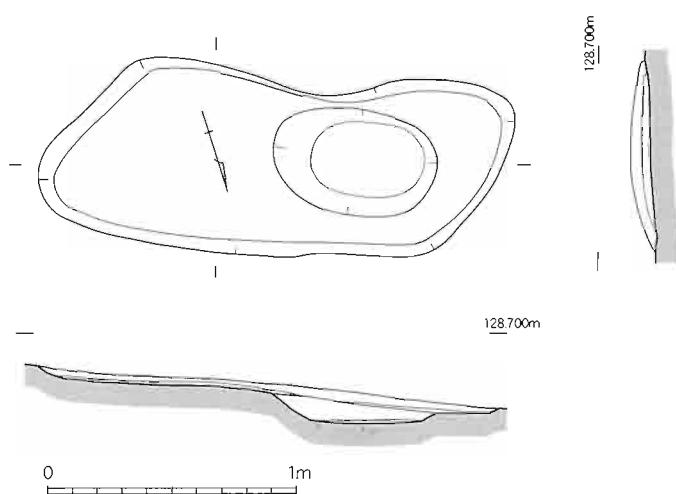
この遺構は、地形に沿って1~4号



第63図 6号竪穴住居跡実測図（1/60）



第64図 6号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)



第65図 1号土坑実測図（1/30）

住居跡を囲むような配置をとっており、高い位置からの水や土砂を排水するための機能として掘られた可能性が考えられる。

包含層出土遺物（第68図、図版30）

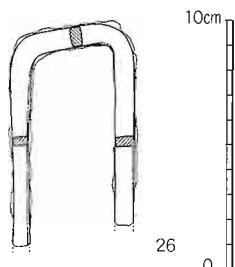
表土を除くと遺構面まで黒灰色の遺物包含層が厚く堆積しており、それを除去した後、地山や遺構面が検出された。ここではこの層中より出土した遺物を包含層出土遺物として扱う。

27～31は須恵器杯身である。33は精緻なつくりで外面粘土紐痕のような稜が数段にわたってみられた。底面には墨で書かれた可能性のある線が1本見られた。34は壺蓋である。体部から口縁部にかけてほぼ直角に曲がる。33～35は須恵器皿である。36は製塙土器の底部片である。底部は尖り底となり、口縁部に向かって開く。37～41は土師器甕である。37の口縁部は「く」の字に外反する。38は頸部に稜を持たないタイプである。39は胴部に対し直口するような短い口縁部となる。

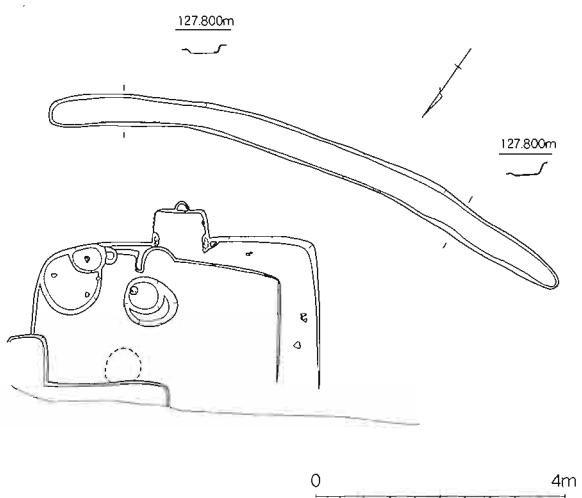
3. 小結

長迫遺跡D地点より発見された遺構群はいずれも奈良時代のものであり、8世紀中頃前後の時期と判断される。隣接する長迫遺跡B地点でも谷部最高所まで住居跡は営まれていることから、この一帯に広がる類似した谷部にも今回調査した遺跡と似かよったこの時期の集落が広がっていた可能性が高いと考えられる。

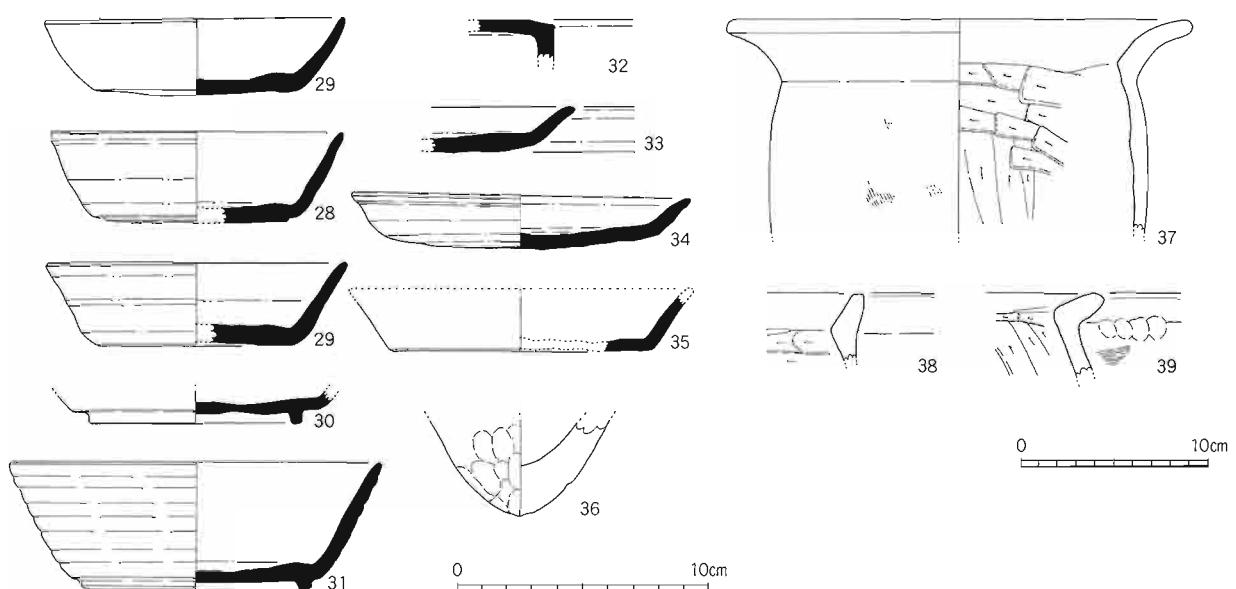
註1) 行時志郎「長迫遺跡A・B地点」『平成9年度 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会1999年



第66図 柱穴出土遺物実測図
(1/3)



第67図 溝状遺構・竪穴住居跡実測図 (1/100)



第68図 包含層出土遺物実測図 (1/3・1/4)



1～5号竪穴住居跡
(北西から)



1号竪穴住居跡カマド
(北西から)

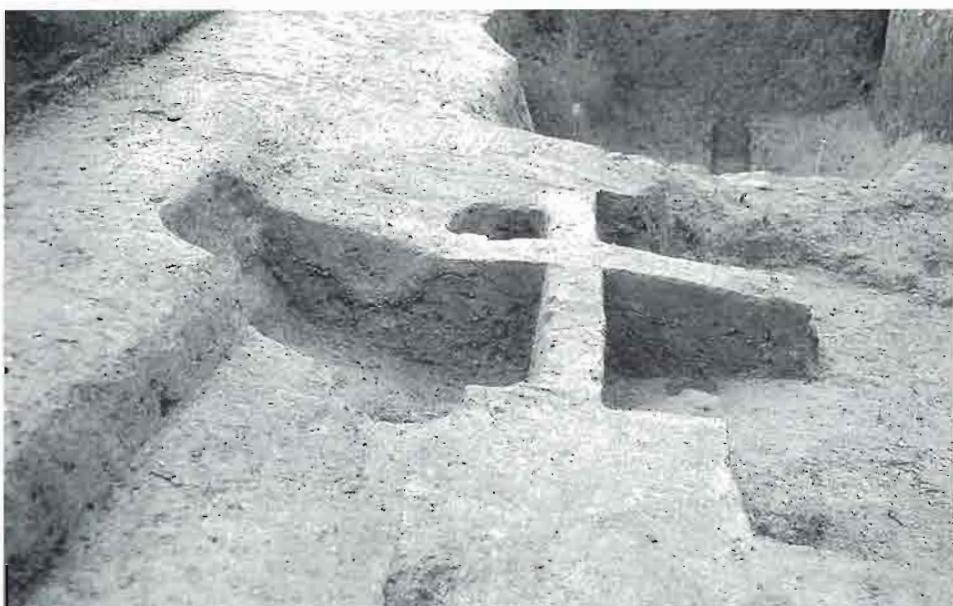


1号竪穴住居跡内土坑
(北西から)

図版 26



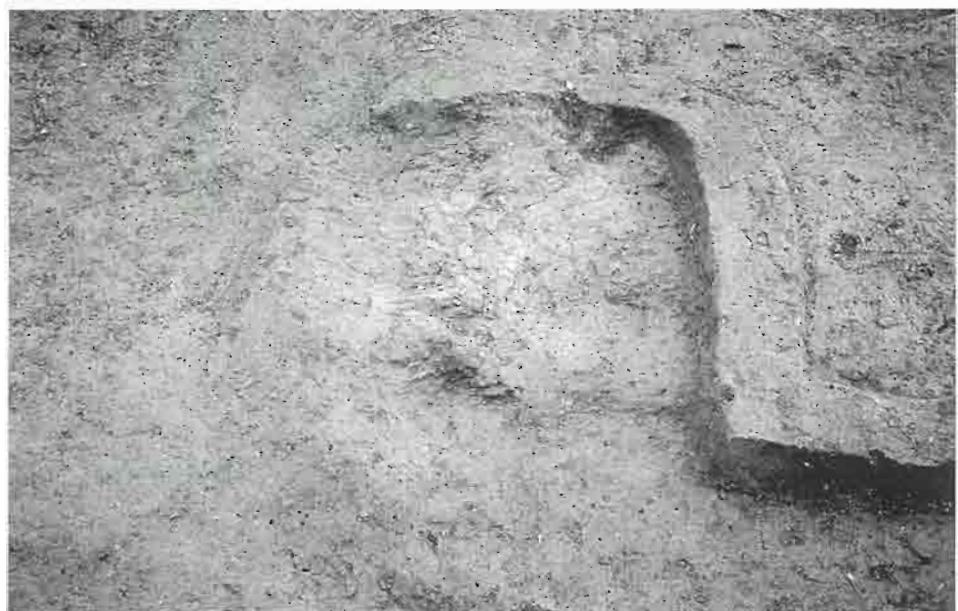
2号竪穴住居跡カマド
(北西から)



2号竪穴住居跡カマド内
埋土堆積状況



3号竪穴住居跡内土坑
(北から)



4号竪穴住居跡カマド
(北西から)



5号竪穴住居跡
(北西から)



5号竪穴住居跡カマド
(北西から)

図版 28



5号竪穴住居跡内
南側落ち込み

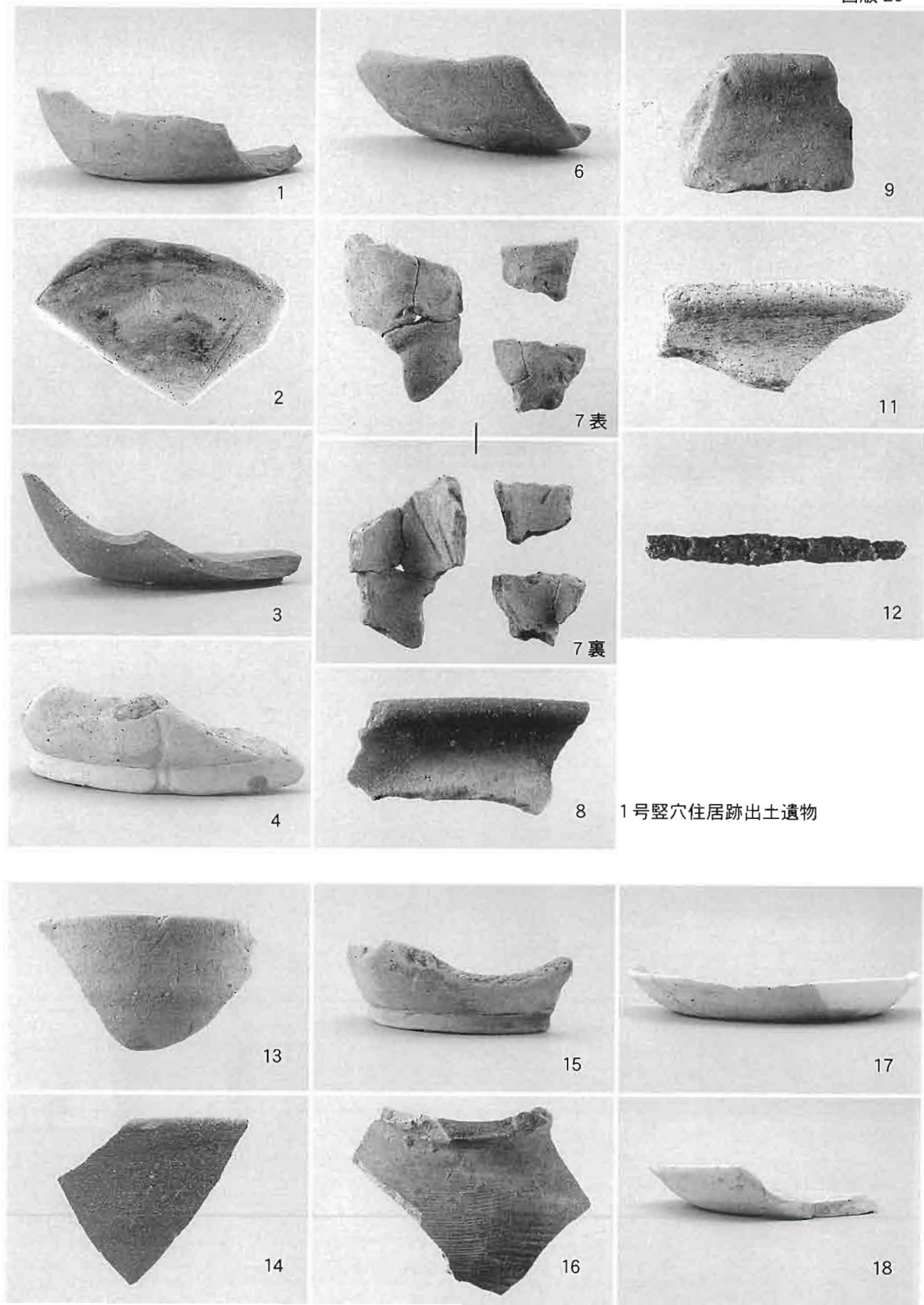


6号竪穴住居跡
(北西から)



1号土坑 (西から)

図版 29



図版 30



19



22



24

3号竪穴住居跡出土土器



21



23



25

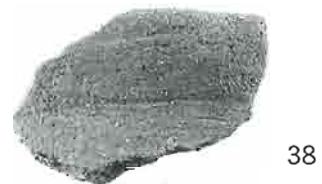
4号竪穴住居跡出土土器



27



33



38



28



34



39

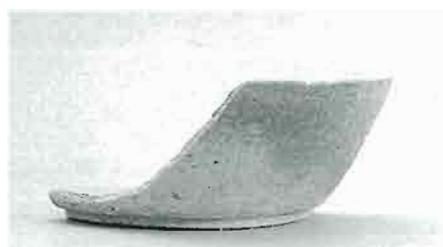
包含層出土土器



29



36



31



26



31裏



37

柱穴出土鉄器

第8章 尾漕遺跡



1. 遺跡の概要

尾漕遺跡は求来里川右岸の標高110m～115mの沖積地上にある。遺跡東側の丘陵上には、縄文時代から古代にかけての集落や墳墓などが発見されている。尾漕遺跡はこの丘陵の南西にあり、丘陵の裾と求来里川の沖積地がつながる緩斜面に位置する。調査前は水田として利用されており、その東側には雑木林が広がっていた。

調査は試掘調査の結果から九州横断自動車道建設に伴う尾漕遺跡1次調査区の隣接地に調査区を設定し、平成11年2月26日より表土剥ぎを開始し、同年3月31日に終了した。調査では竪穴住居跡1軒、掘立柱建物6棟、土坑2基、その他多数の柱穴などを確認することができた。整理作業は平成11年5月6日～平成11年5月31日まで行った。

2. 遺構と遺物（第69図）

1号竪穴住居跡（第70・71図、図版31・32）

1号竪穴住居跡は調査区の中央西側で検出され、6号掘立柱建物に切られている。規模は一辺が5.2～5.3mで平面形はほぼ正方形を呈する。北東側にカマドを布設し、壁に沿って周溝が掘り込まれている。主柱穴は4本あり、柱穴の深さは住居の床面から60～80cmである。遺物はカマド周辺を中心に出土した。

カマドはこの住居の北東側に付設されている。支脚は甕の口縁部を上に向けて据えられており、ほぼ原位置を保って残存していた。口縁部の打ち欠きは見られなかった。袖部は残存していなかったが、袖石に使用されたと思われる石が袖の掘り方のそばに横たわっていた。規模は焚口部から煙道の先端まで120cm、袖間の幅は約70cmである。焼土は支脚の周囲を中心に見られ、7～9層に焼土が集中して堆積していた。

1号竪穴住居跡出土遺物（第72・73図、図版34）

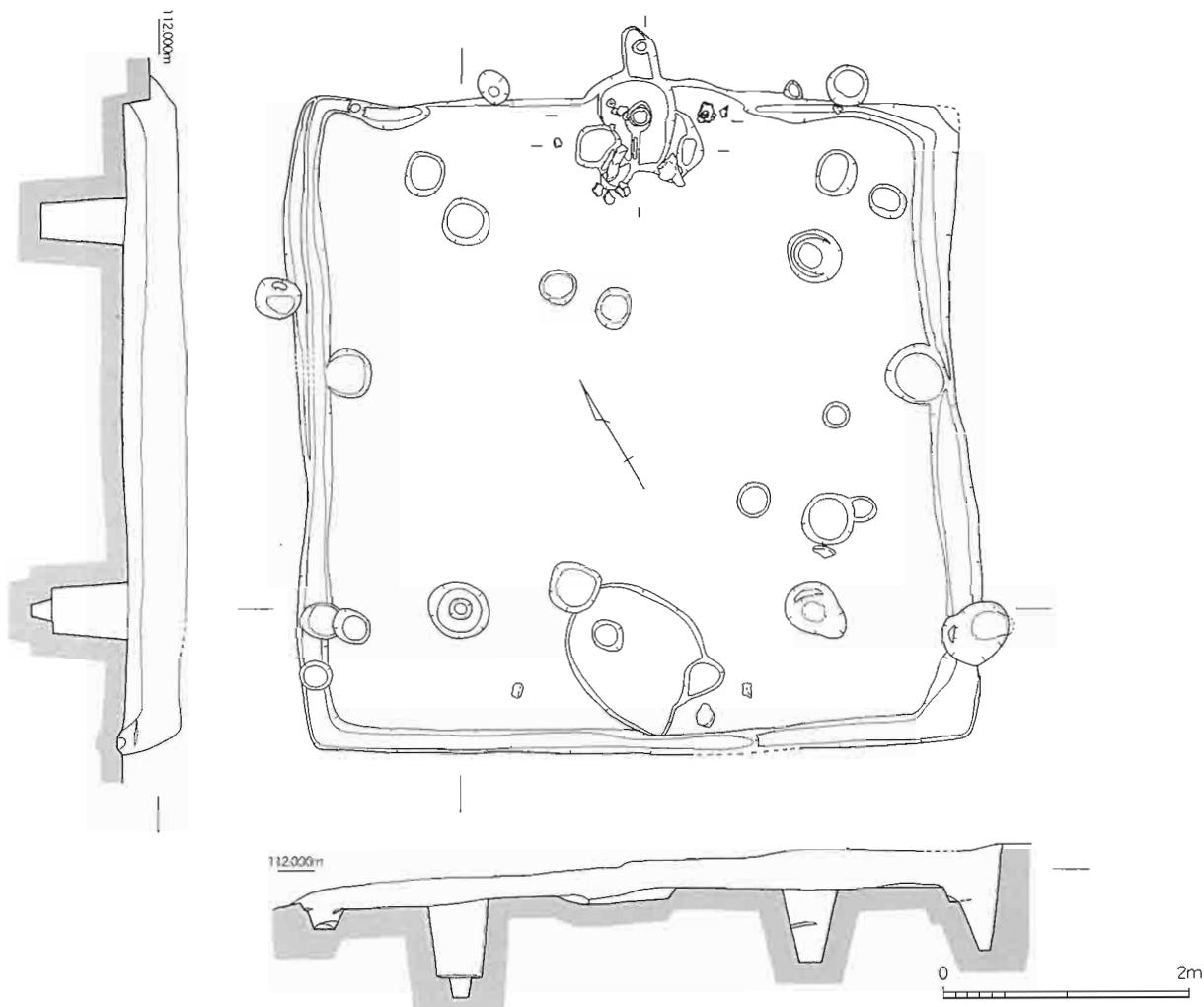
1は須恵器の壺蓋である。外面・内面ともに回転ナデが施されている。2は須恵器壺身で、外面・内面とも回転ナデが施され、内底面はその後、不整方向のナデが施されている。3はカマド周辺より出土した壺蓋でやや大型のものである。外面は回転ヘラケズリの後、回転ナデが施されている。4は壺身である。調整は内面に回転ナデ、外面には回転ヘラケズリが施されている。外底面は回転ヘラ切りの痕が残っており、轆轤から切り離し後は調整が施されていない。5は高壺である。壺部を欠いており、器面全体にわたって磨耗が激しく、調整は不明である。6は甕である。カマド内より出土した。外面は磨耗が激しく、調整は不明であるが、内面にヘラケズリが施され、また煤が付着していた。7もカマド出土の甕である。外面にハケ、内面にヘラケズリが施されている。8はカマドの支脚である。口縁部を一部欠いていたものの、ほぼ完形で原位置を保った状態で出土した。外面の磨耗が激しいが、一部にハケが施されている。内面にはヘラケズリが施されている。9は奈良時代の土師器壺身で、埋土中より出土した。器面の磨耗が激しく、調整は不明である。この住居の埋没過程での流れ込みであろう。

1号掘立柱建物（第74図）

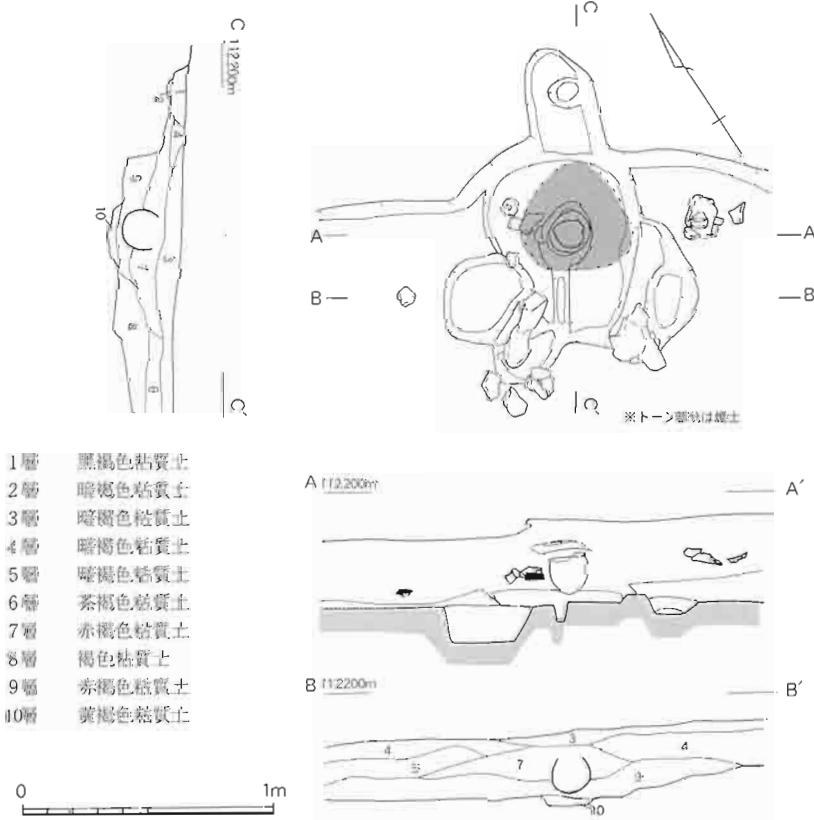
調査区北東側で検出した1間×2間の建物で主軸はN-25°-Eを測る。規模は心心距離で約5.2m×約2.7mを測る。2号掘立柱建物と切り合っている。柱穴の深さは検出面から40～80cmである。柱穴の埋土中から遺物は出土しているが、小破片のため、時期の特定は困難である。

第69図 遺構配置図 (1/200)





第70図 1号堅穴住居跡実測図 (1/60)



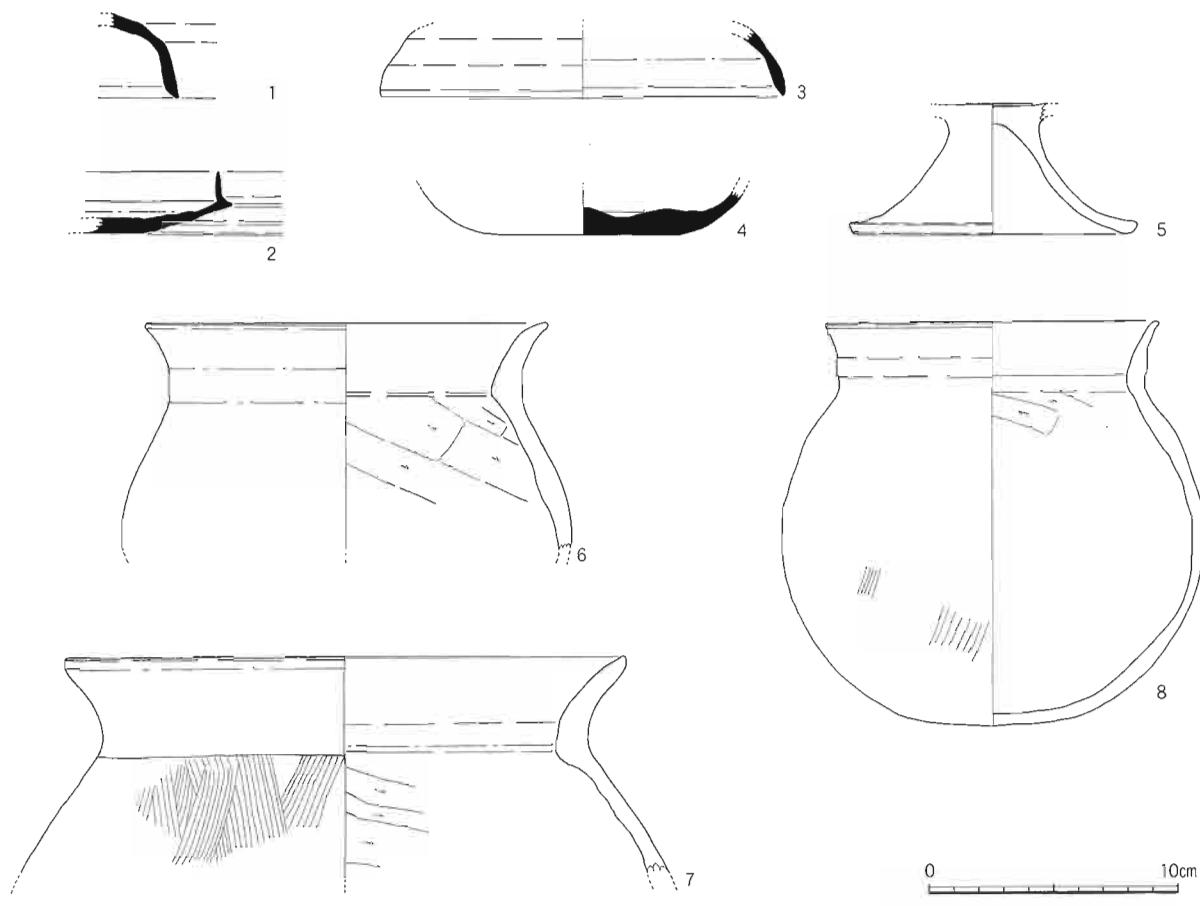
第71図 1号堅穴住居跡カマド実測図 (1/30)

2号掘立柱建物 (第75図)

1号掘立柱建物と切り合う2間×3間の建物で主軸はN-66°-Wを測る。規模は心心距離で約4.0m×約6.9mを測る。柱穴の深さは検出面より25~95cmである。柱穴より青磁碗・白磁碗・土師質土器の壊などが出土している。時期は13世紀代と考えられる。

3号掘立柱建物 (第76図)

調査区中央西側で検出した1間×4間の建物で、4号掘立柱建物に切られ、その平面形はややいびつである。主軸はN-42°-Eを測る。規模は心心距離で4.7~5.1m×7.4~7.7mを測る。柱穴



第72図 1号竪穴住居跡遺物実測図（1）（1/3）

の深さは検出面から35~105cmである。柱穴からは土師質土器の碗が出土している。

4号掘立柱建物（第77図）

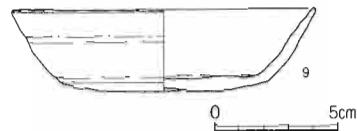
3号掘立柱建物を切る2間×4間の建物で、主軸はN-26°-Eを測る。規模は心心距離で約4.7m×約9.2mを測る。検出面からの柱穴の深さは35~105cmである。遺物は近世の陶器皿・鉢が出土している。また、柱穴埋土中の出土ではないが、この建物の柱穴付近より寛永通宝が出土していることから17世紀半ばころの建物と考えられる。

5号掘立柱建物（第78図）

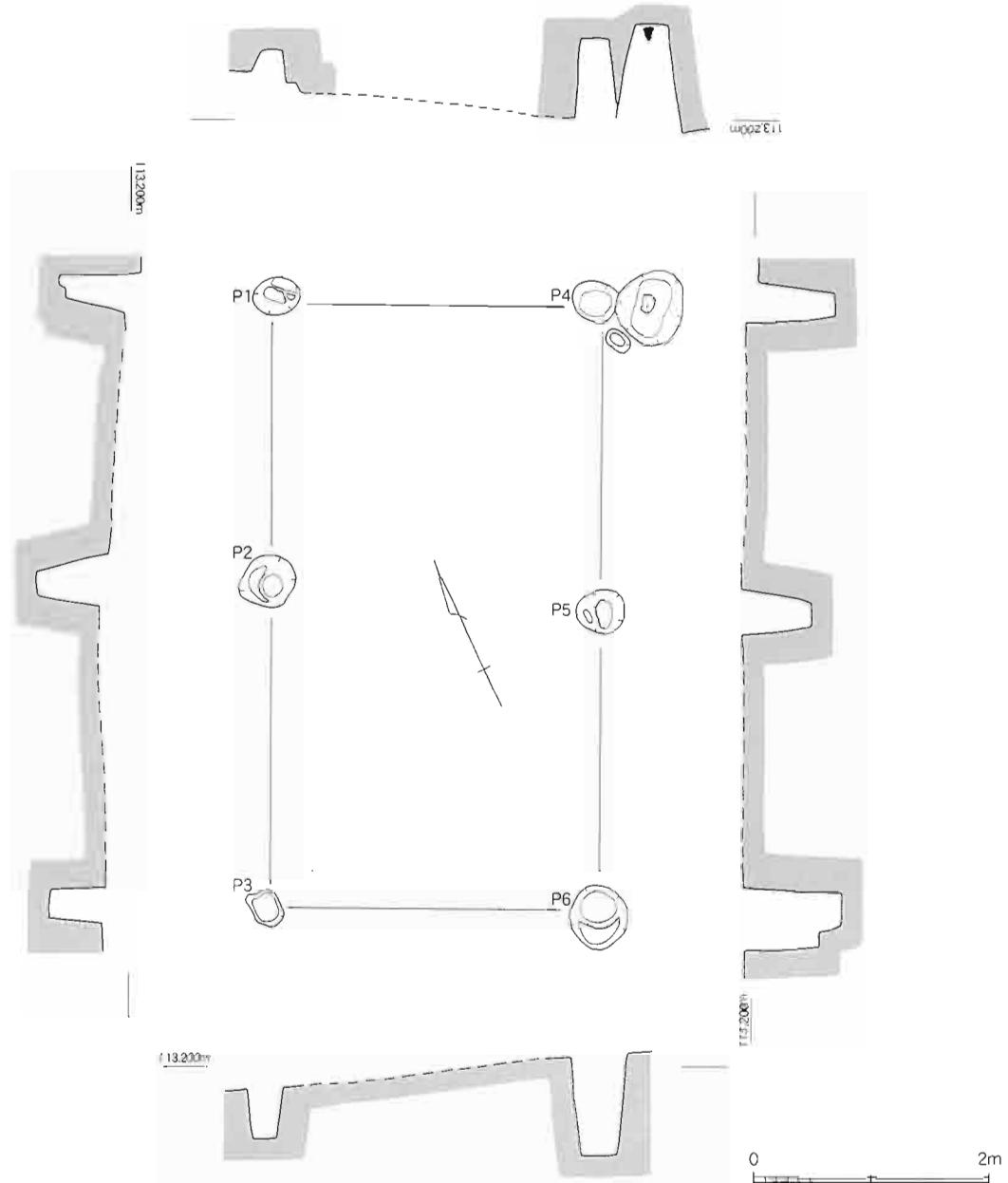
3・4号掘立柱建物と切り合い、その南側で検出した2間×4間の建物で、平面形はややいびつな形となっている。3号掘立柱建物を切っているが、4号掘立柱建物との先後関係は不明である。主軸はN-41°-Eを測る。規模は心心距離で約4.2m×約8.1m~8.4mである。柱穴の深さは検出面より20~70cmである。柱穴の埋土中より擂鉢の小破片が出土していることから近世の建物と考えられる。

6号掘立柱建物（第79図）

調査区中央西側で検出した1間×3間の建物で、1号竪穴住居跡を切っている。主軸はN-72°-Wを測る。規模は心心距離で4.3~4.4m×約6.2mを測る。柱穴の深さは検出面より20~80cmである。柱穴の埋土中からの遺物の出土はなく、時期は不明である。



第73図 1号竪穴住居跡出土遺物
実測図（2）（1/3）



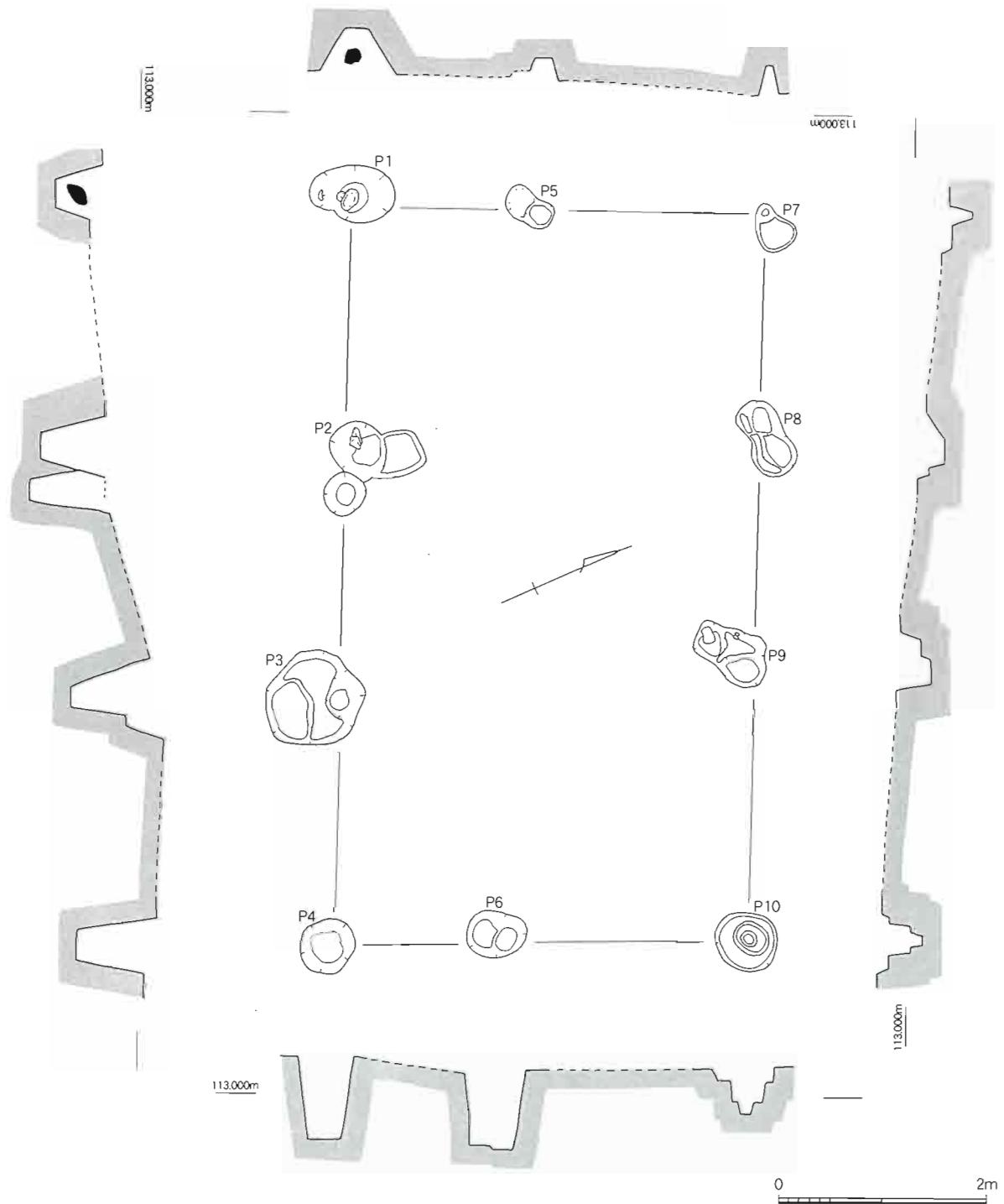
第74図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

掘立柱建物出土遺物 (第80図 12・16・23・25・26、図版34)

12は2号掘立柱建物P6出土である。内面に一部回転ナデが見られ、底部は回転糸切りである。16は4号掘立柱建物のP7出土である。23は白磁碗で2号掘立柱建物P3出土である。外面には薄く蓮弁文が施されている。25は陶器皿で3号掘立柱建物のP3出土である。外面には一部にハケの後にナデが施されている。また、外面全体にわたってナデが施され、器面調整がされている。内面には櫛描きのあとも見られる。26は陶器甕の口縁部で3号掘立柱建物のP8出土である。

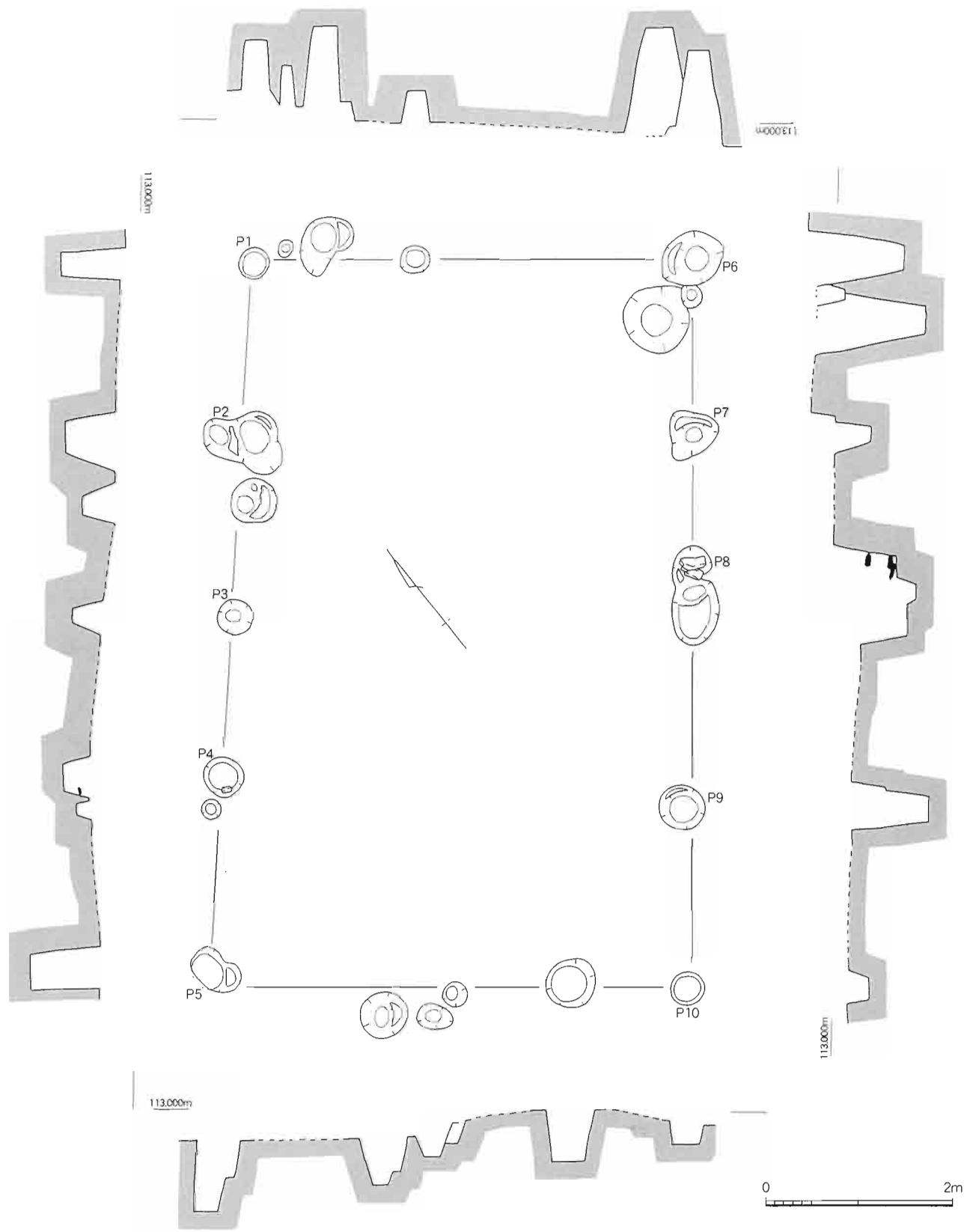
柱穴出土遺物 (第80・81図、図版34)

ここでは、掘立柱建物の柱穴として確認できなかった柱穴からの出土遺物を扱う。10～13は小皿である。10は底部は回転糸切りである。11は外面の底部近くに1条の沈線が見られる。底部は回転糸切りである。13は外面に一部ケズリが見られる。底部は糸切りで、一部に当て具を当てた痕跡が見られる。14は椀である。全体に磨耗が激しく、調整はわかりづらいが底部は回転糸切りである。15は小皿である。口縁部を欠いており、底部は回転糸切りである。17は小皿である。口縁部を欠いており、底部は回転糸

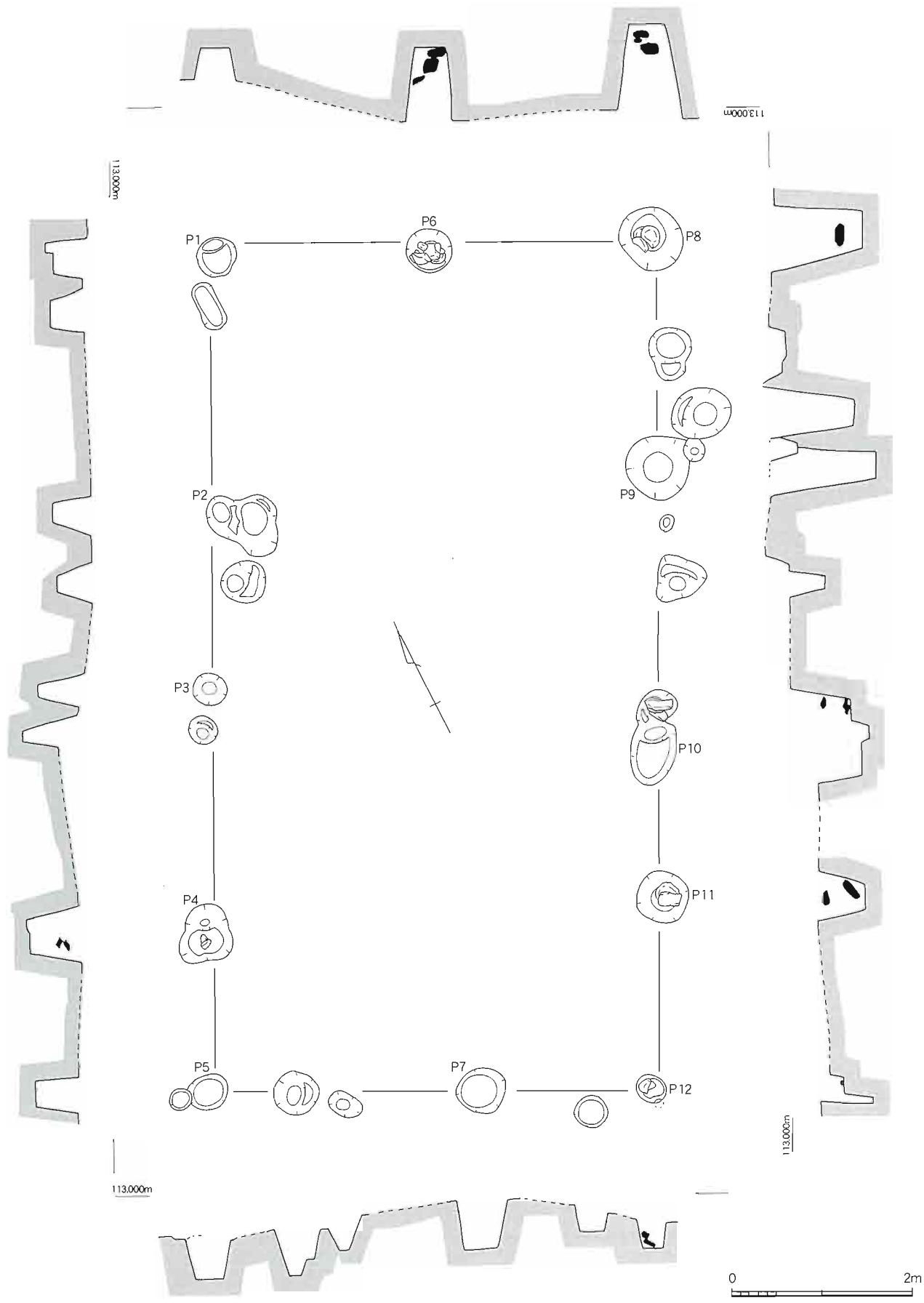


第75図 2号掘立柱建物遺物実測図 (1/60)

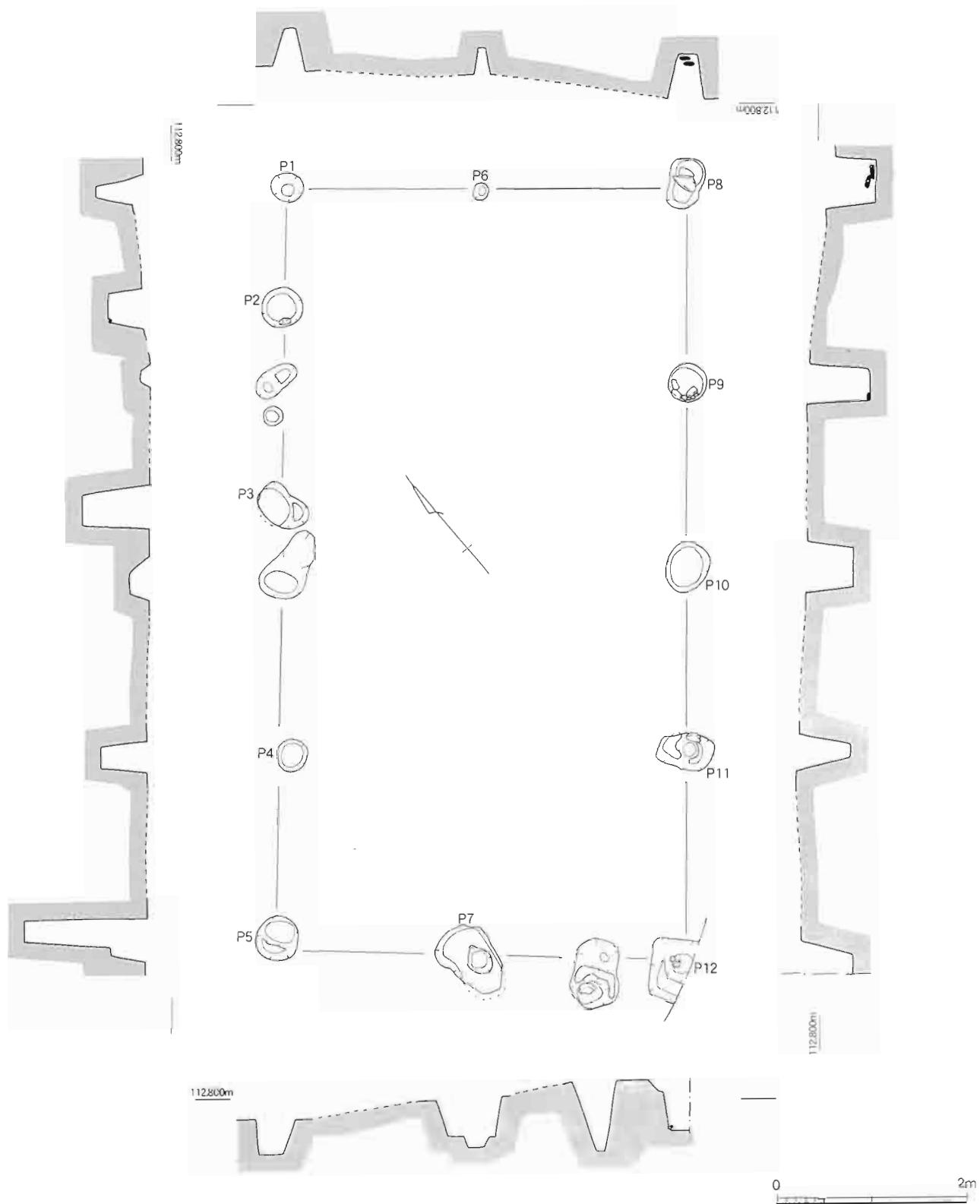
切りである。18も小皿である。他の小皿とは異なり、器壁は薄く、口縁部の立ち上がりも垂直に近い。器面の磨耗が激しく、調整は不明である。19・20は小型の浅鉢と考えられる。19は脚部を貼付けで、一部に煤が付着している。20は磨耗が激しく、調整は不明である。19と同様に煤が付着している。21は須恵器碗である。口縁部を欠いている。高台は貼付けで立ち上がりの部分よりもかなり内側に付けられている。22は青磁碗で、一部のみの残存である。外面には蓮弁文が施されている。24は青磁碗である。外面には蓮弁文が施されている。外面は胴部より、内面は口縁部よりそれぞれ下部に釉がほどこされてい



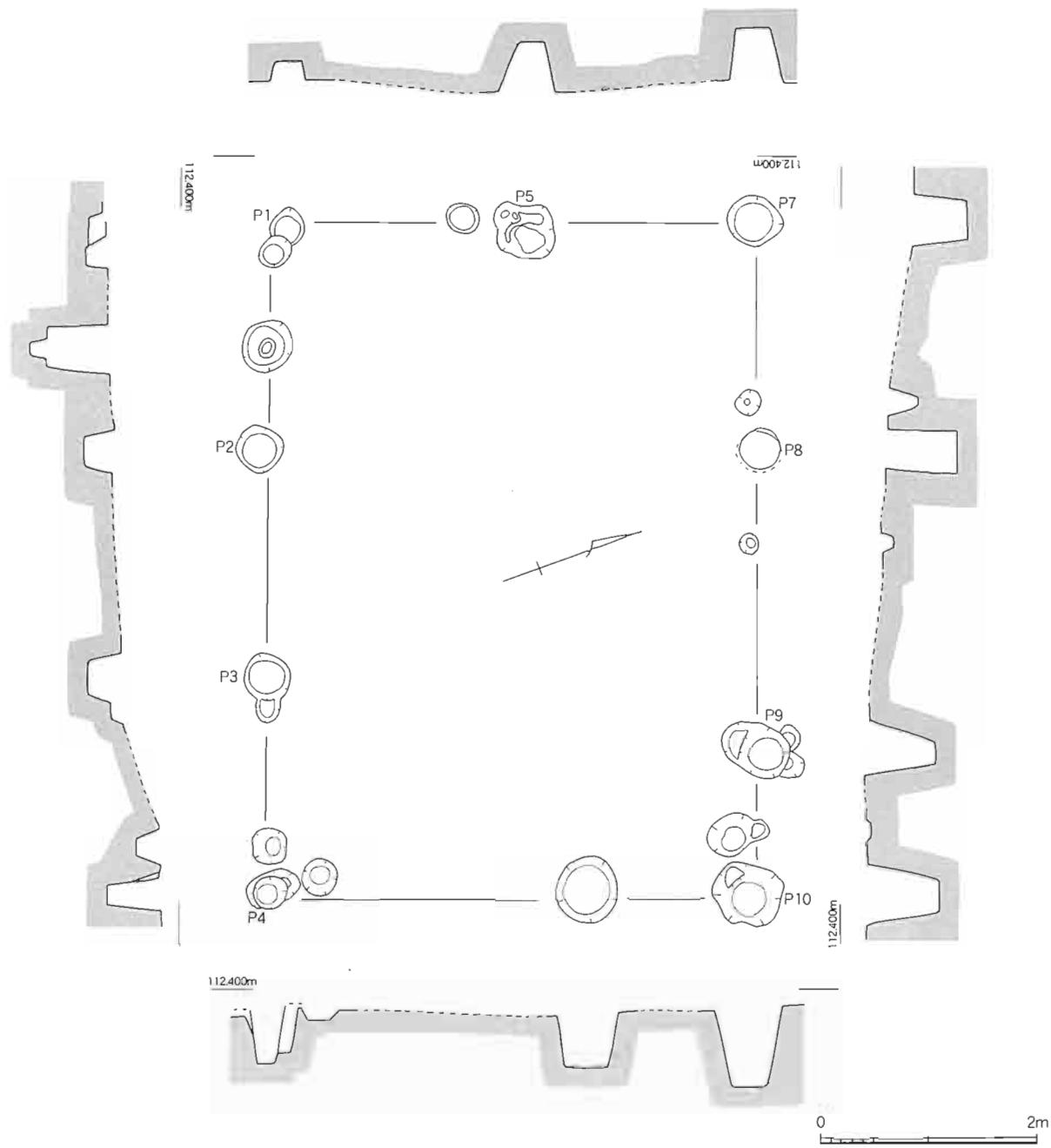
第 76 図 3 号掘立柱建物実測図 (1/60)



第77図 4号掘立柱建物実測図 (1/60)



第78図 5号掘立柱建物実測図 (1/60)

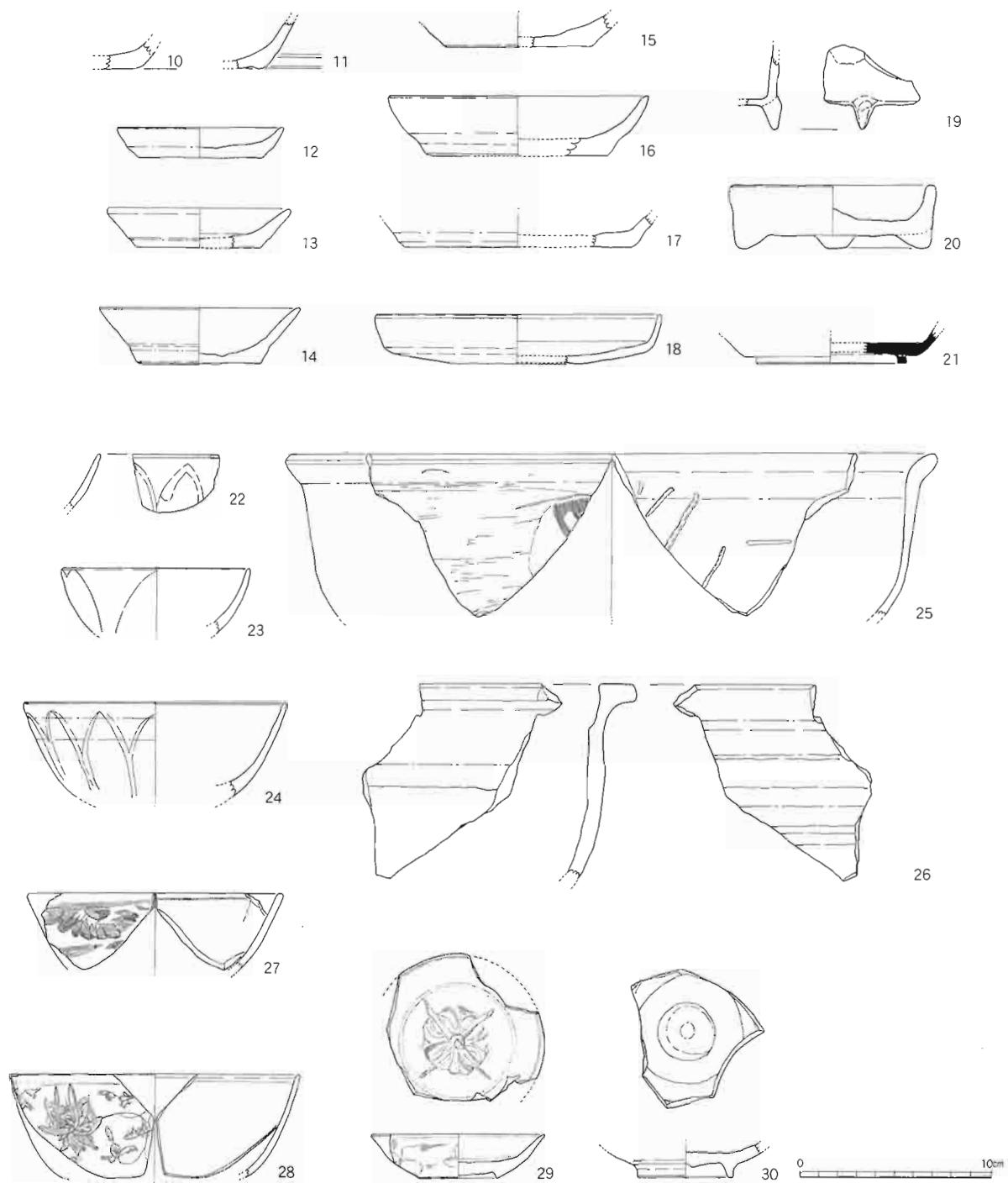


第79図 6号掘立柱建物実測図 (1/60)

る。27~30は染付碗である。27は外面には花弁文、鳥文が、内面には口縁部近くに円圏が描かれている。28は外面に青で花文が描かれ、内面には圈線が描かれている。29は高台の底面が露胎している。みこみ部分には四方に鶴が描かれ、その周囲に二重の円圏、外面にも鶴が描かれている。また、内面口縁部にも円圏が描かれている。明代のものであろう。30は口縁部は欠いているが、底部は完全に残っている。みこみの一部と底面は露胎している。31・32は土錘である。33は寛永通宝である。

1号土坑（第82図、図版33）

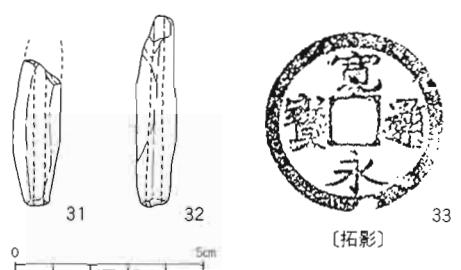
規模は長軸約1.1m、短軸約90cm、深さ約42cmを測る。遺物の出土はなく、時期は不明である。



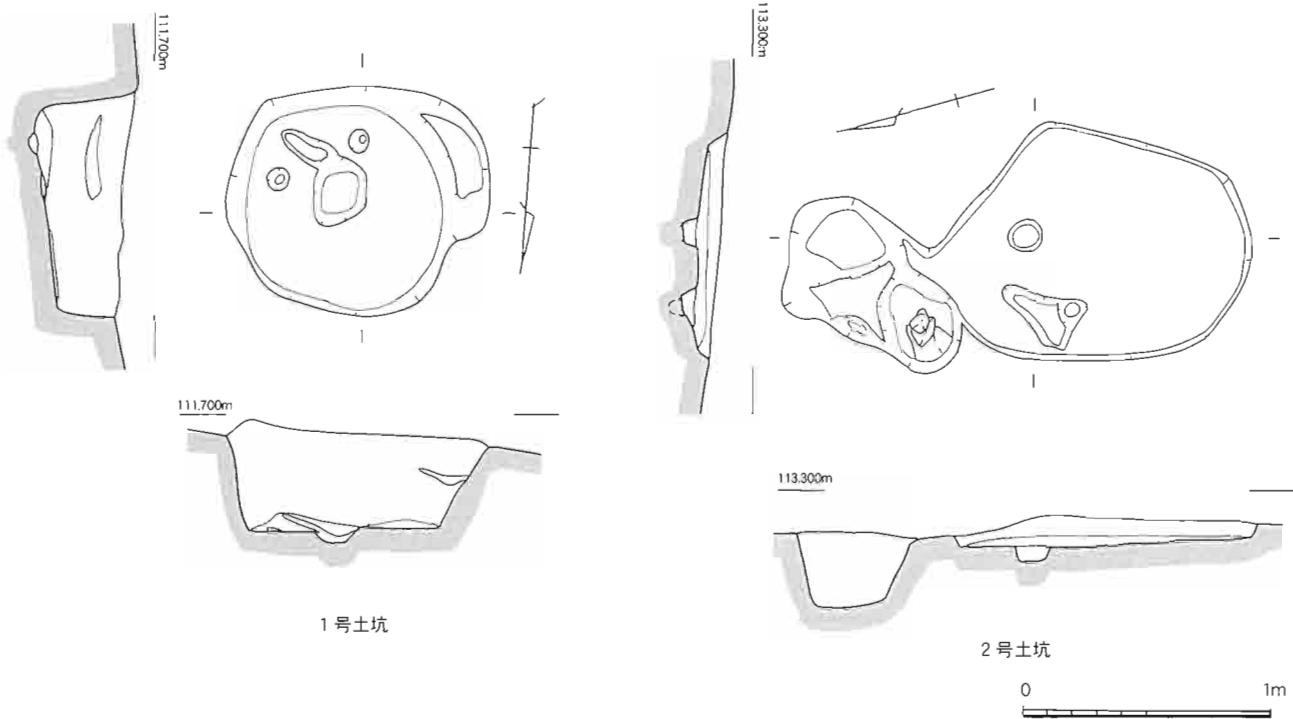
第80図 掘立柱建物・柱穴出土遺物実測図（1/3）

2号土坑（第82図、図版33）

規模は長軸約1.9m、短軸約90cmを測る。最も深いところで30cmである。遺物は出土しておらず、時期は不明である。調査時点では1基の土坑として捉えたが、土坑と柱穴などが切り合っている可能性があることも指摘しておきたい。



第81図 柱穴出土遺物実測図（1/2・1/1）



第82図 土坑実測図（1/30）

3. 小結

本遺跡からは古墳時代から近世にわたる遺構や遺物が確認された。竪穴住居跡は出土した土器から6世紀中頃のものと考えられる。周辺には古墳時代後期の集落跡である長迫遺跡A・B地点^{註1)}や尾漕遺跡1・2・5次調査区があり、この時期の集落の広がりが本遺跡でも確認されたということができる。

奈良時代の住居については今回の調査では確認できなかったが、柱穴中より出土した須恵器や近接する長迫遺跡D地点で確認された住居から、近隣に集落の存在が想定される。掘立柱建物は6棟確認できた。時期の特定できるものは2～5号掘立柱建物である。2号掘立柱建物出土の白磁碗は14世紀代のものと考えられる。3号掘立柱建物からは14世紀後半から15世紀前半にかけての壺が出土している。また、4号掘立柱建物から17世紀前半頃の皿や甕、またその柱穴近くより寛永通宝も出土している。5号掘立柱建物は柱穴埋土中出土した擂鉢の小破片から近世の建物であったこと考えられる。このほか、柱穴からは12世紀中頃の壺や13～14世紀にかけての青磁碗、16世紀後半代の染付も出土している。尾漕遺跡1次調査区では300枚を超える六道錢を埋納した墓、近世の掘立柱建物が検出され、また、14世紀後半から15世紀にかけての青磁碗、15世紀後半から16世紀前半にかけての染付なども出土していることから、遺跡周辺において中世から近世にかけて連綿と続く集落が存在したと考えることができよう。

註1) 行時志郎「長迫遺跡A・B地点」『平成9年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1999年

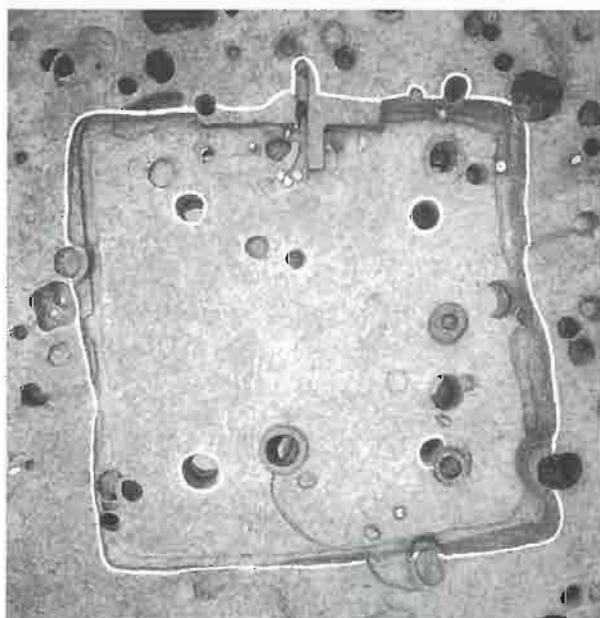
註2) 櫻木晋一・友岡信彦・松本康弘編『佐寺原遺跡 尾漕遺跡群 有田塚ヶ原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発

掘調査報告書（9）大分県教育委員会 1998年

村上久和・原田昭一・佐々木章編『尾漕遺跡（第2次調査区・第5次調査区）』一局部改良求来里川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分県文化財調査報告書 第112輯 2000年



遺跡全景（北東から）



1号竪穴住居跡（真上から）



1号竪穴住居跡（南から）

図版 32



1号竖穴住居跡カマド
(南から)



1号竖穴住居跡遺物
出土状況



1号竖穴住居跡
カマド支脚



1号竪穴住居跡
遺物出土状況



1号土坑（北から）



2号土坑（東から）

図版 34



第9章 総括

今回の市道田島有田線改良工事に先立つ調査は、主に来求里川右岸の塚ヶ原・祇園原丘陵の谷部や丘陵斜面といった場所に存在する遺跡を対象として実施されたものである。過去に、この路線上の東側隣接地では有田塚ヶ原遺跡、有田塚ヶ原古墳、尾漕1・2号墳、長迫遺跡A・B地点、西側では尾漕遺跡群、大迫遺跡、周辺では馬形遺跡、平島遺跡など数多くの調査事例があり、市内では最も多く発掘調査が行われている地域もある。

平島遺跡D地点での弥生時代の墳墓群のうち大型成人用甕棺墓は、これまで吹上遺跡、朝日宮ノ原遺跡、草場第2遺跡、後迫遺跡、元宮遺跡、上野遺跡など日田盆地内を望むことのできる台地上での発見例しかなかったが、今回はじめて盆地周辺部での発掘事例となった。近年、市内での大型成人用甕棺墓の調査は、特筆される平成7年度の吹上遺跡6次調査での鉄器、青銅器、装身具などを副葬した中期後半の大型成人用甕棺墓8基の調査以後、平成10年度の吹上遺跡9次調査、平成11年度の後迫遺跡2次調査、平成12年度の元宮遺跡2次調査とその数はまちまちであるが毎年のように調査され資料数も増えている。とくに、今回のD地点では2・3号墓から小玉が出土しており、副葬品が出土した例では先の吹上遺跡6次調査3~5号墓、同遺跡2次調査1・2号墓などしかないことから、市内での大型成人用甕棺墓での貴重な副葬資料と言えよう。

次に塔ノ本古墳2号墳はその年代を決定づける出土遺物は少なかったものの、石室構造などから古墳時代前半に築造された円墳であることが判明した。しかも、この古墳の下位に位置する平島遺跡D地点の1号墳、平島遺跡E地点の3号墳、近接する平島古墳とともにまとまりをもって存在する古墳群の一基であることも明らかとなった。これまで市内では古墳時代後期の古墳の大半は単独で営まれている例が多く、塔ノ本古墳群のように数基がまとまって存在する例は珍しい。古墳群の周辺には、1~3基程度で構成される古墳や古墳群が点在しており、今後その様相を考える意味では興味深い。

さらに、祇園原遺跡の2次調査地点では集中して存在する建物8棟が確認された。すでに調査が終了している隣接した1次調査区では、弥生時代中期後半から後期中頃にかけての集落跡が確認されている。この弥生期の集落構造は大型建物を中心にその周囲を堅穴住居が巡る配置がなされ、さらに堅穴住居に限ればその平面形が円形から方形へと移り変わる過渡期的な様相を示している。盆地内には吹上・小迫辺原・朝日宮ノ原遺跡など大規模な該期の集落遺跡が存在するが、後期前半期の集落構造などはほとんどわかっていない。こうした意味ではこの遺跡がもつ当該期の集落のあり方や、今回の2次調査での建物跡の確認はさらに該期の集落を考える意味では重要といえる。

また、長迫遺跡C・D地点の調査は、古墳時代後期から古代の集落跡の調査であった。この遺跡も祇園原遺跡と同様に、隣接してA・B地点の調査が行われており、詳細は後日のA~C地点の報告に譲るとしても、遺跡全体としては縄文時代中期、古墳時代後期、古代の集落遺跡であることが判明した。なかでも古墳時代後期の遺構は、総数で堅穴住居跡約100基、掘立柱建物約20基と市内では大規模な調査例といえる。しかも、これまで台地上や沖積地での立地条件下での事例が大半であったが、C・D地点の調査により丘陵谷部での好事例となった。

最後に、尾漕遺跡ではこれまでにも数回の調査が行われている。今回の6次調査区に隣接する1次調査区では中世の大量の六道銭を副葬した中世墓と数多くの柱穴跡が検出されている。6次調査区では中世墓の存在こそなかったものの、数多くの柱穴跡が確認され、6基の建物跡の復元がなされた。求米甲川右岸を中心に位置するこの地域での中世期の様相が次第に明らかになってきている。

(参考文献)

- 『平成8年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年
『平成9年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997年
『平成10年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2000年
友岡・松本他編 『佐寺原遺跡 尾瀧遺跡群 有田塚ヶ原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
大分県教育委員会 1999年
村上・友岡他編 『日田条里遺跡群 佐寺横穴墓群 大迫遺跡 白岩遺跡 下綾垣遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 大分県教育委員会 1999年
行時志郎編 『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第13集 日田市教育委員会 1998年
土居・行時他編 『馬形遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第16集 日田市教育委員会 1998年

註1) 平成11年度に日田市教育委員会が調査。

註2) †

註3) 公園建設中に出土する。

註4) 註(1)と同じ

註5) 註(2)と同じ

註6) 有田川左岸の台地下にある径約10m、高さ約4mの円墳。

註7) 行時志郎「長迫A・B地点」『平成9年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会

第1表 平島遺跡D地点出土土器観察表

検査番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)				調整				胎土 表石英 内面 赤色 顔料付着 有り 内面黒斑付着 外面黒斑有り 内面赤色顔料付着 外面黒斑有り 内面黒斑付着 外面上部赤色顔料付着	焼成 外 内	色調 外 内	備考
				口径	脚部最大径	底径	器高	外	面	内	面				
第5図	1号甕棺	弥	甕棺	-	-	-	9.5	-	ハケ	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	暗黄褐色	淡黄褐色	内面黒斑か?	
第7図1	2号甕棺	弥	甕棺	68.0	69.0	-	-	90.5	タタキ後ハケ	口縁部、脚下位ハケ、頸部ケズリ	黄褐色	淡赤褐色	内面黒斑付着 外面黒斑有り		
第7図2	2号甕棺	弥	甕棺	50.0	64.5	12.0	-	(88.0)	ハケ	口縁部ハケ、胸部ケズリ後ナデ	暗黄褐色	黄褐色	内面黒斑付着 外面黒斑有り		
第9図	3号甕棺	弥	甕棺	(54.5)	63.0	10.0	-	-	ハケ	ハケ後ナデか?	ハケ後ナデ	暗黄褐色	淡橙褐色	外面黒斑付着 内面赤色顔料付着	
第12図1	1号墓	1号墓	甕棺	-	-	-	-	-	ハケ	ナデ	ナデ	淡橙褐色	淡橙褐色	外面黒斑付着 内面赤色顔料付着	
第12図2	1号墓	弥	甕棺	-	-	-	-	-	ハケ	ハケ後ナデ	不明	淡橙褐色	淡橙褐色	颈部内面赤色顔料付着	
第12図3	1号土坑	弥	甕棺	(65.6)	-	-	-	-	ハケ	ハケ後ナデ	不明	黄褐色	黄褐色	颈部内面赤色顔料付着	
第17図4	1号土坑	弥	甕棺	(35.5)	-	-	-	-	ハケ	ハケ後ナデ	ハケ	黄褐色	黄褐色	黄褐色	
第17図5	1号土坑	弥	甕棺	-	-	-	-	-	ハケ	ハケ後ナデ	ハケ	暗黄褐色	暗黄褐色	暗黄褐色	
第17図6	1号土坑	弥	甕棺	-	-	-	-	-	ハケ	ハケ後ナデ	ハケ	黄褐色	黄褐色	黄褐色	
第17図7	1号土坑	弥	甕棺	-	-	-	-	-	9.6	不明	ナデ	黄褐色	黄褐色	黄褐色	
第17図8	1号土坑	弥	甕棺	-	-	-	-	(11.0)	ハケ	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	黄褐色	
第17図9	1号土坑	弥	甕棺	-	-	-	-	(7.8)	不明	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	黄褐色	
第17図10	1号土坑	弥	甕棺	-	-	-	-	(9.4)	不明	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	黄褐色	
第17図11	1号周溝	弥	甕	-	-	-	-	5.1	回転ナデ	ナデ	ナデ	灰白色	暗黄褐色	暗黄褐色	
第19図12	1号周溝	弥	甕	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	黄褐色	
第19図13	1号周溝	弥	甕	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	黄褐色	
第19図14	1号周溝	弥	甕	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	黄褐色	
第19図15	1号周溝	須	甕	(14.0)	受部	-	-	(4.0)	回転ナデ、内底面調整ナデ	回転ナデ、内底面調整ナデ	青灰色	青灰色	青灰色	青灰色	
第21図18	1号溝	弥	甕	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	黄褐色	
第21図19	土坑	弥	甕	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	
第21図20	土坑	弥	甕	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色	暗黄褐色	
第21図21	土坑	弥	甕	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	
第21図22	土坑	弥	甕	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	
第21図23	土坑	須	甕	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	青灰色	青灰色	青灰色	
第21図24	表土中	須	甕	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	青灰色	青灰色	
第21図25	表土中	須	甕	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色	淡青灰色	淡青灰色	
第21図26	表土中	須	甕	11.2	受部	12.8	-	1.6	回転ナデ後回転ハケナリ	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	青灰色	青灰色	
第21図27	表土中	土	甕	(13.8)	-	(8.5)	(3.5)	(2.7)	回転ナデ、底部静止ヘラ切り	回転ナデ、内底面ハケベラ輪状痕	回転ナデ	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
第21図28	表土中	土	甕	(4.7)	-	(6.0)	(2.3)	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	

第2表 塔ノ本古墳出土土器観察表

検査番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)				調整				胎土 表石英 内面 赤色 顔料付着 有り 内面黒斑付着 外面黒斑有り 内面赤色顔料付着 外面黒斑有り	焼成 外 内	色調 外 内	備考
				口径	脚部最大径	底径	器高	外	面	内	面				
第28図28	周溝	須	蓋	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	青灰色	青灰色	
第28図29	周溝	土	甕	(11.4)	-	(6.0)	(2.7)	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	黄褐色	黄褐色	黄褐色	
第28図30	周溝	土	甕	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	良好	や不良	良好	

28131	石室内	土	怀	(13.4)	-	(9.2)	(3.6)	ナテカ	ナテカ	a,b,c	好	淡黄橙色
28132	石室内	土	杯	(13.2)	-	(6.0)	(2.7)	-	ナテカ	a,b,c	不良	淡黄橙色
28133	表採	須	杯	12.0	-	7.4	4.0	回転ナデ	回転ナデ	a	良好	綠灰色
28134	表採	須	蓋	-	-	-	-	回転ヘラケズリ	回転ナデ	a,c	良好	青灰色
28135	表採	須	錐瓶	(12.4)	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	a,c	良好	暗青灰色

奏第3章 奏物遺跡追迫旨出上

出土地番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)			調整			色調	
				口径	脚部最大径	底径	器高	外	内	面	焼成
4414回1	4号住	土	甌	(13.6)	(15.6)	-	14.9	ハケ	ヘラケアリ後ナテ	b.c.e	良好 黄褐色

表第4長道諸跡占出十器鑑察表

出土位置	種別	器種	法量(cm)			調			燒成			色調			備考
			口径	胴部最大径	底径	器高	外	面	内	面	外	内	外	内	
5941 1号住	須	坏身	(12.4)	-	8.4	3.3	回転ヨコナデ	回転ナデ、内底面不定方向ナデ	a.c.f	良好	暗灰色	底面回転ヘラギリ未調整	底面回転ヘラギリ未調整	底面回転ヘラギリ未調整	底面回転ヘラギリ未調整
5942 1号住	須	坏身	-	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ナデ、内底面不定方向ナデ	c.f.	良好	淡灰色	底面回転ヘラギリ	底面回転ヘラギリ	底面回転ヘラギリ	底面回転ヘラギリ
5943 1号住	須	坏身	(12.9)	-	(7.5)	3.9	回転ヨコナデ	回転ナデ、内底面不定方向ナデ	c.f.	良好	青灰色	青灰色	青灰色	青灰色	青灰色
5944 1号住	須	坏身	-	-	(9.8)	-	回転ヨコナデ	回転ナデ	c.f.	良好	淡灰色	底部高台底面回転ヘラギリ	底部高台底面回転ヘラギリ	底部高台底面回転ヘラギリ	底部高台底面回転ヘラギリ
5945 1号住	須	高坏	-	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ナデ	c.f.	良好	暗灰色	脚部片	脚部片	脚部片	脚部片
5946 1号住	土	壞土器	(11.9)	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ナデ、下半手持ちヘラギリ	c.d	良好	茶褐色	内面有痕わざに残る	内面有痕わざに残る	内面有痕わざに残る	内面有痕わざに残る
5947 1号住	土	甕	(5.8)	-	-	-	指揮え	回転ナデ	a.c	良好	淡褐色	2次焼成受ける	2次焼成受ける	2次焼成受ける	2次焼成受ける
5948 1号住	土	甕	(22.7)	-	-	-	ヨコナデ	颈部下横方向ヘラギリ	a.b,c,e	良好	淡黒褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色
5949 1号住	土	甕	-	-	-	-	ヨコナデ	颈部下横方向ヘラギリ	a,b,c,e	良好	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色
5950 1号住	土	甕	-	-	-	-	ヨコナデ	颈部下横方向ヘラギリ	a,b,c,e	良好	暗褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色
5951 1号住	土	甕	-	-	-	-	ハケ+ヨコナデ	颈部下横方向ヘラギリ	b,c,d	良好	淡黃褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色
5952 2号住	須	坏身	(12.0)	-	-	-	回転ヨコナデ	颈部下横方向ヘラギリ	c,f	良好	淡灰色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色
5953 2号住	須	坏身	-	-	-	-	回転ヨコナデ	颈部下横方向ヘラギリ	c	良好	暗青灰色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色
5954 2号住	須	坏身	-	-	-	-	回転ナデ	颈部下横方向ヘラギリ	c,f	良好	淡灰色	底面高台付、底面ヘラギリ	底面高台付、底面ヘラギリ	底面高台付、底面ヘラギリ	底面高台付、底面ヘラギリ
5955 2号住	須	坏身	-	-	-	-	回転ヨコナデ	タタキ後回転ヨコナデ	b,c,f	良好	暗灰色	内面赤色顔料付着	内面赤色顔料付着	内面赤色顔料付着	内面赤色顔料付着
5956 2号住	須	甕	(17.6)	-	12.3	2.5	回転ヨコナデ	タタキ後回転ヨコナデ	b,c,e	良好	淡橙褐色	底面回転ヘラギリ	底面回転ヘラギリ	底面回転ヘラギリ	底面回転ヘラギリ
5957 2号住	土	甕	(16.0)	-	(10.4)	2.4	不明	回転ナデ	c,d,e	良好	淡黃褐色	底面回転ヘラギリ	底面回転ヘラギリ	底面回転ヘラギリ	底面回転ヘラギリ
5958 3号住	須	坏身	12.5	-	7.9	4.8	回転ヨコナデ	回転ナデ、内底面不定方向ナデ	b,c,f	良好	淡灰	淡灰色	淡灰色	淡灰色	淡灰色
5959 4号住	土	坏身	-	-	(9.0)	-	回転ヨコナデ	回転ナデ	a,b,c,e	良好	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色
5960 4号住	土	坏身	-	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	b,c,d,e	良好	淡茶灰色	淡茶灰色	淡茶灰色	淡茶灰色	淡茶灰色
5961 5号住	土	坏	(12.0)	-	-	-	ヨコナデ+ハケ	ヨコナデ	c,d,f	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色
5962 5号住	土	坏	(3.2)	-	-	-	手持ちヘラギリ	手持ちヘラギリ	c,d,f	良好	棕褐色	棕褐色	棕褐色	棕褐色	棕褐色
5963 6号住	土	坏	(12.8)	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	a,c,d	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色
5964 6号住	土	甕	(21.8)	-	-	-	不明	颈部下横方向ヘラギリ	a,b,c,e	良好	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色
5965 6号住	須	坏身	(12.0)	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ナデ	b,c	良好	青灰色	青灰色	青灰色	青灰色	青灰色
5966 6号住	須	坏身	-	-	-	-	不明	回転ヨコナデ	-	-	3.1	3.1	3.1	3.1	3.1

第68図28 包含層	須	环身 (11.8)	-	(8.2)	3.6	回転ヨコナデ	回転ナデ	c.f	良好	淡灰色	淡灰色	底面回転ヘラギ!木調整	
第68図29 包含層	須	环身 (12.2)	-	(8.0)	3.3	回転ヨコナデ	回転ナデ	c.f	良好	淡灰色	淡灰色	底面回転ヘラギ!	
第68図30 包含層	須	环身 -	-	(8.5)	-	回転ヨコナデ	回転ナデ	c.f	良好	淡灰色	淡灰色	底面回転ヘラギ!	
第68図31 包含層	須	环身 (15.0)	-	(9.4)	(5.1)	回転ヨコナデ	回転ナデ	c.f	良好	淡灰色	淡灰色	底面回転ヘラギ!	
第68図32 包含層	須	蓋	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ナデ	c.f	良好	暗灰色	暗灰色	底面回転ヘラギ!	
第68図33 包含層	須	皿	-	-	-	回転ヨコナデ	回転ナデ	c.f	良好	暗灰色	暗灰色	底面回転ヘラギ!	
第68図34 包含層	須	皿	13.6	-	11.0	2.1	回転ヘラギ!	回転ナデ	c.d	良好	暗灰色	暗灰色	底面回転ヘラギ!
第68図35 包含層	須	皿	-	-	(10.4)	-	回転ヨコナデ	回転ナデ	c.f	良好	暗灰色	暗灰色	底面回転ヘラギ!
第68図36 包含層	土	盤	-	-	-	-	指揮	布目痕残る	a.c	良好	暗褐色	暗褐色	底面回転ヘラギ!
第68図37 包含層	土	甕	(25.0)	-	-	-	ハケ後ナデ	ヘラケスリ	a.b.c.e	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	底面回転ヘラギ!
第68図38 包含層	土	甕	-	-	-	-	ヨコナデ	ヘラケスリ	a.b,c	良好	茶褐色	茶褐色	底面回転ヘラギ!
第68図39 包含層	土	甕	-	-	-	-	ハケ	ヘラケスリ	a,b,c	良好	暗褐色	暗褐色	底面回転ヘラギ!

第5表 尾瀬遺跡6次出土土器観察表

揮園番号	出土位置	種別	器種	口径	腹部最大径	底径	高さ(cm)	法量(cm) ()は復元径・残存高	調 整			色調	備 考
									内	外	面		
第72図1 1号住	須	环蓋	-	-	-	-	3.4	回転ナデ	回転ナデ	a.g	良好	灰白色	灰白色
第72図2 1号住	須	环身	-	-	-	-	2.5	回転ナデ	回転ナデ	a.g	良好	灰黑色	灰黑色
第72図3 1号住	須	环蓋	(16.4)	-	-	-	(2.7)	回転ヘラケスリ→回転ナデ	回転ナデ	a.b.g	良好	灰黑色	灰黑色
第72図4 1号住	須	环身	-	-	-	-	7.6	(1.7)	回転ナデ	b.g	不良	灰白色	灰白色
第72図5 1号住	土	高环	-	-	-	-	11.6	(5.2)	回転ナデ	b.g	不良	黄褐色	黄褐色
第72図6 1号住	土	蓋	(16.2)	18.2	-	-	(9.2)	不明	ヘラケスリ	b.g	不良	黄褐色	黄褐色
第72図7 1号住	土	蓋	22.8	-	-	-	(8.4)	ハケ	ヘラケスリ	a.b.d	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
第72図8 1号住	土	蓋	13.4	17.0	-	-	16.3	ハケ	ヘラケスリ	a.c.g	良好	赤褐色	赤褐色
第73図9 1号住	土	环身	(12.4)	-	5.2	3.3	回転ナデ	回転ナデ	a.g	良好	黄褐色	黄褐色	
第80図10 柱穴	土質	小皿	-	-	-	1.4	不明	不明	回転ナデ	a.g	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
第80図11 柱穴	土質	小皿	-	-	-	2.5	不明	不明	回転ナデ	a.d	良好	淡赤褐色	淡赤褐色
第80図12 2号掘P6	土質	小皿	8.8	-	6.4	1.6	不明	不明	回転ナデ	a.g	良好	暗黄褐色	暗黄褐色
第80図13 柱穴	土質	小皿	9.6	-	6.6	2.1	不明	不明	回転ナデ	a.d.f	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
第80図14 柱穴	土質	碗	(10.6)	-	(8.4)	2.9	ヘラケスリ	ヘラケスリ	a.f	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第80図15 柱穴	土質	小皿	-	-	(7.6)	(1.7)	不明	不明	回転ナデ	a.b.d	良好	暗褐色	暗褐色
第80図16 4号掘P7	土質	碗	13.8	-	9.2	3.1	不明	不明	回転ナデ	e.f	不良	黄褐色	淡黑褐色
第80図17 柱穴	土質	小皿	-	-	(12.0)	(1.3)	不明	不明	回転ナデ	a.b.d	良好	淡赤褐色	淡赤褐色
第80図18 柱穴	土質	小皿	(15.0)	-	(7.2)	2.6	不明	不明	回転ナデ	d.f	良好	赤褐色	赤褐色
第80図19 柱穴	土質	浅鉢	-	-	-	(4.4)	回転ナデ	回転ナデ	b.f	良好	暗褐色	暗褐色	
第80図20 柱穴	土質	浅鉢	11.0	-	9.8	3.3	不明	不明	回転ナデ	a.b.f	良好	淡褐色	淡褐色
第80図21 柱穴	須	环	-	-	8.0	(1.4)	回転ナデ	回転ナデ	a.b.f	良好	灰黑色	灰黑色	
第80図22 柱穴	青	碗	-	-	-	(2.9)	-	-	-	綴密	青绿色	青绿色	
第80図23 2号掘P3	白	碗	(10.0)	-	-	(3.4)	-	-	-	綴密	白色	白色	
第80図24 柱穴	青	碗	(14.0)	-	-	(5.0)	-	-	-	綴密	青绿色	青绿色	
第80図25 3号掘P3	陶	皿	(34.6)	-	-	(8.4)	ハケ→ナデ	-	-	a.g	良好	暗褐色	暗褐色

第80圖26	3号 柱穴	P8	陶 瓶	燒	-	-	(10.2)	不明	-	-	-	-	-
第80圖27	柱穴		染 碗	13.6	-	-	(4.0)	-	-	-	-	-	-
第80圖28	柱穴		染 碗	(15.4)	-	-	(5.4)	-	-	-	-	-	-
第80圖29	柱穴		染 碗	9.2	-	-	4.2	2.3	-	-	-	-	-
第80圖30	柱穴		染 碗	-	-	-	4.8	(1.7)	-	-	-	-	-

土器種別凡例

弥………弥生土器
土………土師器
須………須恵器
土質………土師質土器

青………青磁
白………白磁
陶………陶器
染………染付

第6表 平島遺跡D地点出土玉類観察表

	最大径(cm)	最大厚(cm)	穿孔径(cm)	重さ(g)	色調		最大径(cm)	最大厚(cm)	穿孔径(cm)	重さ(g)	色調
1	5.2	3.5	1.4	0.1	マリンブルー	58	3.1	1.8	0.9	0.1未満	マリンブルー
2	5.8	4.0	2.3.0	0.1	マリンブルー	59	3.3	1.5	1.1	0.1未満	マリンブルー
3	4.5	3.5	1.25	0.1未満	マリンブルー	60	3.0	1.7	0.7	0.1未満	マリンブルー
4	5.0	3.7	1.2	0.1未満	マリンブルー	61	3.8	2.7	0.8	0.1未満	マリンブルー
5	4.8	3.1	1.1	0.1未満	マリンブルー	62	3.7	1.7	1.7	0.1未満	マリンブルー
6	4.0	3.8	6.0	0.1未満	マリンブルー	63	3.6	2.4	0.7	0.1未満	マリンブルー
7	4.3	3.1	1.1	0.1未満	マリンブルー	64	3.5	1.8	1.7	0.1未満	マリンブルー
8	3.5	2.8	0.8	0.1未満	マリンブルー	65	3.6	2.2	1.7	0.1未満	マリンブルー
9	3.2	3.2	0.9	0.1未満	マリンブルー	66	3.6	1.9	0.9	0.1未満	マリンブルー
10	4.3	2.5	0.8	0.1未満	マリンブルー	67	3.5	1.6	1.2	0.1未満	マリンブルー
11	4.0	2.7	1.0	0.1未満	マリンブルー	68	3.4	2.4	1.0	0.1未満	マリンブルー
12	4.2	3.2	0.6	0.1未満	マリンブルー	69	3.3	2.0	0.9	0.1未満	マリンブルー
13	5.1	4.2	1.8	0.1	マリンブルー	70	3.2	2.0	1.2	0.1(-)	マリンブルー
14	4.6	2.5	0.5	0.1未満	マリンブルー	71	3.3	2.2	1.9	0.1(-)	マリンブルー
15	4.6	3.2	1.4	0.1未満	マリンブルー	72	3.5	2.1	1.0	0.1未満	マリンブルー
16	4.8	2.4	1.8	0.1未満	マリンブルー	73	2.8	1.4	1.2	0.1未満	マリンブルー
17	4.2	2.6	1.5	0.1未満	マリンブルー	74	2.9	1.5	1.0	0.1未満	マリンブルー
18	4.3	2.5	1.3	0.1未満	マリンブルー	75	2.5	2.8	0.8	0.1未満	マリンブルー
19	4.1	2.8	1.5	0.1未満	マリンブルー	76	2.5	2.7	0.8	0.1未満	マリンブルー
20	3.6	3.1	1.5	0.1未満	マリンブルー	77	3.1	2.0	1.1	0.1未満	マリンブルー
21	3.5	3.3	0.7	0.1未満	マリンブルー	78	2.8	2.2	1.2	0.1未満	マリンブルー
22	4.3	2.9	1.2	0.1未満	マリンブルー	79	2.9	2.1	0.8	0.1未満	マリンブルー
23	4.0	2.4	1.1	0.1未満	マリンブルー	80	2.7	1.7	0.7	0.1未満	マリンブルー
24	3.8	2.5	0.8	0.1未満	マリンブルー	81	3.0	1.8	0.9	0.1未満	マリンブルー
25	5.0	3.0	1.5	0.1	マリンブルー	82	2.6	2.1	1.5	0.1未満	マリンブルー
26	4.2	3.2	0.6	0.1未満	マリンブルー	83	2.8	2.2	1.4	0.1未満	マリンブルー
27	4.4	2.3	1.8	0.1未満	マリンブルー	84	2.8	2.1	0.8	0.1未満	マリンブルー
28	3.2	3.2	1.2	0.1未満	マリンブルー	85	3.3	2.4	0.7	0.1未満	マリンブルー
29	3.7	2.3	1.2	0.1未満	マリンブルー	86	3.2	1.7	0.9	0.1未満	マリンブルー
30	3.8	1.4	1.5	0.1未満	マリンブルー	87	3.4	2.0	1.1	0.1未満	マリンブルー
31	3.8	1.9	1.0	0.1未満	マリンブルー	88	3.4	1.9	1.2	0.1未満	マリンブルー
32	3.3	2.5	0.5	0.1未満	マリンブルー	89	3.0	2.1	0.8	0.1未満	マリンブルー
33	2.8	2.3	0.6	0.1未満	マリンブルー	90	3.3	1.6	0.8	0.1未満	マリンブルー
34	2.7	2.2	0.6	0.1未満	マリンブルー	91	3.4	1.8	1.0	0.1未満	マリンブルー
35	3.0	1.7	0.8	0.1未満	マリンブルー	92	3.3	1.8	0.8	0.1未満	マリンブルー
36	2.5	1.8	0.5	0.1未満	マリンブルー	93	3.2	1.6	1.2	0.1未満	マリンブルー
37	4.2	3.3	1.2	0.1未満	マリンブルー	94	2.7	2.4	1.2	0.1未満	マリンブルー
38	4.2	2.0	0.6	0.1未満	マリンブルー	95	2.7	1.9	1.2	0.1未満	マリンブルー
39	3.5	3.5	0.9	0.1未満	マリンブルー	96	3.1	2.0	0.8	0.1未満	マリンブルー
40	3.5	2.5	0.7	0.1未満	マリンブルー	97	2.5	2.1	0.9	0.1未満	マリンブルー
41	3.5	2.6	1.0	0.1未満	マリンブルー	98	2.8	1.7	0.8	0.1未満	マリンブルー
42	3.9	2.4	0.6	0.1未満	マリンブルー	99	3.0	3.0	1.2	0.1未満	マリンブルー
43	2.5	2.8	0.8	0.1未満	マリンブルー	100	2.8	1.9	0.8	0.1未満	マリンブルー
44	3.5	1.9	0.6	0.1未満	マリンブルー	101	2.9	1.5	1.0	0.1未満	マリンブルー
45	2.9	1.7	0.6	0.1未満	マリンブルー	102	2.7	2.1	1.0	0.1未満	マリンブルー
46	3.5	2.0	0.9	0.1未満	マリンブルー	103	2.8	1.2	1.2	0.1未満	マリンブルー
47	3.4	2.5	0.7	0.1未満	マリンブルー	104	2.9	1.6	0.6	0.1未満	マリンブルー
48	3.2	2.0	0.9	0.1未満	マリンブルー	105	2.7	1.8	0.9	0.1未満	マリンブルー
49	3.8	1.6	1.7	0.1未満	マリンブルー	106	2.0	2.2	0.7	0.1(-)	マリンブルー
50	3.7	1.8	1.2	0.1未満	マリンブルー	107	2.2	1.9	0.8	0.1未満	マリンブルー
51	3.5	2.2	0.9	0.1未満	マリンブルー	108	2.4	1.9	0.9	0.1未満	マリンブルー
52	3.5	2.0	0.9	0.1未満	マリンブルー	109	3.0	1.8	0.6	0.1未満	マリンブルー
53	2.8	2.5	0.8	0.1未満	マリンブルー	110	2.0	1.6	0.7	0.1未満	マリンブルー
54	3.2	2.1	0.7	0.1未満	マリンブルー	111	2.5	1.5	0.5	0.1未満	マリンブルー
55	3.3	2.0	0.7	0.1未満	マリンブルー	112	1.9	1.7	0.5	0.1未満	マリンブルー
56	3.2	1.8	0.8	0.1未満	マリンブルー	113	4.0	1.9	1.6	0.1未満	マリンブルー
57	3.1	2.0	0.7	0.1未満	マリンブルー						

第7表 塔ノ本古墳出土鉄器観察表

插図番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)()は復元径・残存高					備考	
				全長	刃部長	刃部幅	刃部最大厚	基部幅		
第27図1	石室内	鉄器	鉄鏃	(14.9)	2.0	0.9	0.3	(12.0)	0.6	0.4
第27図2	石室内	鉄器	鉄鏃	(3.9)	1.7	1.0	0.2	(2.2)	0.5	0.3
第27図3	石室内	鉄器	鉄鏃	(5.4)	2.0	1.3	0.2	(2.2)	0.6	長三角形式
第27図4	石室内	鉄器	鉄鏃	(7.0)	(1.7)	1.0	0.2	(2.2)	0.5	長三角形式
第27図5	石室内	鉄器	鉄鏃	(8.5)	3.1	0.8	0.2	(2.2)	0.6	長三角形式
第27図6	石室内	鉄器	鉄鏃	(6.4)	-	-	0.2	(2.2)	1.8	0.3
第27図7	石室内	鉄器	鉄鏃	(12.6)	1.5	2.8	0.2	(2.2)	1.4	0.4
第27図8	石室内	鉄器	鉄鏃	(5.7)	5.7	2.9	0.2	(2.2)	-	腸抉柳刃式、木質残存
第27図9	石室内	鉄器	鉄鏃	(7.5)	3.1	2.6	0.2	(2.2)	2.6	腸抉柳刃式
第27図10	石室内	鉄器	鉄鏃	(2.6)	4.6	2.6	0.2	(2.2)	2.5	腸抉柳刃式
第27図11	石室内	鉄器	鉄鏃	13.0	2.5	1.2	0.2	10.5	0.5	腸抉柳刃式
第27図12	石室内	鉄器	鉄鏃	(3.7)	-	-	(3.7)	0.9	0.5	基部片
第27図13	石室内	鉄器	鉄鏃	(4.9)	-	-	(4.9)	0.5	0.3	基部片、木質残存
第27図14	石室内	鉄器	鉄鏃	(2.9)	-	-	(2.9)	0.9	0.5	基部片、木質残存
第27図15	石室内	鉄器	鉄鏃	(6.3)	-	-	(6.3)	1.1	0.3	基部片
第27図16	石室内	鉄器	鉄鏃	(4.3)	-	-	(4.3)	0.7	0.4	基部片
第27図17	石室内	鉄器	鉄鏃	(4.4)	-	-	(4.4)	1.0	0.6	基部片
第27図18	石室内	鉄器	鉄鏃	(7.6)	-	-	(7.6)	0.6	0.4	基部片
第27図19	石室内	鉄器	小鏃片	(1.9)	-	-	-	-	-	幅2mm、厚さ1mm
第27図20	石室内	鉄器	小鏃片	(3.5)	-	-	-	-	-	幅3mm、厚さ2mm
第27図21	石室内	鉄器	小鏃片	(2.7)	-	-	-	-	-	径2mm
第27図22	石室内	鉄器	小鏃片	(1.5)	-	-	-	-	-	幅2mm
第27図23	石室内	鉄器	小鏃片	(10.0)	-	-	-	-	-	幅3mm、厚さ4mm
第27図24	石室内	鉄器	小鏃片	(2.6)	-	-	-	-	-	幅2mm
第27図25	石室内	刀子	刀子	22.6	15.7	1.0	0.5	6.9	1.0	木質残存
第27図26	石室内	鉄器	鉄刀	108.0	90.0	3.0	0.7	18.0	2.0	0.9

付編1 塔ノ本古墳出土赤色顔料の分析調査報告

別府大学教授 本田光子

1. はじめに

大分県日田市所在の塔ノ本古墳から出土した赤色物について、その材質と状態を知るために顕微鏡調査とSEM調査および蛍光X線分析を行った。

墳墓出土例に関する現在までの知見に寄れば出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄 $F\text{e}_2\text{O}_3$ を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀 HgS を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここでは、これら三種類の赤色顔料を考えて調査を行った。

2. 試料

依頼を受けた資料について、実体顕微鏡下で出来る限り調整（混入土砂等灰雑物の除去）し、赤色物を針先に付く程度の量を採り検鏡用に、残りを研和して蛍光X線分析に供した。X線分析試料には土砂がかなり含まれている。

3. 顕微鏡調査

顕微鏡により透過光・反射光40~400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類、二種以上の赤色顔料があれば混和の状態と相対量、灰雑物の有無等を観察するものである。三種類の赤色顔料は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる外観の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。朱粒子は、やや角張った塊状、落射光観察時に認められる独特の反射・光沢、透過光観察時の透明度および赤色の濃淡の調子等に特徴が認められる。ベンガラ粒子は、塊状、棒状、板（扁平）状、球状、不定形等様々な外観を持ち一様でない。

本試料には赤色顔料としてベンガラが認められた。出土ベンガラには透明な管状（パイプ）粒子を含む例があるが、本試料のベンガラには、いわゆるパイプ状粒子は含まれていなかった。

4. SEM調査

朱色物の種類、特にベンガラの種類と状態を調査するために行った。フィリップス社製XL20で観察を行った。ベンガラは不定形扁平、破碎状などの粒子からなり、パイプ状粒子は認められなかった。

5. 蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。別府大学設置の株堀場製作所製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MESSA500を使用し、15kV-440μA；50秒、50kV-20μA；50秒、真空、の条件により測定を行った。

赤色顔料の主成分元素としては朱であれば水銀、ベンガラであれば鉄であるので、2種の元素の有無のみ表中に記した。他にマンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されたが、それらはみな主として混入の土砂部分に由来すると考えられるので表中では省略した。但し、鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。なお、鉛丹の主成分元

素である鉛は検出されなかった。

6. 結果

表 試料一覧と分析結果

No.	試料採取位置	顕微鏡観察		蛍光X線分析		赤色顔料の種類
		ベンガラ	朱	鉄	水銀	
1	石室内東側	+	-	+	-	ベンガラ
2	石室内西側枕1	+	-	+	-	ベンガラ
3	石室内西側枕1	+	-	+	-	ベンガラ
4	石室内西側枕1	+	-	+	-	ベンガラ
5	石室内1号鉄剣横	+	-	+	-	ベンガラ
6	石室内1、2号鉄剣の間	+	-	+	-	ベンガラ
7	石室内南側鉄鏃群下	+	-	+	-	ベンガラ
8	石室内南側鉄鏃周辺	+	-	+	-	ベンガラ
9	石室内中央部南側1	+	-	+	-	ベンガラ
10	石室内中央部南側2	+	-	+	-	ベンガラ
11	石室蓋石内面	+	-	+	-	ベンガラ
12	石室側壁内面	+	-	+	-	ベンガラ

付編2 祇園原遺跡2次調査出土人骨について

舟橋京子¹⁾・田中良之²⁾

1) 九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座

2) 九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座

1. はじめに

大分県日田市祇園原遺跡2次調査において近世人骨が出土し、調査を担当した日田市教育委員会より九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座へと人骨調査の依頼があり、金宰賢助手(現東亜大学校講師)が現地へ赴き、調査および取り上げを行った。人骨は、その後九州大学へと搬送され、同講座において整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。

なお、人骨は現在九州大学大学院比較社会文化研究院考古人類資料室に保管されている。

2. 出土状況

【1号墓（1号人骨）】

長方形の墓壙内の北側から頭蓋骨が出土し、頭蓋骨の南側からは下顎骨が、さらに南側からは前腕と考えられる長管骨片が出土している。墓壙の南側からは下肢骨が出土している。頭蓋骨は顔面を西に向けた状態で出土している。下肢は足先を南側にし、膝関節を屈曲した状態で出土しており、保存はやや不良ではあるものの現位置を保っていると考えられる。したがって、本人骨は頭位北向きの右側臥屈葬であると考えられる。

【2号墓（2号人骨）】

長方形の墓壙内の中央よりやや北側から頭蓋骨・下肢骨がまとまった状態で出土している。頭蓋骨は顔面を下に向けた状態であり、頭蓋骨の下からは下顎骨・鎖骨・上肢が出土している。下肢骨は頭蓋骨よりも低いレベルから、足先を西に向かって立膝の状態で出土している。したがって、本人骨は正面西向きの坐葬であり、軟部組織の腐朽に伴い、頭蓋骨および下顎骨が前方に崩落したものと考えられる。

3. 人骨所見

1号人骨

【保存状態】

保存状態は不良である、頭蓋骨は、鱗状縫合・ラムダ縫合・後頭乳突縫合を含む右側頭骨片・右頭頂骨片・後頭骨片が遺存しており、左右の錐体も遺存している。下顎骨は右犬歯から左第1大臼歯にかけての舌側の破片が遺存している。ラムダ縫合は遺存部位に限っては外板は開いており、内板は閉鎖している。歯牙も一部遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/ / / / /	C	/ /		I ¹	/ / / / / / / /	
/ / / / /	P ₂	C	/ /	I ₁	I ₂	C / / / / / / /

○歯槽開放 ×歯槽閉鎖 ∕欠損 △歯根のみ

・遊離歯 () 未萌出 C齶歯 以下同様

歯牙咬耗度は柄原（1957）の3°である。

下肢骨は、右寛骨の耳状面前面付近の破片が遺存しており、右大腿骨骨体部の後面部、および左右不明大腿骨骨体片が遺存している。また、左右脛骨の骨体片、左腓骨遠位側骨体片も遺存している。他にも出土位置から前腕と推定される部位同定不能な長管骨片が遺存している。

【年齢・性別】

年齢は、歯牙咬耗度およびラムダ縫合の癒合状況から、熟年以上と推定される。性別は、大腿骨粗線の発達が強いことから、男性の可能性が高い。

2号人骨

保存状態はやや不良である。しかし、頭蓋骨が、後頭部・左側頭部・左右頬骨弓付近を除いて、ほぼ完全に遺存している。遺存部位は、前頭骨、左右頭頂骨、右側頭骨、左乳様突起周辺、後頭骨の頭蓋底付近、左右上顎骨、左右頬骨である。眼窩上隆起・乳様突起の発達は弱いものの、前頭結節の発達も見られない。頭蓋主縫合は、遺存部分に限っては外板は開いているものの、内板はほぼ完全に閉鎖している。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

$\bigcirc \times \overset{c}{M}^1 \overset{c}{P}^2 P^1 C I^2 \bigcirc$	$I^1 I^2 C \bigcirc \overset{c}{P}^2 \overset{c}{M}^1 \times M^3$
$M_3 \times M_1 P_2 P_1 \bigcirc \bigcirc \bigcirc$	$\bigcirc I_2 \bigcirc P_1 P_2 M_1 \times M_3$

歯牙咬耗度は柄原（1975）の1° b～2° aである。

軀幹骨は、第1頸椎、第2頸椎の歯突起付近、第3・第4頸椎の椎体、右鎖骨および肋骨片が遺存している。上肢骨は、左右の上腕骨骨体片、右橈骨の遠位側3分の2程度、左橈骨骨体片が遺存している。下肢骨は、左右大腿骨骨体部・左脛骨骨体部片が遺存しており、大腿骨の粗線の発達は弱い。

【年齢・性別】

年齢は、歯牙咬耗度および頭蓋主縫合の癒合状況から、成年と推定される。性別は、前頭骨眼窩上隆起および乳様突起の発達が弱く、大腿骨粗線も発達していないことから、女性と判定される。

【形質】

頭蓋および顔面の計測値は表1のとおりである。本人骨の頭幅高示数は狭頭に分類され、ウィルヒョウ顔示数は正顎に分類され、ウィルヒョウ上顎示数は低上顎に分類される。眼窓示数は高眼窓、鼻示数は中鼻に分類される。歯槽側面角は超突顎に分類される。

橈骨の計測値は表2の通りである。

【特記事項】

上顎左第1小臼歯の歯槽窩は深さ3～4mmまで埋没しており、歯牙が植立していた可能性は低く、生前に歯牙が脱落していた可能性が考えられる。一方で、歯槽骨には歯周疾患の痕跡を示すような歯槽低下・粗像は見られない。また、歯牙の脱落につながるような重度の齶歯が見られる場合、ほとんどの場合において脱落歯の隣接歯の脱落歯に接する面にも齶歯が見られるが、本個体の上顎左第1小臼歯の隣接歯の隣接面には齶歯は見られない。したがって、この上顎左第1小臼歯に関しては、通常の歯科疾患・歯周疾患による生前歯牙喪失の可能性は低い。

このような場合、意図的抜歯の可能性が想起され、近代以降も長崎県において抜歯風習が見られたという報告がなされているが（坂田1973）、祇園原と同地域の近世人骨に抜歯の報告例は見られず、本例

のみをもって抜歯風習の存在を指摘することは困難である。

以上から、この上顎左第1小臼歯は、通常の歯科疾患・歯周疾患による脱落ではないと考えられるものの、歯種と近世という時期を考慮すると齶歯が重度にいたる前に意図的に抜歯した可能性もある。しかし、民俗例も散見されることから、風習的抜歯の可能性が全く否定されるものでもない。したがって、今後の類例の増加を待つて改めて検討すべきであろう。

4. まとめ

以上、出土人骨についての記載・報告を行ってきた。本遺跡出土人骨は個体数も少なく、計測に耐えうる人骨は1体のみであり、祇園原の近世人集団としての形質的特徴の抽出は困難であった。

参考までに2号人骨と中世・近世・現代人骨との形質の比較を行うと（表3）、計測値に差は見られるものの、頭幅高示数・顔示数（V）・上顔示数（V）に関しては他の近世人集団と同様狭頭・正顔・低上顎に分類される。眼窓幅に大きな差は見られないものの、眼窓高は高い傾向を示して、その結果眼窓示数が北部九州の席田青木・天福寺や関東湯島の近世人集団よりも高い値となっている。また、歯槽性突顎が見られ、これは中世人の特徴とされるものであるが、本個体は中世吉母浜集団（過突顎）よりも更に過度の超突顎に分類される。したがって、頭蓋骨の計測値に基づく特徴に関しては、過度の歯槽性突顎を除いては他の近世人集団と大きな違いは見られない。表2のとおり、橈骨に関しては他の近世人集団と比較するとやや細く、華奢な傾向が見られるが、骨体の断面形状に扁平性等は認められない。

ただ、祇園原遺跡に関しては1次調査において多数の近世人骨が出土しているため、祇園原集団としての形質的特徴の抽出は1次調査分の整理・分析の結果とあわせて行うこととした。

最後に、本報告に当たり、日田市教育委員会各位にはご便宜を賜り、かつご迷惑をおかけした。深謝したい。また、九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座端野晋平・平美典両氏には人骨整理の際多くのご助力をいただいた。あわせて感謝したい。

参考文献

- 遠藤萬里・北条輝幸・木村賛,1967：四肢骨,増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体.
- 原田忠昭,1954：現代西南日本人頭骨の人類学的研究,人類学研究,1.
- Martin-Saller,1957:Lehrbuch der Anthropologie.Bd.I.Gustav Fischer Verlag.Stuttgart.
- 講口靜男,1957：現代九州日本人前腕骨の人類学的研究,人類学研究,4.
- 森田茂・河越逸行,1960：湯島無縫坂出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究,人類学雑誌,67.
- 中橋孝博,1987：福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨,人類学雑誌,95.
- 中橋孝博・永井昌文,1985：IV 人骨,吉母浜遺跡.
- 坂田邦洋,1973：現代人の風習的抜歯,考古学ジャーナル,89.
- 柄原博,1957：日本人歯牙の咬耗に関する研究,熊本医学会雑誌,31.補冊4.
- 脇達也,1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人頭骨の研究,熊本医学会雑誌,4

第1表 頭蓋計測値 (mm)

Martin No.	項目	2号人骨 (女性)
5	頭蓋基底長	94
8	頭蓋最大幅	124
9	最小前頭幅	84
11	兩耳幅	113
7	大後頭孔長	33.5
17	Ba-Bi高	136
24	横弧長	338
26	正中矢状前頭弧長	22.6
29	正中矢状前頭弧長	111.2
40	頸長	170
43	上頸幅 (95.4)	43
44	両眼窩幅	91
46	中眼幅	88
47	額高	107.3
48	上頸高	64
51	眼窩幅(右)	40.5
52	眼窩高(右)	36
54	鼻幅	22.1
55	鼻高	45.5
72	前側面角	74°
73	鼻側面角	79°
74	齒槽側面角	53°
50	前眼窩幅	18
F	鼻根横弧長	22
50/F	鼻根彎曲示数	81.8
57	鼻骨最小幅	4.4
17/8	頭幅最高示数	109.7
47/46	顎示数(V)	121.9
48/46	上顎示数(V)	72.7
52/51	眼窩示数(右)	88.9
54/55	鼻示数	48.6
65	下顎頭間幅	(106)
66	下顎角幅	(94)
68	下顎骨長	67
69	才ドガイ孔	26
69(3)	下顎体厚(右)	9.5
70	下顎枝高(右)	50
71	下顎枝幅(右)	29

第2表 構骨(mm)

Martin No.	項目	2号人骨 (女性)
3	頭蓋最小周	33
4	骨体横径	14.6
4a	骨体中央横徑	12.3
5	骨体矢状徑	9.5
5a	骨体中央矢状徑	9.6
5/4	骨体断面示数	65.1
5a/4a	中央断面示数	78.0

1) 中橋(1993); 2) 中橋(1987); 3) 脳(1970); 4) 遠藤他(1967); 5) 中橋・永井(1985); 6) 森口(1957)

第3表 頭蓋計測値(mm)

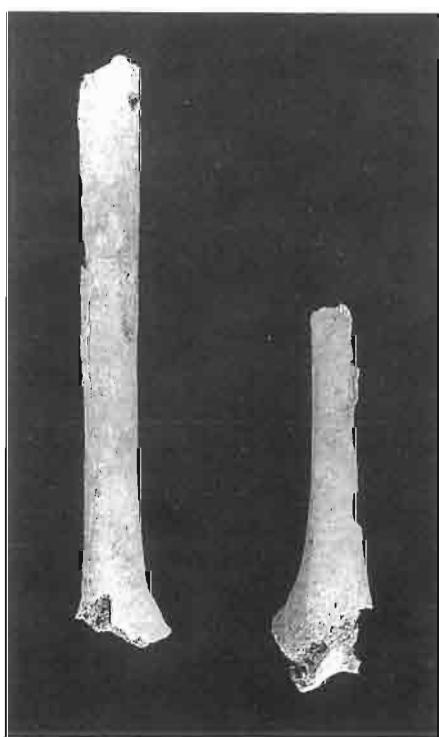
Martin No.	項目	2号人骨 (女性)	席田青木 (近世)	天福寺2 (近世)	桑島3 (近世)	江戸4 (近世)	吉母浜5 (中世)	九州6 (現代)
8	頭蓋最大幅	124	28	133.0	38	133.5	4	128.5
17	Ba-Bi高	136	24	132.4	35	132.7	4	132.0
17/8	頭幅高示数	109.7	23	100.6	35	99.4	4	102.9
46	中眼幅	88	20	95.8	25	95.5	2	91.6
47	額高	107.3	12	114.9	15	115.9	2	117.7
48	上額高	64	14	67.6	22	68.8	2	71.4
47/46	顎示数(V)	121.9	12	120.9	15	120.9	2	128.6
48/46	上顎示数(V)	72.7	12	71.0	22	71.8	2	78.0
51	眼窩幅(左)	40.5(右)	19	41.3	30	40.5	2	39.8
52	眼窩高(左)	36(右)	19	33.6	30	34.3	2	34.7
52/51	眼窩示数(左)	88.9(右)	19	81.5	29	84.8	2	87.3
54	鼻幅	22.1	25	25.8	26	25.3	2	24.2
55	鼻高	45.5	24	52.8	28	49.9	2	49.9
54/55	鼻示数	48.6	24	52.8	26	51.0	2	48.4
65	下顎頭間幅	(106)	48.6	24	52.8	26	50	49.2
66	下顎角幅	(94)	74	10	84.7	18	82.5	2
68	下顎骨長	67	53	10	68.5	17	65.0	2
69	才ドガイ孔	26						
69(3)	下顎体厚(右)	9.5						
70	下顎枝高(右)	50						
71	下顎枝幅(右)	29						

1) 原田(1954)



2号頭蓋骨（側面觀）

2号頭蓋骨（正面觀）



2号下肢骨

報 告 書 抄 錄

ふりがな 書名	ひらいせきDちてん、とうのもとこふん、ぎおんばるいせきにじ、ながさこいせきCちてん、ながさこいせきDちてん、おこぎいせきろくじ 平島遺跡D地点、塔ノ本古墳、祇園原遺跡2次、長迫遺跡C地点、長迫遺跡D地点、尾漕遺跡6次
副書名	市道田島有田線改良工事に伴う発掘調査報告書
巻次	2
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	28
編著者名	若杉竜太、土居和幸、行時志郎、吉田博嗣、渡邊隆行
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2001年3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらしまいせきDちてん 平島遺跡D地点	おおいた ひた 大分県日田市 おおあざりた 大字有田 あざすきざき 字スキザキ1148	44204-6				19970613～ 19970731	1100m ²	
とうのもとこふん 塔ノ本古墳	おおいた ひた 大分県日田市 おおあざりた 大字有田 あざおその 字尾其150	44204-6				19970819～ 19980630	1250m ²	
ぎおんばるいせきにじ 祇園原遺跡2次	おおいた ひた 大分県日田市 おおあざりた 大字有田 あざおその 字尾其1176-1	44204-6				19980217～ 19980520	1375m ²	市道建設
ながさこいせきCちてん 長迫遺跡C地点	おおいた ひた 大分県日田市 おおあざりた 大字有田 あざながさこ 字長迫1176ほか	44204-6				19980417～ 19980906	3000m ²	
ながさこいせきDちてん 長迫遺跡D地点	おおいた ひた 大分県日田市 おおあざりた 大字有田 あざねこぎ 字尾漕1063ほか	44204-6				19970919～ 199801215	480m ²	
おこぎいせきろくじ 尾漕遺跡6次	おおいた ひた 大分県日田市 おおあざりた 大字有田 あざみもり 字三森1036-1	44204-6				19990226～ 19990331	610m ²	

所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ひらしまいせきDちてん 平島遺跡D地点	墓地	弥生 古墳	大型成人用甕棺墓 臺 土坑 周溝 溝 ピット	3基 4基 1基 1基 1条	弥生土器、ガラス製小玉 弥生土器 須恵器・土師器
とうのもとこふん 塔ノ本古墳	墓地	古墳	古墳 構穴式石室	1基	鉄刀・鉄鎌・須恵器・土師器 寛永通宝・崇寧通宝
ぎおんばるいせきにじ 祇園原遺跡2次	集落		掘立柱建物 土坑 柵列	8棟 1基 1列	
ながさこいせきCちてん 長迫遺跡C地点	集落	古墳 奈良 平安 中世 近世	竪穴住居跡 掘立柱建物 溝 土坑 竪穴住居跡 掘立柱建物 竪穴住居跡 溝 溝	47軒 9棟 4条 2基 6軒 2棟 1軒 1条 1条	須恵器・土師器 須恵器・土師器 土師器 青磁 染付
ながさこいせきDちてん 長迫遺跡D地点	集落	奈良	竪穴住居跡 土坑 柱穴 溝状遺構	6軒 1基 多数 1条	須恵器・土師器 土師器 鉄器
おこぎいせきろくじ 尾漕遺跡6次	集落	古墳 奈良 中世 近世	竪穴住居跡 柱穴 掘立柱建物 掘立柱建物 土坑	1軒 多数 4棟 2棟 2基	須恵器・土師器 須恵器・土師器 土師質土器・青磁・白磁・染付 染付・寛永通宝

平島遺跡D地点 塔ノ本古墳 祇園原遺跡2次
長迫遺跡C地点 長迫遺跡D地点 尾漕遺跡6次

日田市埋蔵文化財調査報告書

第28集

平成13年3月19日

発 行 日田市教育委員会

大分県日田市田島2丁目6-1

印 刷 日田時報紙器印刷(株)

大分県日田市二串町345-3

平島遺跡D地点

塔ノ本古墳

祇園原遺跡2次

長迫遺跡C地点

長迫遺跡D地点

尾瀬遺跡6次

日任古墳調査報告書第2号